

茨城県教育財団文化財調査報告第103集

一般国道6号東水戸道路改築工事  
地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

差 洪 遺 跡

平成7年9月

建 設 省  
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第103集

# 一般国道6号東水戸道路改築工事 地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

さ しぶ い せき  
差 洪 遺 跡

平成7年9月

建 設 省  
財団法人 茨城県教育財団

## 序

一般国道6号・50号・51号の交通渋滞の解消と水戸周辺地域と海浜地区の相互連絡の強化を目的に、一般国道6号の自動車専用道路として、東水戸道路の改築事業が建設省によって、推進されております。

また、東水戸道路は北関東自動車道と接続し、常陸那珂港と北関東の主要都市を結ぶ国土開発幹線自動車道となり、北関東の内陸部と茨城県の海岸部の交流をさらに深めるものと期待されております。その東水戸道路の改築工事予定地内に差渋遺跡は所在しております。

財団法人茨城県教育財団は、建設省から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成5年10月から平成6年3月までの6か月にわたる発掘調査を実施いたしました。

本書は、差渋遺跡の調査成果を収録したものであります。今回の調査により、当地域の縄文時代早期の住居跡や弥生時代中期の集団墓跡のほぼ全容を把握することができ、良好な研究資料を収録することができました。本書が、郷土の歴史の理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として、活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理を進めるにあたり、委託者である建設省からいただいた多大な御協力に対し心から感謝申し上げます。

また、茨城県教育委員会、ひたちなか市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力をいただいたことに、衷心より感謝の意を表します。

平成7年9月

財団法人 茨城県教育財団  
理事長 橋 本 昌

# 例 言

- 1 本書は、平成5年度に建設省の委託により、財団法人茨城県教育財団が実施したひたちなか市部田野字差  
 渋2921番地ほかに所在する差渋遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 差渋遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	磯 田 勇 橋 本 昌	昭和63年6月～平成7年3月 平成7年4月～
副 理 事 長	角 田 芳 夫 小 林 秀 文 中 島 弘 光	平成3年7月～平成6年3月 平成6年4月～ 平成7年4月～
専 務 理 事	中 島 弘 光	平成5年4月～平成7年3月
常 務 理 事	一 木 邦 彦	平成7年4月～
事 務 局 長	藤 枝 宣 一 齋 藤 紀 彦	平成4年4月～平成7年3月 平成7年4月～
埋 蔵 文 化 財 部 長	安 藏 幸 重	平成5年4月～
埋 蔵 文 化 財 部 長 代 理	河 野 佑 司	平成6年4月～
企 画 管 理 課	課 長	水 飼 敏 夫 平成4年4月～
	課 長 代 理	根 本 達 夫 平成7年4月～（平成6年4月～平成7年3月係長）
	主 任 調 査 員	川 井 正 一 平成5年4月～平成6年3月
	主 任 調 査 員	海 老 澤 稔 平成6年4月～
	主 事	杉 山 秀 一 平成4年4月～平成6年3月
経 理 課	課 長	小 幡 弘 明 平成5年4月～
	主 査	鈴 木 三 郎 平成7年4月～（平成5年4月～平成7年3月課長代理）
	課 長 代 理	大 高 春 夫 平成7年4月～（平成6年4月～平成7年3月係長）
	主 任	飯 島 康 司 平成4年4月～平成6年3月
	主 任 主 事	小 池 孝 平成7年4月～ 軍 司 浩 作 平成5年4月～
調 査 課	課長(部長兼務)	安 藏 幸 重 平成5年4月～
	調 査 第 四 班 長	和 田 雄 次 平成5年度
	主 任 調 査 員	小 島 敏 平成5年10月～平成6年3月調査
	調 査 員	檜 村 宣 行 平成5年10月～平成6年3月調査
整 理 課	課 長	山 本 静 男 平成7年4月～
	主 任 調 査 員	檜 村 宣 行 平成7年度整理・執筆・編集

- 3 本書に使用した記号等については、凡例を参照されたい。
- 4 本書の作成にあたり、弥生時代の土壌墓の性格と弥生式土器の編年的位置付けについては馬目順一氏（いわき市教育文化事業団理事）に、貝輪の種類同定については西本豊弘氏（国立歴史民俗博物館助教授）に御指導をいただいた。また、福島県の弥生時代中期の土器の実見に当たっては森幸彦氏（福島県立博物館学芸

員)と櫻村友延氏(いわき市教育文化事業団),堀金靖氏(会津若松市教育委員会)に御協力を得た。

5 発掘調査及び出土遺物の整理に際して御指導・御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し,深く感謝の意を表します。

6 遺跡の概略

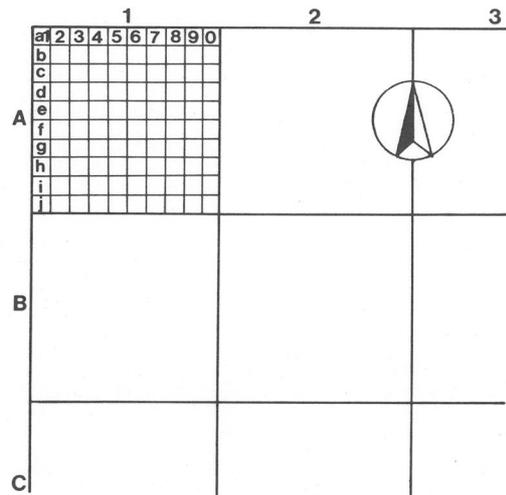
ふりがな	いっばんこくどうろくごう ひがしみとどうろかいちくこうじちない まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ						
書名	一般国道6号東水戸道路改築工事地内埋蔵文化財調査報告書						
副書名	差洪遺跡						
巻次	Ⅲ						
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告						
シリーズ番号	第103集						
著者名	櫻村 宣行						
編集機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587						
発行年月日	西暦 1995(平成7)年9月30日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村 遺跡番号					
さしほ遺跡	茨城県ひたちなか市部田野あざさしほ字差洪2921番地ほか	ひたちなか市 082210	36度 22分 09秒	140度 34分 40秒	19931001~ 19930331	8,824㎡	一般国道6号東水戸道路改築工事に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
さしほ遺跡		旧石器時代	集石遺構1か所	礫, 剥片	茨城の弥生時代中期後半の墓制や土器型式が東北地方南部と深いかわりがあることを示す資料。		
	集落跡	縄文時代(早期) 平安時代	竪穴住居跡2軒 土坑1基	縄文式土器片, 礫			
	墓跡	弥生時代(中期)	竪穴住居跡1軒 土壇墓32基, 炉穴1基, 土器棺墓2基, 土坑10基	土師器, 須恵器 弥生式土器 石器(鍬・磨製石斧) 石製品(管玉・勾玉) 貝製品(貝輪)			
		近代	防空壕跡1か所	瓶			
	不明		土坑71基, 溝1条				

# 凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標を用いて区画し、X軸(南北)+41,320m、Y軸(東西)+66,760mの交点を基準点とした。

大調査区は、この基準点を基に東西・南北各々40mずつ平行移動して大調査区を設定し、さらに、大調査区を東西・南北に各々10等分して、4m方眼の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、北から南へ「A」・「B」・「C」…、西から東へ「1」・「2」・「3」…とし、「A1」区・「B2」区と呼称した。小調査区も同様に北から南へ「a」・「b」・「c」…「j」、西から東へ「<sub>1</sub>」・「<sub>2</sub>」・「<sub>3</sub>」…「<sub>0</sub>」と小文字を付し、位置を表示する場合は大調査区と合わせて、A1b<sub>1</sub>区・A2b<sub>2</sub>区のように呼称した。



調査区呼称方法概念図

2 遺構・遺物・土層に使用した記号は、以下のとおりである。

- ・遺構 住居跡…S I, 防空壕…S X, 土坑…S K, 溝…S D, 炉穴…F P, ピット…P
- ・遺物 土器…P, 土製品…D P, 石器・石製品…Q, 貝製品…N
- ・土層 攪乱…K

3 遺構・遺物の実測図中の表示は、以下の通りである。



- 土器 □ 石器・石製品

4 土層観察における色相・含有物の量の判定については、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著・日本色研事業株式会社)を使用した。

5 遺構・遺物実測図の作成方法と掲載方法については、以下の通りである。

- (1) 遺跡の全体図は縮尺200分の1、防空壕は120分の1、住居跡や土坑、炉穴等は縮尺60分の1にした。
- (2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては、個々に $S = 1 / \bigcirc$ と表示した。
- (3) 土器の計測値のAは口径を、Bは器高、Cは底径、Dは高台径、Eは高台高、Fはつまみ径、Gはつまみ高を示した。また、( )は現存値を、[ ]は推定値を示した。
- (4) 備考の欄は、土器の残存率や実測(P)番号、出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 遺 跡	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	7
1 竪穴住居跡	7
2 土壙墓	14
3 土器棺墓	36
4 炉穴	38
5 溝	38
6 土坑	41
7 集石遺構	49
8 防空壕跡	50
9 遺構外出土遺物	52
第4節 まとめ	64
付章 土壌のリン分析について	68

## 插图目次

第1图	差洪遗迹周边遗迹位置图	5	第36图	第84号土壤墓实测图	24
第2图	差洪遗迹调查地形图	6	第37图	第85号土壤墓实测图	25
第3图	基本土层图	7	第38图	第85号土壤墓出土遗物实测·拓影图	26
第4图	第1号住居迹实测图	8	第39图	第86号土壤墓实测图	26
第5图	第1号住居迹出土遗物实测图	9	第40图	第86号土壤墓出土遗物实测·拓影图	27
第6图	第2号住居迹实测图	10	第41图	第87号土壤墓实测图	27
第7图	第2号住居迹出土遗物实测图	11	第42图	第87号土壤墓出土遗物拓影图	27
第8图	第3号住居迹实测图	13	第43图	第88号土壤墓实测图	27
第9图	第3号住居迹出土遗物实测图	13	第44图	第88号土壤墓出土遗物实测·拓影图	28
第10图	第39号土壤墓实测图	14	第45图	第89号土壤墓实测图	28
第11图	第40号土壤墓实测图	14	第46图	第89号土壤墓出土遗物拓影图	28
第12图	第40号土壤墓出土遗物实测·拓影图	14	第47图	第90号土壤墓实测图	29
第13图	第41号土壤墓实测图	15	第48图	第90号土壤墓出土遗物实测·拓影图	29
第14图	第41号土壤墓出土遗物拓影图	15	第49图	第91号土壤墓实测图	30
第15图	第42号土壤墓实测图	15	第50图	第91号土壤墓出土遗物实测·拓影图	30
第16图	第42号土壤墓出土遗物实测·拓影图	16	第51图	第92号土壤墓实测图	30
第17图	第43号土壤墓实测图	16	第52图	第92号土壤墓出土遗物实测·拓影图	31
第18图	第43号土壤墓出土遗物实测·拓影图	17	第53图	第95号土壤墓实测图	31
第19图	第44号土壤墓实测图	18	第54图	第95号土壤墓出土遗物实测·拓影图	31
第20图	第44号土壤墓出土遗物实测·拓影图	18	第55图	第96号土壤墓实测图	32
第21图	第47A·B号土壤墓实测图	19	第56图	第96号土壤墓出土遗物拓影图	32
第22图	第47A·B号土壤墓出土遗物实测·拓影图	19	第57图	第97号土壤墓实测图	33
第23图	第48号土壤墓实测图	20	第58图	第97号土壤墓出土遗物拓影图	33
第24图	第48号土壤墓出土遗物拓影图	20	第59图	第100号土壤墓实测图	33
第25图	第51号土壤墓实测图	21	第60图	第100号土壤墓出土遗物实测·拓影图	33
第26图	第51号土壤墓出土遗物拓影图	21	第61图	第106号土壤墓实测图	34
第27图	第53号土壤墓实测图	21	第62图	第106号土壤墓出土遗物实测·拓影图	34
第28图	第53号土壤墓出土遗物拓影图	21	第63图	第107号土壤墓实测图	35
第29图	第58号土壤墓实测图	22	第64图	第108号土壤墓实测图	35
第30图	第59号土壤墓实测图	22	第65图	第109号土壤墓实测图	36
第31图	第59号土壤墓出土遗物实测·拓影图	23	第66图	第94号土壤实测图	36
第32图	第68号土壤墓实测图	24	第67图	第94号土壤出土遗物实测·拓影图	36
第33图	第68号土壤墓出土遗物拓影图	24	第68图	第117号土壤实测图	37
第34图	第69号土壤墓实测图	24	第69图	第117号土壤出土遗物实测·拓影图	37
第35图	第69号土壤墓出土遗物拓影图	24	第70图	第1号炉穴实测图	38

第71図	第1号溝断面実測図	39	第88図	第38号土坑実測図	45
第72図	第1号溝出土遺物実測・拓影図	40	第89図	第57号土坑実測図	45
第73図	第2号土坑実測図	41	第90図	第57号土坑出土遺物拓影図	45
第74図	第2号土坑出土遺物拓影図	41	第91図	第104号土坑実測図	45
第75図	第3号土坑実測図	41	第92図	第1号集石遺構実測図	49
第76図	第3号土坑出土遺物拓影図	42	第93図	第1号集石遺構出土遺物実測図	49
第77図	第7号土坑実測図	42	第94図	第1号防空壕跡実測図	51
第78図	第7号土坑出土遺物実測・拓影図	42	第95図	第1号防空壕跡出土遺物実測・拓影図	52
第79図	第8号土坑実測図	43	第96図	遺物集中地点出土遺物実測・拓影図(1)	53
第80図	第8号土坑出土遺物拓影図	43	第97図	遺物集中地点出土遺物拓影図(2)	54
第81図	第16号土坑実測図	43	第98図	遺物集中地点出土遺物実測図(3)	55
第82図	第19号土坑実測図	43	第99図	遺構外出土遺物実測・拓影図(1)	58
第83図	第19号土坑出土遺物拓影図	43	第100図	遺構外出土遺物拓影図(2)	59
第84図	第20号土坑実測図	44	第101図	遺構外出土遺物実測・拓影図(3)	60
第85図	第23号土坑実測図	44	第102図	土墳墓の長軸方向	66
第86図	第23号土坑出土遺物拓影図	44	第103図	土墳墓の平面グラフ	66
第87図	第36号土坑実測図	44	付 図	差渋遺跡全体図	

## 表 目 次

表1	差渋遺跡周辺遺跡一覧表	4	表3	差渋遺跡土坑一覧表	46~48
表2	差渋遺跡住居跡一覧表	13			

## 写真図版目次

PL 1	遺跡遠景, 遺跡全景	44号土墳墓遺物出土状況, 第47A・B・	
PL 2	第1・2号住居跡, 第1号住居跡遺物出土状況	48号土墳墓	
PL 3	第2号住居跡遺物出土状況, 第3号住居跡, 土墳墓B群	PL 8	第53・58・59・84号土墳墓土層断面, 第58・59・68・69・84号土墳墓
PL 4	土墳墓B・C・D・E群	PL 9	第91・92・95・96号土墳墓, 第91・92・95・96号土墳墓土層断面
PL 5	土墳墓E・F群	PL 10	第85~89号土墳墓, 第85・88号土墳墓遺物出土状況, 第88号土墳墓土層断面
PL 6	第39・40・42号土墳墓, 第39~41号土墳墓土層断面, 第41・42号土墳墓遺物出土状況	PL 11	第90・97・100・106・107号土墳墓, 第90・97・100号土墳墓土層断面
PL 7	第42・43・48号土墳墓土層断面, 第43・	PL 12	第108・109号土墳墓, 第94・117号土墳,

- |        |   |                                      |
|--------|---|--------------------------------------|
|        | 第94号土壤遺物出土状况, 第1号炉穴,<br>第1号溝                                      | P L 18 溝,防空壕,遺物集中地点,遺構外出土遺物          |
| P L 13 | 第1号溝土層断面, 第2・3・8・16・<br>19・20・36号土坑                               | P L 19 出土土器(1)                       |
| P L 14 | 第104号土坑, 旧石器剥片出土状况, 旧<br>石器集石出土状况, 石槍出土状况, 第1<br>号防空壕跡全景, 第1号防空壕跡 | P L 20 出土土器(2)                       |
| P L 15 | 第1・2号住居跡出土遺物  | P L 21 出土土器(3)                       |
| P L 16 | 第2・3号住居跡, 土壤墓出土遺物   | P L 22 出土土器(4)                       |
| P L 17 | 土壤墓, 土壤, 溝出土遺物  | P L 23 出土土器(5)                       |
|        |   | P L 24 出土土器(6)                       |
|        |   | P L 25 出土土器(7)                       |
|        |   | P L 26 出土石器, 石製品, 金属製品, 古錢, 自<br>然遺物 |

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経過

一般国道6号東水戸道路は、経済流通港湾及び首都圏における電力供給用のエネルギー港湾としての常陸那珂港と北関東の主要都市を結ぶ北関東自動車道と連結する〈仮称〉国道245号インターチェンジから〈仮称〉元石川インターチェンジまでの11.9kmの部分結ぶ道路である。

建設省（関東地方建設局常陸工事事務所）は、昭和60年度から旧常澄村と常陸那珂地区を含めた水戸市周辺の道路改築事業に着手した。

工事に先立ち、平成5年1月7日に建設省関東地方建設局常陸工事事務所長は、茨城県教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財の有無について照会した。これに対し、茨城県教育委員会は、一般国道6号東水戸道路改築工事地内の現地踏査及び試掘調査を実施した。その結果、平成5年1月12日、道路改築工事地内に差込遺跡が所在することを建設省に回答した。平成5年1月27日、茨城県教育委員会は、建設省と文化財保護の立場から、埋蔵文化財の取り扱いについて協議した。協議の結果、平成5年2月8日、記録保存の処置を講ずることとし、調査機関として茨城県教育財団が紹介された。茨城県教育財団は、建設省と埋蔵文化財発掘調査に関する業務委託契約を結び、平成5年度に差込遺跡の調査を実施することとなった。

## 第2節 調査経過

差込遺跡の発掘調査は、平成5年10月1日から平成6年3月31日までの6か月にわたって実施した。以下、調査経過について、その概要を月ごとに記述する。

- 10月 1日から調査のための諸準備を開始し、18日からは遺跡内の伐開作業を実施した。伐開作業を完了後、トレンチ法によるI区の試掘を開始した。竪穴住居跡や溝等の遺構を確認し、縄文式土器片や弥生式土器片等の遺物が出土した。
- 11月 試掘の結果、縄文時代と平安時代の集落跡、弥生時代の土坑であることを確認し、重機によるI区の表土除去を行った。その後の遺構確認作業により、住居跡や土坑、溝、防空壕跡等を確認し、15日から防空壕の調査を開始した。24日には防空壕の調査を完了し、さらに住居跡や土坑の調査を進めた。
- 12月 前月に引き続きI区の調査を進めると共に、II区の試掘を開始した。試掘の結果、I区で確認されている土坑や溝がII区にも延びていることがわかり、重機による表土除去を行って、24日をもって平成6年の調査を終了した。
- 1月 5日からI区の遺構調査を再開し、末日には調査を終了した。
- 2月 1日、弥生式土器と弥生時代中期の土壌墓についての班内研修会を実施した。2日からは、II区の調査を開始した。23日には、概ね調査を終了し、26日、現地説明会を開催し、遺構・遺物を公開した。
- 3月 I区の土壌墓内から旧石器時代の剥片が出土したので、補足調査としてその付近のローム層の調査を実施した。25日には、全ての調査を完了した。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

差渋遺跡は、茨城県ひたちなか市部田野字差渋2921番地ほかに所在している。

当遺跡の所在するひたちなか市は、平成6年に旧勝田市と那珂湊市が合併してできた新しい市であり、東は太平洋に面し、西は那珂郡那珂町、南は水戸市、東茨城郡大洗町、北は那珂郡東海村と接している。那珂湊地区は江戸時代以前から漁・商港として栄えたが、水揚げ高の減少や運輸体系の変化などによる問題を抱えている。また、勝田地区には日立製作所の水戸工場等があり、企業城下町として栄えている。

地形は、北西から南東に流れる那珂川左岸の帯状に広がる河岸段丘（上市段丘、標高24m前後）と那珂川と久慈川に挟まれた那珂台地（標高30m前後）および那珂川や新川によって形成された沖積低地、並びに太平洋に沿って発達した砂丘（標高10m以下）からなっている。

地質は、第三紀層（凝灰岩）の磯崎層・阿字ヶ浦層を基盤とし、その上に粘土・砂によって形成されている。第四紀層の見和層、砂礫からなる上市層、灰白色粘土の常総粘土層、そして、関東ローム層の順で堆積している。

当遺跡は、ひたちなか市の南部にあり、那珂川の支流である本郷川左岸の標高26m前後の台地北端に位置している。水田との比高は15m程であり、調査前の現況は、畑地や山林であった。

#### 参考文献

- ・ 茨城県史編纂総合部会 『茨城県史 市町村編Ⅰ』 1972年3月
- ・ 勝田市史編纂委員会 『勝田市史 原始・古代編』 1981年9月
- ・ 蜂須紀夫 『茨城県 地学のガイド』 1977年8月

### 第2節 歴史的環境

ひたちなか市は、平坦な地形と中・小河川や海に恵まれており、原始・古代の多くの遺跡が確認されている。特に、国指定遺跡である虎塚古墳<sup>(1)</sup><46>は、昭和48・49・51年の3回にわたる学術調査によって、石室の壁面に絵が描かれていることが確認された。このことは、葬送儀礼や被葬者のルーツを考える上での重要な発見であり、全国的にも注目されたところである。以下、『茨城県遺跡地図』<sup>(2)</sup>の中で報告されているひたちなか市の主な遺跡を時代別に概述する。

旧石器時代の遺跡は、那珂川や真崎浦水系によって侵食された台地縁辺部を中心に確認されている。発掘調査がなされた西原遺跡<sup>(15)</sup><15>からは、削器やナイフ型石器を含め6点の遺物が出土している。また、後野遺跡<sup>(32)</sup><32>からは舟形細石刃核をはじめ、多くの石器が出土しており、県内初の細石刃文化の発見であることはもとより、細石刃技法の南限の遺跡として、後期旧石器文化の研究上重要な遺跡となっている。その他、向野遺跡<sup>(31)</sup><31>や道理山遺跡<sup>(64)</sup><64>等からも旧石器時代の資料が確認されている。

縄文時代早期中頃になると、海進が進み東中根台地の先端部付近の小支谷にまで海岸線が迫った。台地上には宮前貝塚<sup>(10)</sup><10>や上ノ内貝塚<sup>(11)</sup><11>、君ヶ台遺跡<sup>(35)</sup><35>、西中根遺跡<sup>(37)</sup><37>、三反田蜷塚遺跡<sup>(50)</sup><50>、蜷塚

西貝塚〈51〉、道理山貝塚〈65〉等多くの貝塚が見られるようになる。この他、<sup>たみやばら</sup>田宮原遺跡〈4・5〉や<sup>おおわ</sup>大和田遺跡〈42〉、<sup>たてだし</sup>館出遺跡〈44〉、<sup>(6)</sup>三反田遺跡〈54〉、<sup>しもたかい</sup>下高井遺跡〈57〉等、草創期から晩期にかけて、多くの集落跡が確認されており、県内有数の遺跡数を誇っている。

弥生時代の遺跡は、ひたちなか市を中心とする県央部の小河川周辺の台地縁辺部に立地している。中期中葉の<sup>むじな</sup>猪式土器を出土する遺跡は、猪式土器の標式遺跡である<sup>へたの</sup>部田野猪遺跡〈17・18〉をはじめ、<sup>まえはら</sup>前原遺跡〈25・26〉や大和田遺跡、<sup>こたがね</sup>小谷金遺跡〈8〉等が挙げられる。これらの遺跡は、いずれも狭い範囲に少量の土器片が散布しているのみで、遺構は確認されていない。当遺跡と関連する中期後葉の<sup>あしあらい</sup>足洗式土器を出土する遺跡は、<sup>くろばかま</sup>黒袴遺跡や<sup>つくばだい</sup>筑波台遺跡、<sup>やくしだい</sup>薬師台遺跡、<sup>さしが</sup>指洗遺跡〈47〉等20数か所が挙げられる。本期も前記同様狭い範囲に営まれており、出土遺物も少ない。このような状況の中、当差洗遺跡は多くの足洗式土器や土壌墓が確認されており、近接する指洗遺跡との関係は興味深い。後期前半のものとしては、東中根式土器の標式遺跡である東中<sup>どうやま</sup>根堂山遺跡〈39〉や東中根<sup>しみず</sup>清水遺跡〈41〉、大和田遺跡等からなる東中根遺跡群がある。後期後半のものとしては、<sup>はらやま</sup>原山遺跡〈56〉や<sup>こうやでらばたけ</sup>高野寺畑遺跡、<sup>(9)</sup>堀口遺跡等が挙げられる。

古墳時代になると、台地上に大小さまざまな集落が営まれ、多くの古墳が築造されるようになる。三反田遺跡や君ヶ台遺跡、部田野山崎遺跡<sup>(11)</sup>〈20〉、<sup>まわたりなかしゅくにし</sup>馬渡中宿西遺跡〈28〉、<sup>てんのうまえ</sup>天王前遺跡〈52〉、<sup>やなぎ</sup>上高井遺跡〈55〉、<sup>な</sup>柳沢十二所遺跡<sup>(12)</sup>〈70〉等が挙げられる。また、県内でも数少ない埴輪の製作遺跡である馬渡遺跡〈33〉もある。さらに、それらの集落を基盤として、部田野古墳群〈9〉や馬渡古墳群〈22〉、<sup>なかく</sup>中根中区古墳群、<sup>なかく</sup>虎塚古墳群、<sup>かさや</sup>笠谷古墳群〈49〉等の多くの古墳が築かれている。

奈良・平安時代の集落跡は、那珂川水系を中心に大集落が形成されるとともに、このころから開墾が盛んに行われ、新たに新川水系にも小集落が形成される。この時期の遺跡は、<sup>にしなみきしも</sup>西並木下遺跡〈21〉や<sup>にししもじゅくみなみ</sup>西下宿南遺跡〈24〉、後谷津遺跡〈29〉、君ヶ台遺跡、下高井遺跡、遠原遺跡、堀口遺跡が挙げられる。また、那珂川に面する斜面には、<sup>たてやま</sup>館山横穴〈3〉や部田野横穴〈12〉、十五郎穴横穴群〈48〉等の横穴墓が成立する。

中世になると、甲斐武田氏の祖、常陸武田氏の居館である武田館跡をはじめ、大山館跡〈30〉や中根城跡〈40〉等の城館跡が築かれている。

※ 文中の〈 〉内の番号は、表1、第1図中の該当番号と同じである。

## 註

- (1) 勝田市史編纂委員会 『勝田市史 原始・古代編』 1981年9月
- (2) 茨城県教育委員会 『茨城県遺跡地図』 1990年3月
- (3) 勝田市教育委員会 『後野遺跡』 1976年12月
- (4) 勝田市教育委員会 『勝田市君ヶ台遺跡発掘調査報告書』 1980年3月
- (5) 勝田市教育委員会 『三反田蜆塚貝塚調査報告』 1982年3月
- (6) 勝田市教育委員会 『三反田遺跡』 1968年3月
- (7) 勝田市史編纂委員会 『勝田市史別編Ⅱ 考古資料編』「前原遺跡」 1979年12月
- (8) 勝田市教育委員会 『東中根遺跡調査概報（第1次調査のまとめ）』 1972年3月  
『 “ （第2次調査のまとめ）』 1973年3月  
『 “ （第3次調査のまとめ）』 1974年3月
- (9) 勝田市教育委員会 『高野寺畑遺跡発掘調査報告』 1979年3月
- (10) 勝田市教育委員会 『勝田市堀口遺跡調査報告書』 1980年3月

(1) 那珂湊市山崎遺跡群発掘調査会 『那珂湊市部田野山崎遺跡』 1990年3月

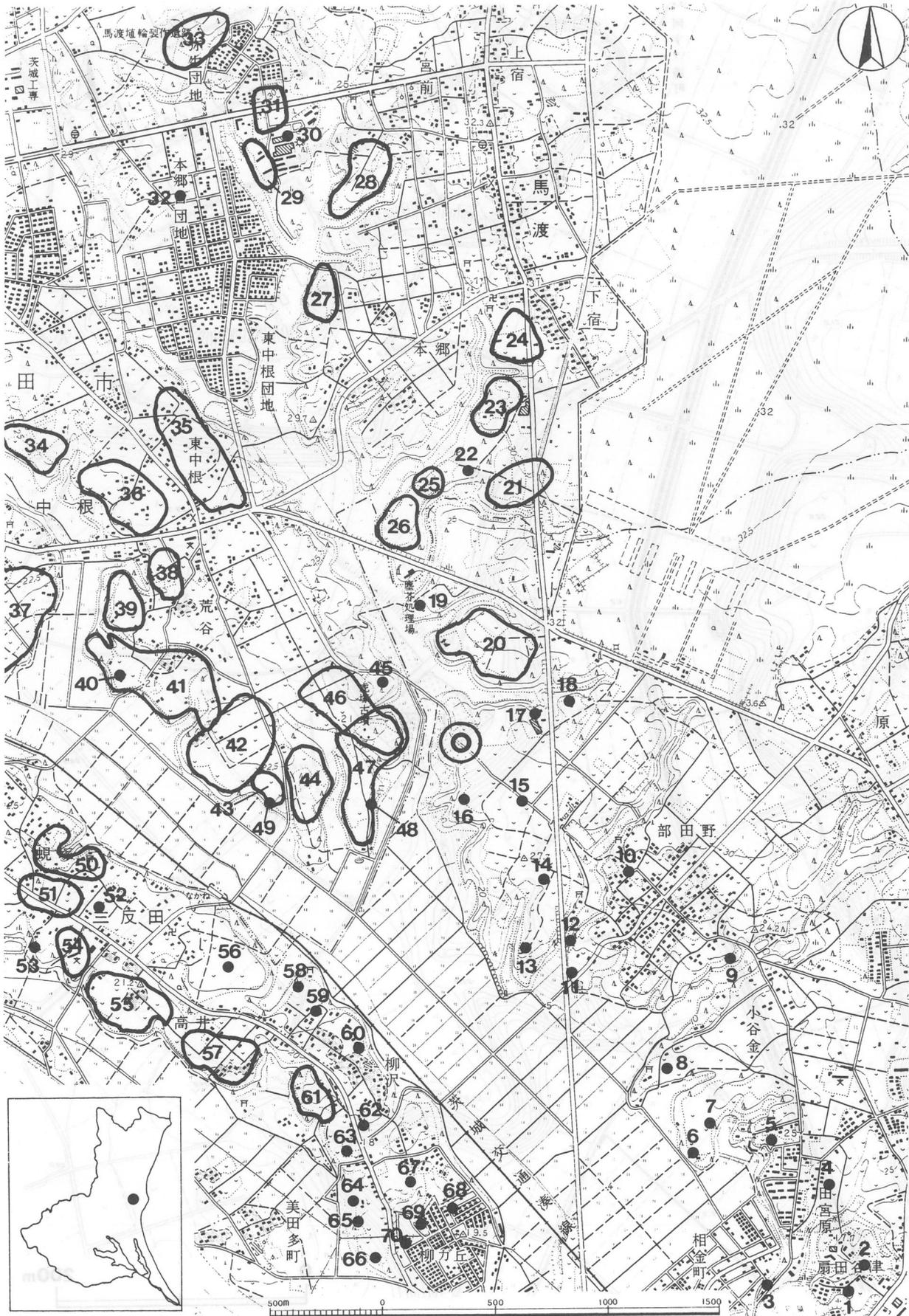
(2) 那珂湊市教育委員会 『柳沢遺跡調査報告』 1972年12月

参考文献

- ・ 茨城県 『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』 1979年3月
- ・ 茨城県 『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』 1991年3月
- ・ 茨城県 『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』 1974年2月
- ・ 勝田市教育委員会 『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書』 1975年3月
- ・ 藤本弥城 『那珂川下流の石器時代研究』 1977年3月
- ・ 那珂湊市教育委員会 『那珂湊市遺跡分布調査報告書』 1976年10月

表1 差浜遺跡周辺遺跡一覧表

図中 番号	遺 跡 名	県遺跡 番 号	遺 跡 の 時 代						図中 番号	遺 跡 名	県遺跡 番 号	遺 跡 の 時 代						
			旧	縄	弥	古	奈・平	中世				旧	縄	弥	古	奈・平	中世	
1	鍛冶屋窪遺跡	449		○	○	○	○		37	西中根遺跡	489		○					
2	神敷台遺跡	448			○	○	○		38	野沢前遺跡	487			○				
3	館山横穴	468						○	39	東中根堂山遺跡	2693			○				
4	田宮原遺跡Ⅱ	4169		○	○				40	中根城跡	4186						○	
5	田宮原遺跡Ⅰ	450		○	○				41	東中根清水遺跡	485			○	○	○		
6	新堤横穴群	469						○	42	大和田遺跡	3668		○	○	○	○		
7	新堤遺跡	4170		○	○				43	笠谷遺跡	484		○	○				
8	小谷金遺跡	451		○	○	○			44	館出遺跡	3202		○	○	○	○		
9	部田野古墳群	470					○		45	下原遺跡	4191		○					
10	宮前貝塚	3659		○					46	虎塚古墳群	498					○		
11	上ノ内貝塚	452		○					47	指浜遺跡	3201		○	○	○	○		
12	部田野横穴	471						○	48	十五郎穴横穴群	497						○	
13	尼ヶ柵遺跡	4166		○	○	○			49	笠谷古墳群	499					○		
14	宮後遺跡	3660		○	○	○			50	三反田蜆塚遺跡	475		○	○	○			
15	西原遺跡	4165	○						51	蜆塚西貝塚	4196		○					
16	鷹ノ巣遺跡	453					○		52	天王前遺跡	4192					○	○	
17	部田野貉遺跡Ⅲ	4176		○	○				53	三反田古墳群	493					○		
18	部田野貉遺跡Ⅰ・Ⅱ	455		○	○				54	三反田遺跡	2697		○			○		
19	山崎遺跡	456		○					55	上高井遺跡	4193					○	○	
20	部田野山崎遺跡	4173		○	○	○			56	原山遺跡	3661		○	○	○			
21	西並木下遺跡	4242		○		○	○		57	下高井遺跡	474		○		○	○		
22	馬渡古墳群	503					○		58	宮前古墳群	3662					○		
23	前原C遺跡	4241					○	○	59	坂ノ上遺跡	3665				○	○		
24	西下宿南遺跡	4239					○	○	60	前方遺跡	3664				○	○		
25	前原B遺跡	4240				○	○	○	61	鍛冶屋遺跡	3670						○	○
26	前原A遺跡	4235		○	○				62	御所ノ内遺跡Ⅰ	3666				○	○		
27	北之内遺跡	4243				○			63	御所ノ内遺跡Ⅱ	4168				○	○		
28	馬渡中宿西遺跡	4244				○	○	○	64	道理山遺跡	4178	○	○	○	○			
29	後谷津遺跡	4237						○	65	道理山貝塚	462		○	○				
30	大山館跡	4238							66	道理山古墳群	473					○		
31	向野遺跡	2703	○	○					67	寺脇遺跡	4167		○	○	○			
32	後野遺跡	4182	○						68	大田房遺跡	3663		○	○	○			
33	馬渡埴輪製作遺跡	507		○	○	○			69	寺前古墳	472					○		
34	中根中区古墳群	4187					○		70	柳沢十二所遺跡	461		○	○	○			
35	君ヶ台遺跡	486	○	○	○	○	○		◎	差浜遺跡(当遺跡)	454		○	○			○	
36	石光遺跡	418		○		○	○											



第1図 差洪遺跡周辺遺跡位置図

図1 差洪遺跡周辺遺跡位置図



第2図 差洪遺跡調査地形図

図面は地籍図を基に作成され、図に示す

# 第3章 遺跡

## 第1節 遺跡の概要

差込遺跡は、ひたちなか市の南部、本郷川左岸の標高26m前後の台地上に所在している。調査区は、東西約80m、南北約110m、面積8,824㎡であり、現況は畑地と山林である。

調査区の北東側約500m地点には、弥生時代中期中葉の部田野路遺跡が、谷津を挟んだ南側400m地点には弥生時代中期後葉の指込遺跡があり、当遺跡との関わりが注目される。

今回の調査によって、調査区の西部に縄文時代早期の住居跡2軒と平安時代中期の住居跡1軒、防空壕跡1か所を、中央部から北部にかけて弥生時代中期の土壌墓群(32基)を、その他、旧石器時代の集石遺構1か所、溝1条、土坑84基を確認した。以上のことから、当遺跡は旧石器時代から平安時代にかけての複合遺跡であることが判明した。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に10箱出土した。遺物の大部分は、弥生時代中期の土器片で、土壌墓内や遺構確認面から出土している。その他、石鍬や勾玉、管玉、貝輪が出土している。

## 第2節 基本層序

調査区内にテストピットを掘り、基本土層の観察を行った(第3図)。

第1層は、30cm前後の厚さの耕作土層で、黒褐色をしている。

第2層は、10~40cm程の厚さで、褐色をした漸移層である。

第3層は、5~30cmの厚さで、スコリア粒子を極少量含む黄褐色をしたソフトローム層である。

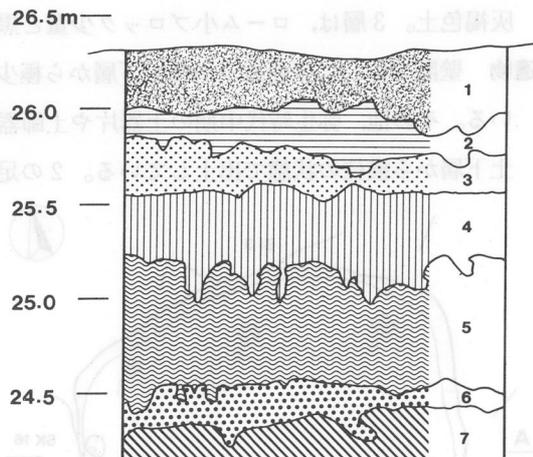
第4層は、20~60cmの厚さで、明黄褐色をしたソフトローム層である。

第5層は、40~90cmの厚さで、大きなロームブロックからなる明黄褐色をしたハードローム層である。

第6層は、20cm前後の厚さの鹿沼パミス層である。

第7層は、スコリア粒子とパミス粒子を極少量含む、締まりと粘性がある鈍い黄褐色をしたハードローム層である。

住居跡等の遺構は、第2層上面で確認した。



第3図 基本土層図

## 第3節 遺構と遺物

### 1 竪穴住居跡

当遺跡の住居跡は、縄文時代と平安時代のもので、重複が見られ、調査区の西部から3軒確認した。以下、確認された住居跡の特徴や出土遺物について記載する。

#### 第1号住居跡（第4図）

**位置** 調査区の西部，C2h<sub>4</sub>区。

**重複関係** 本跡の北壁中央部は第3号住居跡に，東壁は第16号土坑に切られている。

**規模と平面形** 一辺3.0mの不定形をしている。

**主軸方向** N-77°-E

**壁** 壁高は12cm程で，緩やかに傾斜して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で，部分的にロームの小ブロックを含むが全体的には軟質である。

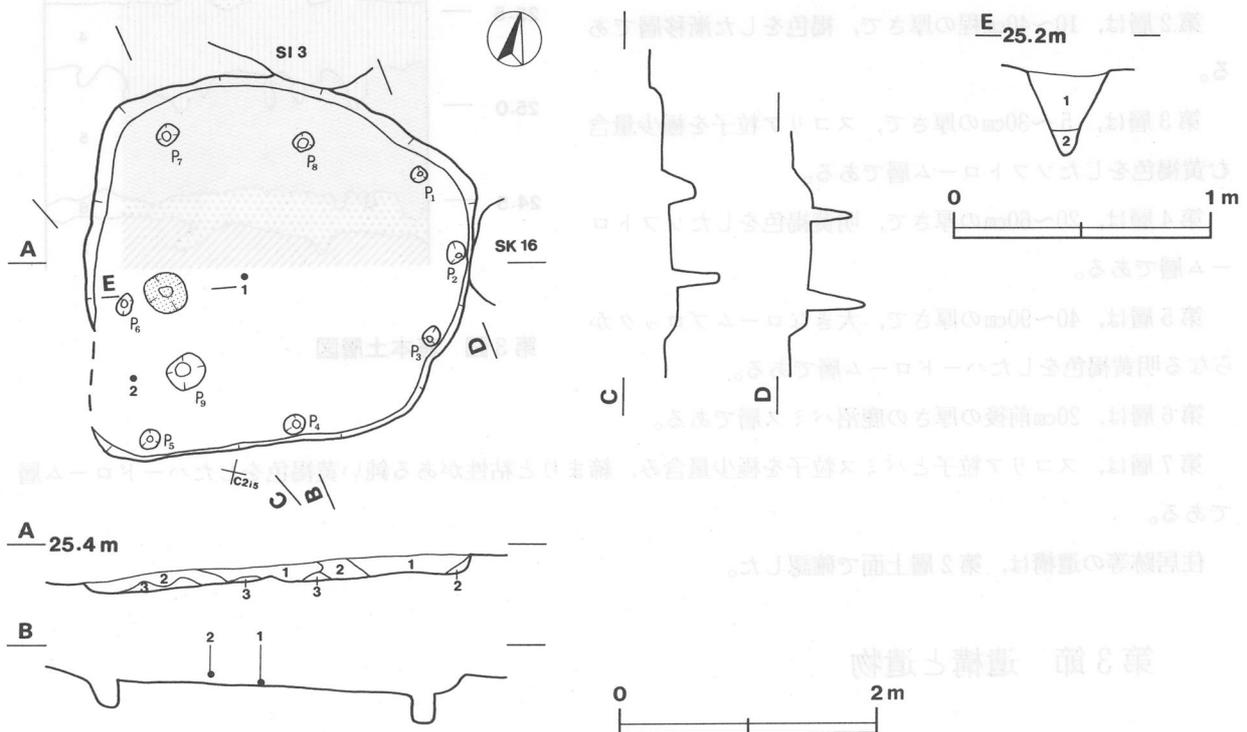
**ピット** 9か所。P<sub>1</sub>～P<sub>8</sub>は直径12～18cm前後の円形で，深さ22～46cmの柱穴である。P<sub>9</sub>は直径30cm程の円形で，深さ25cmで，性格は不明である。

**炉** 西壁寄りで確認している。規模は直径31cmの円形で，深さ32cmである。側面はわずかに赤変硬化している。

**覆土** は第1層が焼土粒子中量とローム粒子少量，ロームブロック極少量含む赤褐色土。2層は，灰粒子中量と焼土粒子極少量含む灰褐色土である。

**覆土** 黒色小ブロックをわずかに含み，ブロック状に堆積していることから人為堆積と思われる。また，住居跡の覆土はくすんだ様なロームの堆積であり，遺構確認が難しい状況であった。1層は，黒色小ブロックを少量とローム中ブロックを極少量含む黒褐色土。2層は，ローム粒子を少量と黒色小ブロックを極少量含む灰褐色土。3層は，ローム小ブロック少量と黒色小ブロック極少量含む褐色土である。

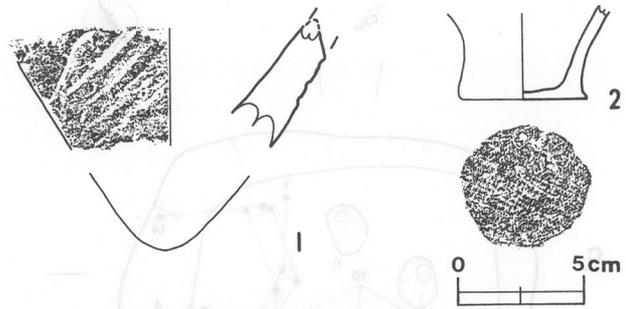
**遺物** 壁際を中心に床面直上や覆土下層から極少量の縄文式土器片や焼けた破礫（砂岩，凝灰岩）が出土している。その他，弥生時代中期の土器片や土師器片が極少量出土している。1の縄文式土器片は，中央部の覆土下層から横位の状態で出土している。2の足洗式土器の壺底部片は南西コーナー付近の覆土中層から出土



第4図 第1号住居跡実測図

しており、住居跡の覆土中に弥生時代の土坑があった可能性がある。

所見 住居跡の形状や床面直上から田戸下層式土器が出土していることから、本跡は縄文時代早期のものと思われる。



第5図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第5図 1	尖底深鉢 縄文式土器	B (3.5)	胴部片。尖底で、胴部は直線的に外傾する。胴部には太い沈線が斜方向に施されている。	長石、石英 褐色 良好	P 1 10% 田戸下層式土器
2	壺 弥生式土器	B (3.5) C 5.1	底部・胴部片。平底で、平織布痕が見られる。胴部は外彎している。	黒雲母、長石、石英 茶褐色 良好	P 2 10%

第2号住居跡 (第6図)

位置 調査区の西端、C2g<sub>1</sub>区。

規模と平面形 長軸3.2m、短軸2.7mの隅丸長方形をしている。

主軸方向 N-104°-E

壁 壁高は82cmで、外傾して立ち上がっている。

壁溝 南コーナー壁下で確認した。幅13cm、深さ7cmで、断面形は「┌」状をしている。

床 東部はわずかに窪んでいるが、他はほぼ平坦で、全体的にやや硬質である。

ピット 3か所。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は、長径35~40cm程、短径29cmの楕円形で、深さ25cm程の柱穴である。P<sub>3</sub>は、長径40cm、短径30cmの楕円形で、深さ42cmの出入口に伴うピットである。

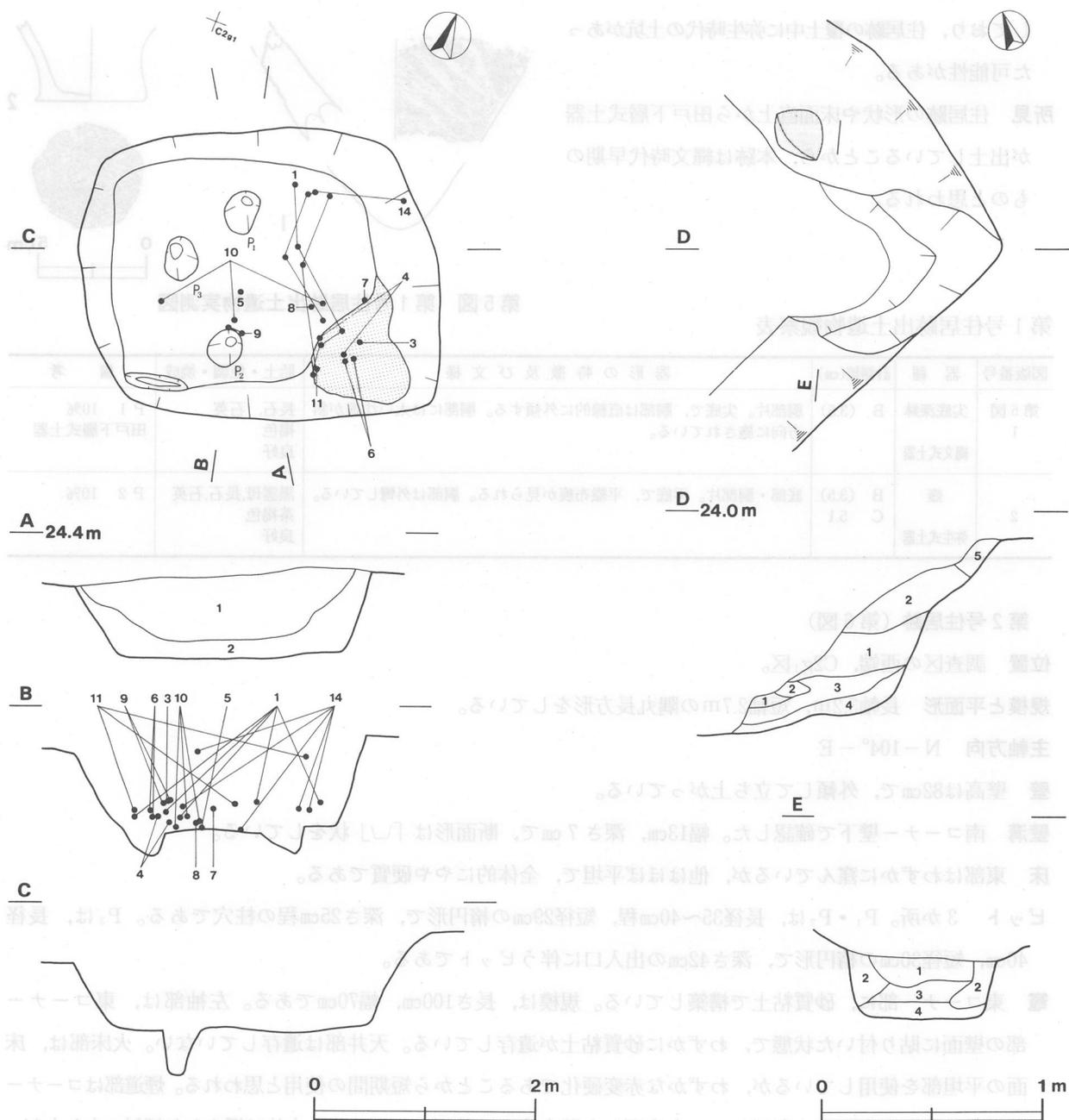
竈 東コーナー部に、砂質粘土で構築している。規模は、長さ100cm、幅70cmである。左袖部は、東コーナー部の壁面に貼り付いた状態で、わずかに砂質粘土が遺存している。天井部は遺存していない。火床部は、床面の平坦部を使用しているが、わずかな赤変硬化であることから短期間の使用と思われる。煙道部はコーナー壁の立ち上がりをうまく利用して、火床面から壁中位まで外傾し、そこから上位は緩やかな傾斜で立ち上がっている。

竈土層解説

- |                                   |   |
|-----------------------------------|---|
| 1 赤灰色土 灰粒子中量、砂粒子少量、焼土粒子・焼土ブロック極少量 | 4 灰赤色土 焼土粒子多量、焼土ブロック・砂粒子・灰粒子少量、ローム粒子極少量 |
| 2 灰褐色土 砂粒子多量、焼土粒子少量               | 5 暗褐色土 ローム粒子少量                          |
| 3 暗灰色土 灰粒子中量、砂粒子・焼土粒子少量、焼土ブロック極少量 |   |

覆土 各層の堆積幅が厚いことやロームブロックが多量に含まれていることから人為堆積と思われる。1層は、含有物のない黒色土。2層は、ロームブロックを多量に含む褐色土である。ピットの覆土は、住居跡の覆土2層と同じものであり、柱を抜いた後に土が埋め戻されたものと考えられる。

遺物 覆土下層から床面直上を中心に土師器や須恵器が出土している。その他、焼けた破礫片(砂岩)や混入の足洗式土器片が出土している。1の土師器甕片(常陸形甕)や4の須恵器甕片は、竈内や竈付近の覆土下層から出土している。5の須恵器杯と10の高台付杯は床面直上から正位の状態、6の杯は竈の底面から、



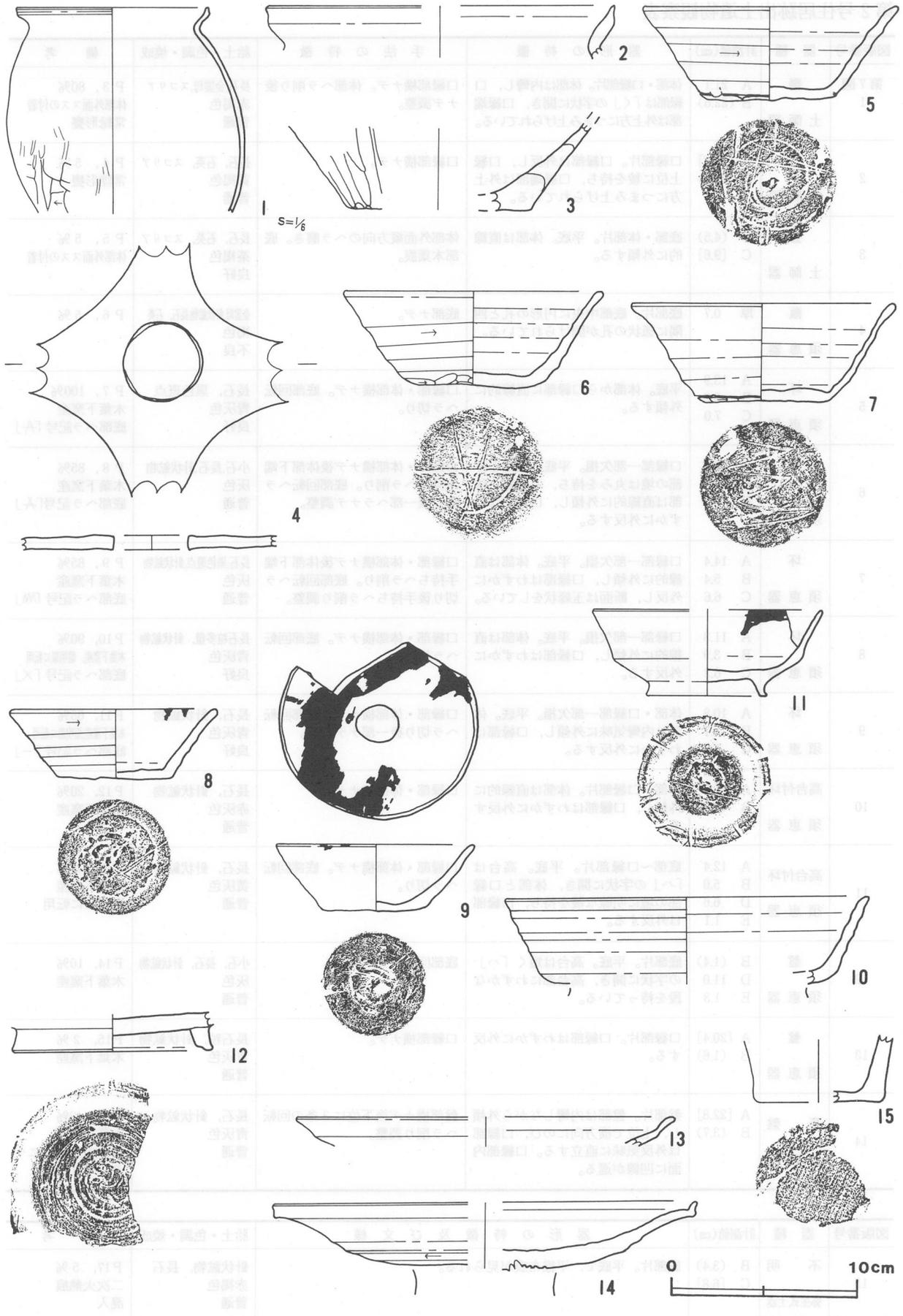
第6図 第2号住居跡実測図

7と8の坏は覆土中から正位の状態で出土している。11の高台付坏と14の高盤は覆土上層や中層の接合資料である。

**所見** 出土須恵器の胎土に針状鉱物の含有が見られることから水戸市木葉下窯跡産のものと思われる。また、8と9、11の坏は内面に油煙の付着が見られることから燈明として再利用されたものと思われる。

土器の出土状態を見てみると、11や14のようにレベル差のあるものや住居跡全体に出土したものが接合関係にあることから見て、住居跡の埋め戻しの際にこれらの土器を割って投げ入れた可能性があり、住居跡廃絶に伴う祭祀行為があったものと思われる。

本跡は須恵器の形状や器種構成等から、9世紀中葉のものと思われる。また、台地上に1軒だけの確認であり、従来「離れ国分」と言われていた住居跡立地であるが、集落の中心は傾斜地や低地にあるものと思われる。



第7図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第7図 1	甕 土師器	A 21.1 B (22.6)	体部・口縁部片。体部は内彎し、口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部横ナデ。体部ヘラ削り後ナデ調整。	長石、金雲母、スコリア 赤褐色 普通	P 3, 80% 体部外面ススの付着 常総形甕
2	甕 土師器	A [18.8] B (2.9)	口縁部片。口縁部は外反し、口縁上位に稜を持ち、口縁端部は外上方につまみ上げられている。	口縁部横ナデ。	長石、石英、スコリア 黄褐色 普通	P 4, 5% 常陸形甕
3	甕 土師器	B (4.5) C [9.6]	底部・体部片。平底。体部は直線的に外傾する。	体部外面縦方向のヘラ磨き。底部木葉痕。	長石、石英、スコリア 茶褐色 良好	P 5, 5% 体部外面ススの付着
4	甗 須恵器	厚 0.7	底部片。底部中央に円形の孔と四隅に弧状の孔が開けられている。	底部ナデ。	金雲母、針状鉱物、長石、石英 褐色 不良	P 6, 5%
5	坏 須恵器	A 13.9 B 5.2 C 7.0	平底。体部から口縁部に直線的に外傾する。	口縁部・体部横ナデ。底部回転ヘラ切り。	長石、黒色斑点 青灰色 良好	P 7, 100% 木葉下窯産 底部ヘラ記号「A」
6	坏 須恵器	A 14.0 B 5.3 C 6.2	口縁部一部欠損。平底。底部と体部の境は丸みを持ち、不明瞭。体部は直線的に外傾し、口縁部はわずかに外反する。	口縁部・体部横ナデ後体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後一部ヘラナデ調整。	小石、長石、針状鉱物 灰色 普通	P 8, 85% 木葉下窯産 底部ヘラ記号「A」
7	坏 須恵器	A 14.4 B 5.4 C 6.6	口縁部一部欠損。平底。体部は直線的に外傾し、口縁部はわずかに外反し、断面は玉縁状をしている。	口縁部・体部横ナデ後体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ切り後手持ちヘラ削り調整。	長石、黒色斑点、針状鉱物 灰色 普通	P 9, 85% 木葉下窯産 底部ヘラ記号「M」
8	坏 須恵器	A 11.3 B 3.9 C 6.2	口縁部一部欠損。平底。体部は直線的に外傾し、口縁部はわずかに外反する。	口縁部・体部横ナデ。底部回転ヘラ切り。	長石粒多量、針状鉱物 青灰色 良好	P 10, 90% 木葉下窯産、燈明皿に転用 底部ヘラ記号「X」
9	坏 須恵器	A 10.8 B 3.7 C 5.5	体部・口縁部一部欠損。平底。体部は内彎気味に外傾し、口縁部はわずかに外反する。	口縁部・体部横ナデ。底部回転ヘラ切り後一部ナデ調整。	長石、針状鉱物 青灰色 良好	P 11, 65% 木葉下窯産、燈明皿に転用 底部ヘラ記号「-」
10	高台付坏 須恵器	A 19.7 B (4.7)	体部・口縁部片。体部は直線的に外傾し、口縁部はわずかに外反する。	口縁部・体部横ナデ。	長石、針状鉱物 赤灰色 普通	P 12, 20% 木葉下窯産
11	高台付坏 須恵器	A 12.4 B 5.0 D 6.6 E 1.1	底部～口縁部片。平底。高台は「ハ」の字状に開き、体部と口縁部の境に明瞭な稜を持ち、口縁部は外反する。	口縁部・体部横ナデ。底部回転ヘラ切り。	長石、針状鉱物 黄灰色 普通	P 13, 45% 木葉下窯産 燈明皿に転用
12	盤 須恵器	B (1.4) D 11.0 E 1.3	底部片。平底。高台は短く「ハ」の字状に開き、高台部にわずかな段を持っている。	底部回転ヘラ切り。	小石、長石、針状鉱物 灰色 普通	P 14, 10% 木葉下窯産
13	盤 須恵器	A [20.4] B (1.6)	口縁部片。口縁部はわずかに外反する。	口縁部横ナデ。	長石粒、針状鉱物 青灰色 普通	P 15, 2% 木葉下窯産
14	高盤 須恵器	A [22.8] B (3.7)	盤部片。盤部は内彎しながら外傾し、上位で横方向にのび、口縁部は外反気味に直立する。口縁部内面に凹線が巡る。	盤部横ナデ後下位に3条の回転ヘラ削り調整。	長石、針状鉱物 青灰色 普通	P 16, 40% 木葉下窯産 盤部内面中央にヘラ記号「十」
15	不明 弥生式土器	B (3.4) C [6.8]	底部片。平底で、平織布痕が見られる。		針状鉱物、長石 赤褐色 普通	P 17, 5% 二次火熱痕 混入

第3号住居跡（第8図）

位置 調査区の西部，C2g<sub>4</sub>区。

重複関係 本跡の南東コーナーは第1号住居跡を切っている。

規模と平面形 長軸2.8m，短軸2.4mの不定形をしている。

主軸方向 N-19°-E

壁 壁高は12cmで，外傾して立ち上がっている。

床 平坦で，全体的に軟質である。

ピット 6か所。P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>は，直径19～24cmの円形で，深さ11～41cmの柱穴と思われる。P<sub>6</sub>は，長径75cm，短径57cmの楕円形で，深さ15cmの土坑状の形をしている。P<sub>6</sub>の覆土は灰褐色をしており，本跡が埋まった後に掘られた可能性が高い。

覆土 ロームをかなり多く含んでおり，人為堆積と思われる。1層は，ローム粒子中量と炭化粒子を少量含む褐色土。2層は，黒色粒子と炭化粒子を極少量含む褐色土である。

遺物 南西コーナー付近の床面直上から極少量の縄文式土器片と焼けた破礫片（凝灰岩）が出土している。その他，混入と思われる弥生時代中期の土器片が1片出土している。1の縄文式土器片は，南西コーナー付近の床面直上から横位の状態で出土している。

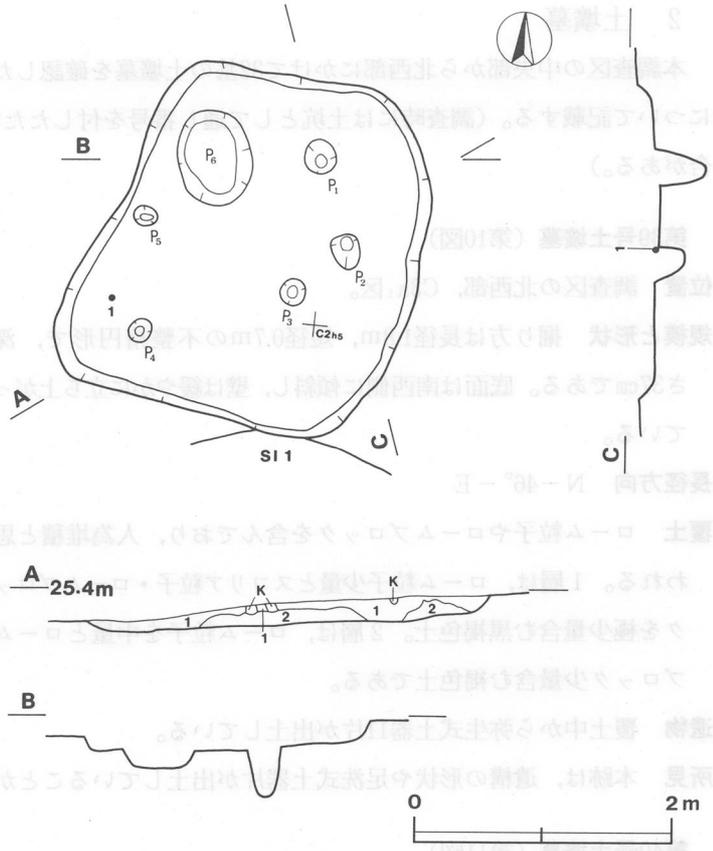
所見 本跡は重複関係や1の田戸下層式土器の文様構成（東茨城郡大洗町祝町遺跡の土器に類似）から見て，第1号住居跡よりは新しい縄文時代早期のものと思われる。

第3号住居跡出土遺物観察表

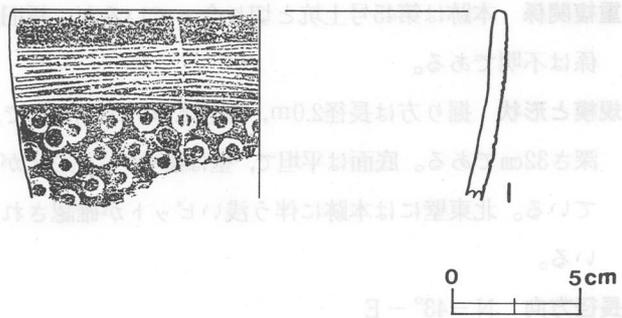
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第9図 1	深鉢 縄文式土器	A [19.4] B (7.6)	口縁部片。口縁部は直立する。上位に横位の集合沈線文が，その下には円形竹管文がそれぞれ施されている。	長石，石英 褐色 良好	P18，15% 田戸下層式土器

表2 差渋遺跡住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内部施設				炉・竈	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新)
							主柱穴	貯蔵穴	ピット	入口				
1	C2h <sub>4</sub>	N-77°-E	不定形	3.0×3.0	12	平坦	8	/	1	/	炉	人為	縄文式土器，破礫，弥生式土器，土師器	本跡→SI3，SK16
2	C2g <sub>1</sub>	N-104°-E	隅丸長方形	3.2×2.7	82	平坦	2	/	/	1	コナ -竈	人為	土師器，須恵器，破礫，弥生式土器	
3	C2g <sub>4</sub>	N-19°-E	不定形	2.8×2.4	12	平坦	5	/	1	/	/	人為	縄文式土器，破礫，弥生式土器	SI1→本跡



第8図 第3号住居跡実測図



第9図 第3号住居跡出土遺物実測図

## 2 土墳墓

本調査区の中央部から北西部にかけて32基の土墳墓を確認した。以下、それぞれの土墳墓の特徴と出土遺物について記載する。(調査時には土坑として通し番号を付したため、数字の大きいものや番号がとんでいる場合がある。)

### 第39号土墳墓 (第10図)

**位置** 調査区の北西部, C3a<sub>1</sub>区。

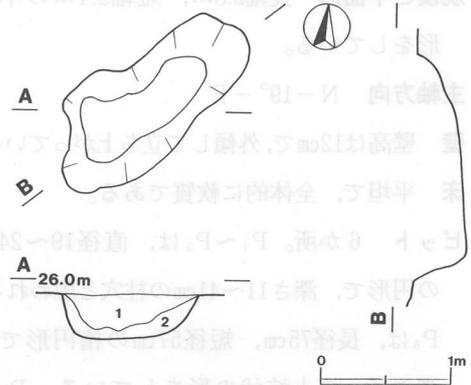
**規模と形状** 掘り方は長径1.8m, 短径0.7mの不整楕円形で、深さ37cmである。底面は南西側に傾斜し、壁は緩やかに立ち上がっている。

**長径方向** N-46°-E

**覆土** ローム粒子やロームブロックを含んでおり、人為堆積と思われる。1層は、ローム粒子少量とスコリア粒子・ロームブロックを極少量含む黒褐色土。2層は、ローム粒子を中量とロームブロック少量含む褐色土である。

**遺物** 覆土中から弥生式土器11片が出土している。

**所見** 本跡は、遺構の形状や足洗式土器片が出土していることから弥生時代中期後半の土墳墓と思われる。



第10図 第39号土墳墓実測図

### 第40号土墳墓 (第11図)

**位置** 調査区の北西部, C3a<sub>1</sub>区。

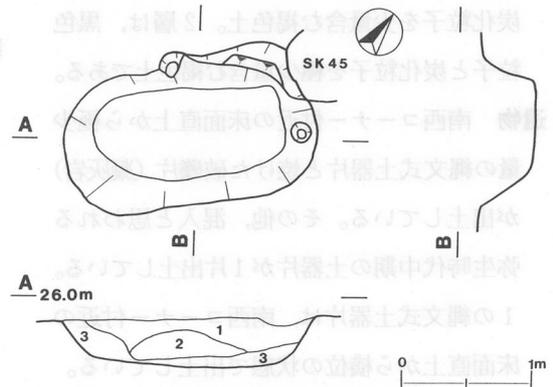
**重複関係** 本跡は第45号土坑と切り合っているが、新旧関係は不明である。

**規模と形状** 掘り方は長径2.0m, 短径1.1mの楕円形で、深さ32cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。北東壁には本跡に伴う浅いピットが確認されている。

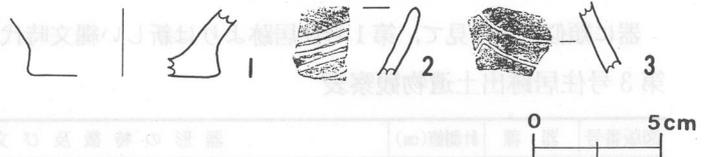
**長径方向** N-43°-E

**覆土** 2層の堆積状況が逆レンズ状をしており、人為堆積と思われる。1・2層は、ローム粒子極少量含む黒褐色土。3層は、ローム粒子と黒色粒子を極少量含む褐色土である。

**遺物** 覆土中から弥生式土器35片と破礫が出土している。



第11図 第40号土墳墓実測図



第12図 第40号土墳墓出土遺物実測・拓影図

**所見** 本跡は、遺構の形状や足洗1式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉の土墳墓と思われる。

### 第40号土墳墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第12図 1	不明 弥生式土器	B (2.3) C [7.6]	底部片。平底で、平織布痕が見られる。	長石、針状鉱物 褐色 普通	P19, 3%

2は口縁部片で、斜方向の太い沈線が、3は1本沈線による連弧文が施されている。

第41号土壌墓 (第13図)

位置 調査区の北西部, C3a<sub>2</sub>区。

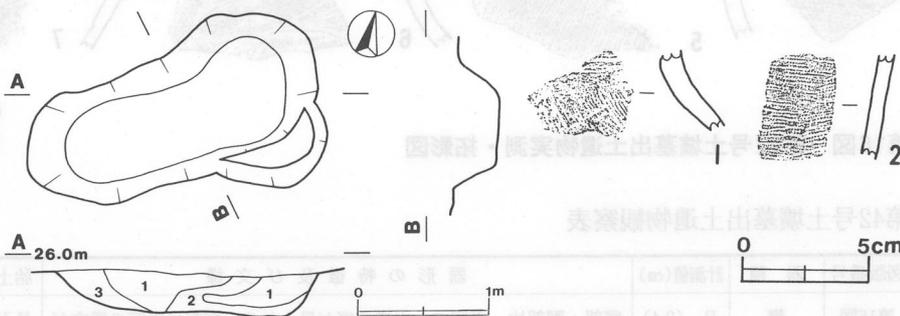
規模と形状 掘り方は長径2.4m, 短径1.0mの不整楕円形で, 深さ37cmである。底面は皿状で, 壁は緩やかに立ち上がっている。

長径方向 N-57°-E

覆土 人為堆積と思われる。1層は, ローム粒子を極少量含む黒褐色土。2層は, ローム粒子少量とロームブロック極少量含む灰褐色土。3層は, 黒色粒子を少量含む褐色土である。

遺物 覆土中から弥生式土器34片が出土している。

所見 本跡は, 遺構の形状や足洗2式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉の土壌墓と思われる。



第13図 第41号土壌墓実測図

第14図 第41号土壌墓出土遺物拓影図

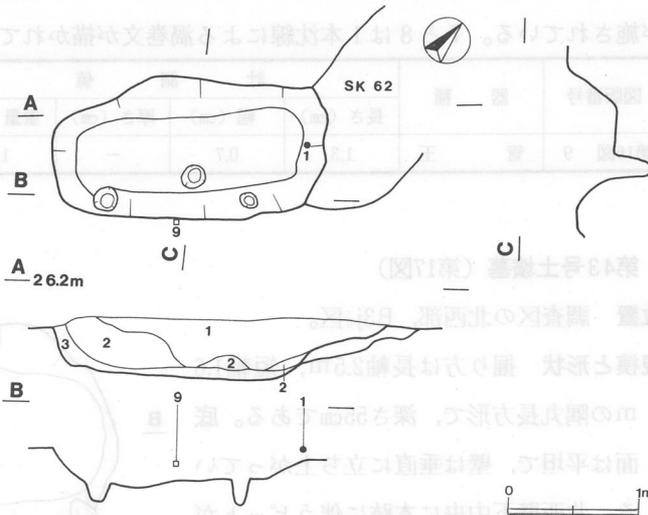
1は頸部片で, 横方向の平行沈線が重層し, その下に無節の縄文が施されている。2は附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

第42号土壌墓 (第15図)

位置 調査区の北西部, B3j<sub>2</sub>区。

重複関係 本跡は, 第62号土坑と切り合っているが, 新旧関係は不明である。

規模と形状 掘り方は長軸(2.1)m, 短軸1.1mの隅丸長方形で, 深さ39cmである。底面はほぼ平坦で, 壁は緩やかに立ち上がっている。南東壁下に2か所と中央部の底面に1か所のピットを確認されている。ピット覆土から見て, 土壌を掘る際に掘られたものと思われるが, 性格は不明である。



第15図 第42号土壌墓実測図

長軸方向 N-47°-E

覆土 ロームブロックの含有が見られることから人為堆積と思われる。1層は, ローム粒子を極少量含む黒褐色土。2層は, ローム粒子とロームブロックを少量含む褐色土。3層は, ロームブロックと黒色ブロックを極少量含む褐色土である。

遺物 覆土中から弥生式土器61片と管玉1点が出土している。1の胴部片は北東壁寄りの覆土上層から, 9の管玉(凝灰岩製)は南東壁寄りの覆土上層から出土している。

所見 本跡は, 遺構の形状や足洗1式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉の土壌墓と思われる。また, 管玉は副葬品であるので, 遺骸の葬られたレベル(底面近く)に出土するはずであるが上層から出土

しており、再葬のために遺骸を掘りおこした可能性を示す出土状態である。



第16図 第42号土墳墓出土遺物実測・拓影図

第42号土墳墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第16図 1	甕 弥生式土器	B (2.4) C [12.4]	底部・胴部片。平底で、平織布痕が見られる。胴部は単節の縄文が施され、底部付近は若干の無文部が残る。	長石、小石、石英 茶褐色 良好	P 20, 5%
2	壺 弥生式土器	B (3.2) C [6.6]	底部・胴部片。平底で、木葉痕が見られる。胴部は単節の縄文が施され、底部付近は若干の無文部が残る。	長石 褐色 良好	P 21, 3%

3は口縁部片で、口唇部に刻み目が見られる。4と5は附加条1種(附加2条)の縄文が、6は無節の縄文が施されている。7と8は1本沈線による渦巻文が描かれている。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第16図 9	管玉	1.3	0.7	-	1.4	凝灰岩	覆土上層	Q 2

第43号土墳墓(第17図)

位置 調査区の北西部, B3j<sub>0</sub>区。

規模と形状 掘り方は長軸2.5m, 短軸1.6mの隅丸長方形で、深さ55cmである。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がっている。北西壁下中央に本跡に伴うピットが確認されている。

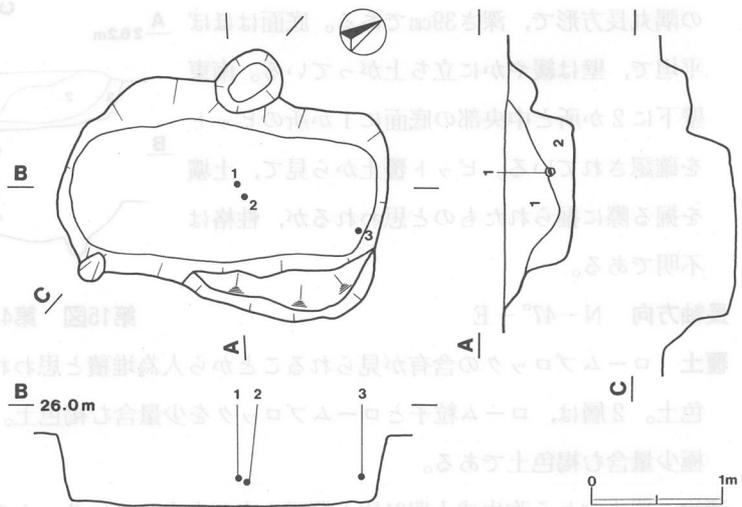
長軸方向 N-39°-E

覆土 人為堆積。1層は、ローム粒子少量とロームブロック極少量含む黒褐色土。

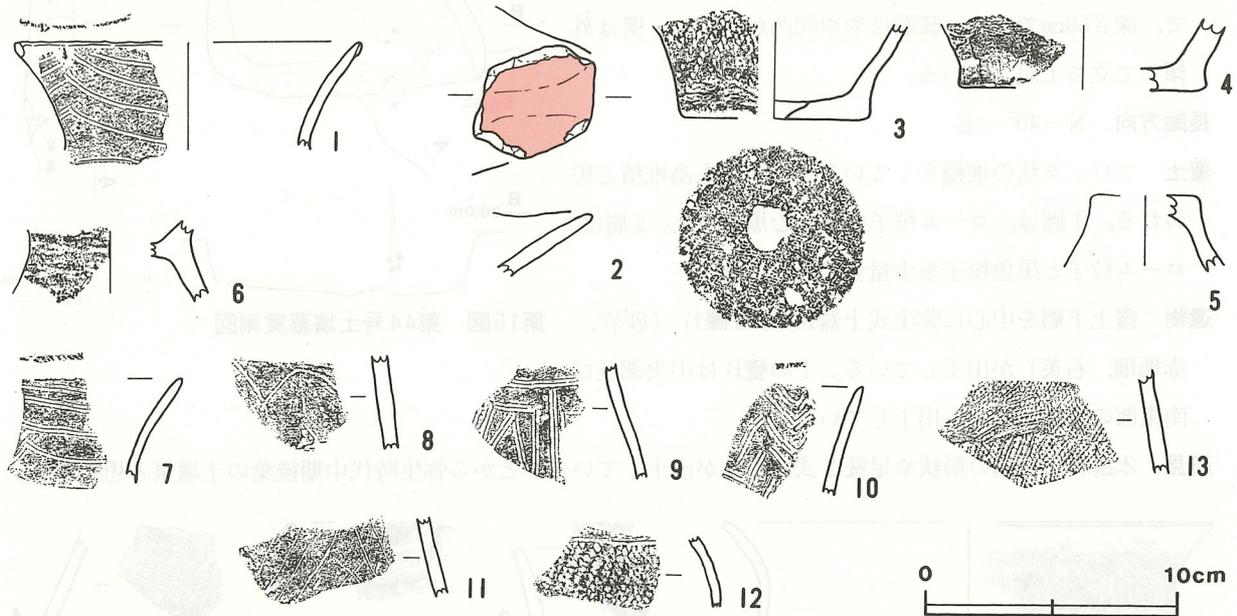
2層は、ロームブロック少量とローム粒

子・黒色粒子を極少量含む褐色土である。 第17図 第43号土墳墓実測図

遺物 覆土中から弥生式土器44片と剥片(瑪瑙)が出土している。1の弥生式土器片と2の片口高坏片と思われるものは中央部の1層と2層の境目から、3の壺の底部片は北東壁付近の覆土中層から出土している。



所見 本跡は、遺構の形状や足洗1・2式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉の土壌墓と思われる。3の底部片は焼成後に穿孔されており、土器棺の可能性はある。



第18図 第43号土壌墓出土遺物実測・拓影図

第43号土壌墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第18図 1	壺	A [13.6] B (4.3)	口縁部片。口縁部はわずかに外反しながら立ち上がる。口唇部は浅い刻みが施され、端部には貼瘤が見られる。口縁外面は平行沈線による下垂する連弧文が描かれている。内面は丁寧なへら磨きが施されている。	長石, 小石 褐色 良好	P22, 3%
	弥生式土器				
2	片口鉢		口縁部片。舌状に伸びている。全面朱彩されている。	長石, 小石 赤茶色 普通	P23, 3%
3	甕	B (3.7) C 7.4	底部・胴部片。平底で、平織布痕が見られる。底部は焼成後外面から穿孔されている。胴部は附加条1種(附加2条)の縄文が施され、底部付近は若干の無文部が残る。	長石, 石英, スコリア 褐色 普通	P24, 10%
4	不明	B (2.6) C [9.8]	底部・胴部片。平底で、木葉痕が見られる。胴部は単節の細縄文が施され、底部付近は若干の無文部が残る。	長石, 白色鉱物 黒褐色 普通	P25, 3%
5	蓋	B (2.8) F [4.3] G 1.5	天井部片。天井部は平たく、下方に「ハ」の字状に開く。	長石, 針状鉱物 黒褐色 普通	P26, 5%
6	高坏	B (2.5)	脚部片。剥離が激しくはっきりしないが、わずかに横方向の沈線が観察できる。	石英, スコリア 褐色 不良	P27, 3%
	弥生式土器				

7は壺の口縁部片で、口唇部に刻み目、口縁部に平行沈線による重連弧文が描かれている。8は1本沈線による連弧文が描かれている。9は壺の胴部片で、平行沈線による長方形区画の文様が描かれている。10は平行沈線による重山形文、11は1本沈線による重山形文が描かれている。12は胴部片で、複節の縄文が施されている。13は附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

第44号土壌墓(第19図)

位置 調査区の北西部, B2j<sub>0</sub>区。

重複関係 本跡は、第63号土坑に切られている。

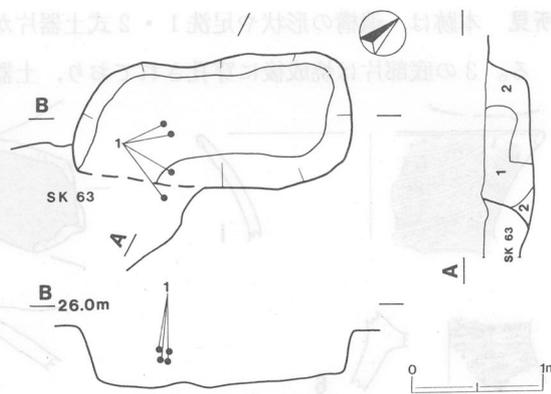
規模と形状 掘り方は長軸2.2m、短軸1.0mの隅丸長方形で、深さ50cmである。底面はやや凹凸が見られ、壁は外傾して立ち上がっている。

長軸方向 N-40°-E

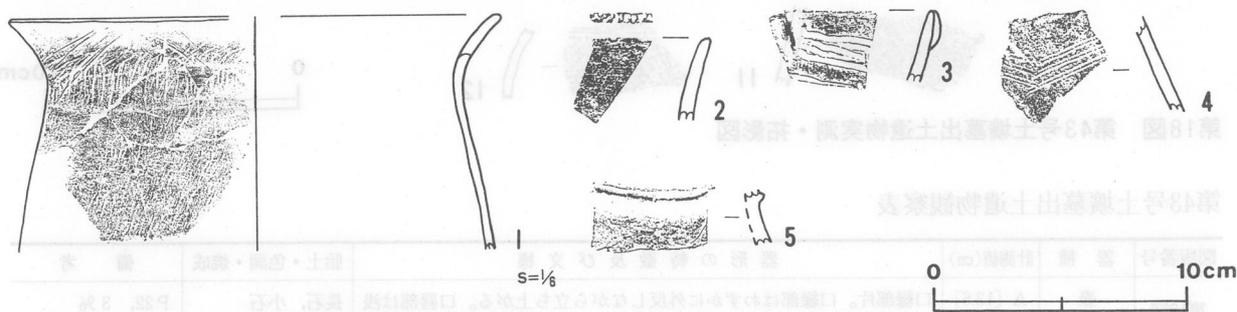
覆土 ブロック状の堆積をしていることから人為堆積と思われる。1層は、ローム粒子少量含む黒褐色土。2層は、ローム粒子と黒色粒子を少量含む灰褐色土。

遺物 覆土下層を中心に弥生式土器147片と礫片（砂岩、赤瑪瑙、石英）が出土している。1の甕片は中央部及び南東部の覆土中層から出土している。

所見 本跡は、遺構の形状や足洗2式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉の土壌墓と思われる。



第19図 第44号土壌墓実測図



第20図 第44号土壌墓出土遺物実測・拓影図

第44号土壌墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第20図 1	甕 弥生式土器	A [38.6] B (18.6)	胴部・口縁部片。胴部は内彎し、長めの口縁部はわずかに外反する。口唇部には縄文が施されているが、剥離が激しくはっきりしない。胴部は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。	長石、石英、小石 褐色 普通	P 28, 35%

2は甕の口縁部片で、口唇部に縄文が施されている。3は壺の口縁部片で、口縁部上位に縦長の貼瘤が付き、太い1本沈線が斜方向に重層している。4は平行沈線による重山形文が描かれている。5は壺の頸部片で、胴部との境に断面「三角形」の帯が巡っている。

### 第47A号土壌墓（第21図）

位置 調査区の北西部，B3j区。

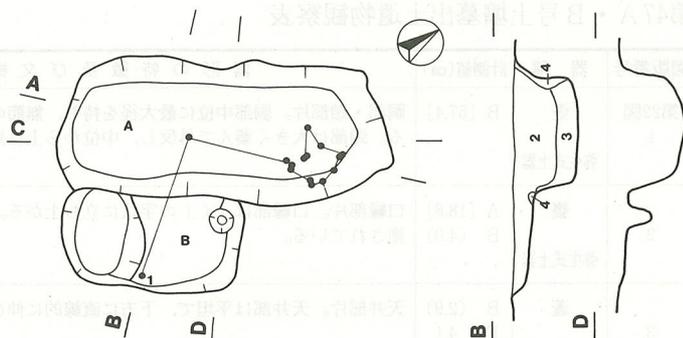
規模と形状 掘り方は長軸2.6m、短軸1.1mの隅丸長方形で、深さ52cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

長軸方向 N-35°-E

覆土 ロームブロックの含有が見られることから人為堆積と思われる。1・2層は、ローム粒子を少量含む黒褐色土。3層は、ロームブロック中量とローム粒子を少量、黒色ブロックを極少量含む褐色土。4層は、ローム粒子少量とロームブロックを極少量含む灰褐色土である。

遺物 覆土中から弥生式土器180片と礫片（砂質片岩、砂岩）が出土している。1の壺の胴部片は横位の状態で北東壁際覆土の中・上層から、2の甕の口縁部片と3の蓋片は覆土中から出土している。

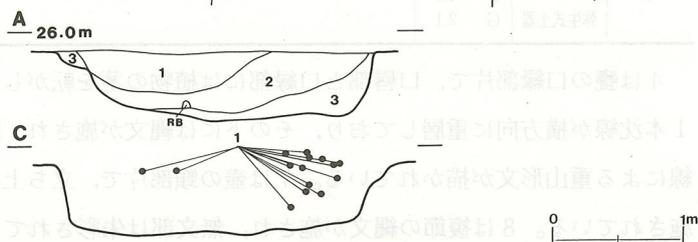
所見 本跡は、遺構の形状や足洗1式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉の土壙墓と思われる。また、並列している第47B号土壙墓との重複関係は土層断面図に見られないことから同時に掘られたものと思われる。



第47B号土壙墓 (第21図)

位置 調査区の北西部, B3j,区。

規模と形状 掘り方は長軸1.4m, 短軸0.8mの隅丸長方形で, 深さ17cmである。底面は平坦であるが, 南西側にわずかな段を持っている。壁は緩やかに立ち上がっている。



第21図 第47A・B号土壙墓実測図

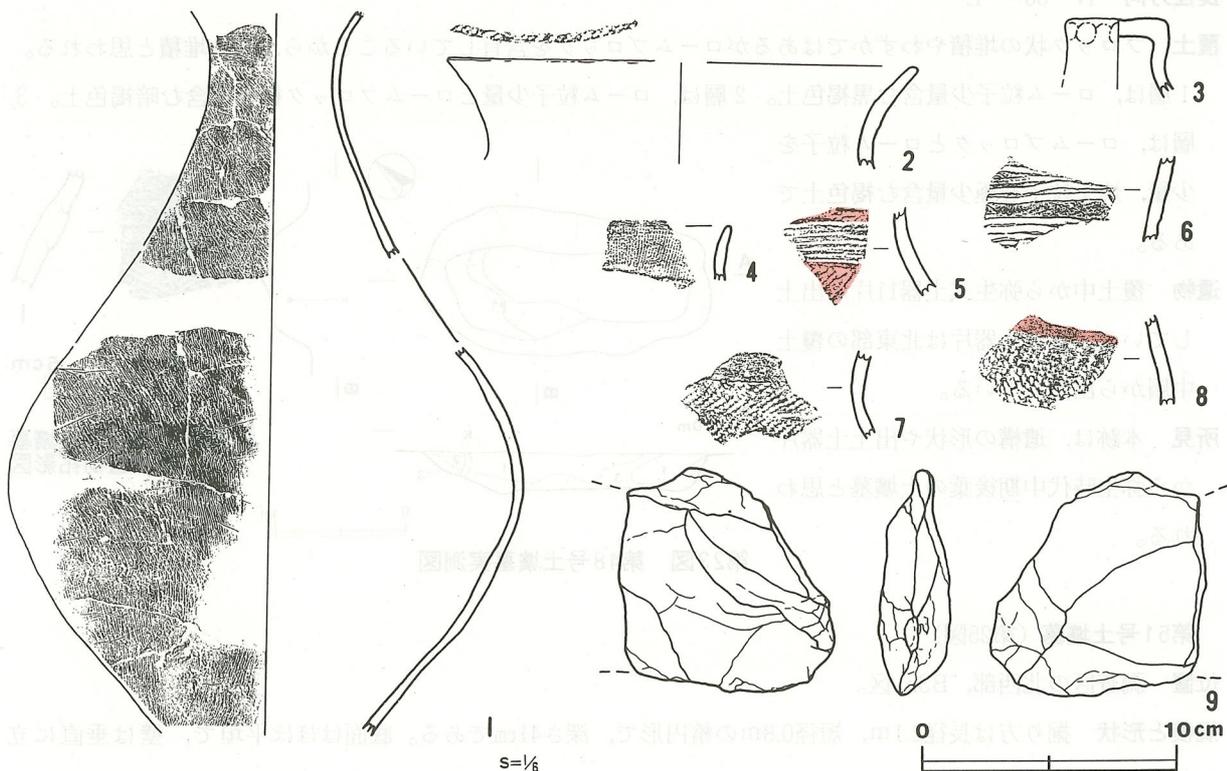
北東壁下に本跡に伴うピットが確認されている。

長軸方向 N-35°-E

覆土 水平堆積が見られることから人為堆積と思われる。(覆土の解説は, 第47A号土壙墓を参照。)

遺物 覆土中から弥生式土器21片が出土している。1の壺片は南東壁際の覆土上層から出土している。

所見 本跡は、遺構の形状や足洗1式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉の土壙墓と思われる。また、他の土壙墓に比べ、規模が小さいことから小児用と思われる。



第22図 第47A・B号土壙墓出土遺物実測・拓影図

第47A・B号土壌墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第22図 1	壺 弥生式土器	B [57.4]	胴部・頸部片。胴部中位に最大径を持ち、無節の縄文が施されている。頸部は大きく萎んで外反し、中位から上は無文部となる。	金雲母、長石 灰褐色 良好	P 29, 35%
2	甕 弥生式土器	A [18.6] B (4.0)	口縁部片。口縁部は「く」の字状に立ち上がる。口唇部には縄文が施されている。	長石、白色鉱物 黒褐色 普通	P 30, 3%
3	蓋 弥生式土器	B (2.9) F 4.1 G 2.1	天井部片。天井部は平坦で、下方に直線的に伸びている。	長石、石英 赤褐色 普通	P 32, 20%

4は甕の口縁部片で、口唇部と口縁部には植物の茎を転がした擬縄文が施されている。5は壺の頸部片で、1本沈線が横方向に重層しており、その下には縄文が施され、縄文の部分は朱彩されている。6は太い1本沈線による重山形文が描かれている。7は壺の頸部片で、立ち上がりの部分は無文で、肩部以下は単節の縄文が施されている。8は複節の縄文が施され、無文部は朱彩されている。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第22図 9	石 鍬	(8.6)	8.9	2.8	(202.4)	砂 岩	覆 土	Q 3

第48号土壌墓 (第23図)

位置 調査区の北西部, B3i<sub>1</sub>区。

規模と形状 掘り方は長径2.3m, 短径1.2mの楕円形で、深さ37cmである。底面は皿状をしており、壁は緩やかに立ち上がっている。

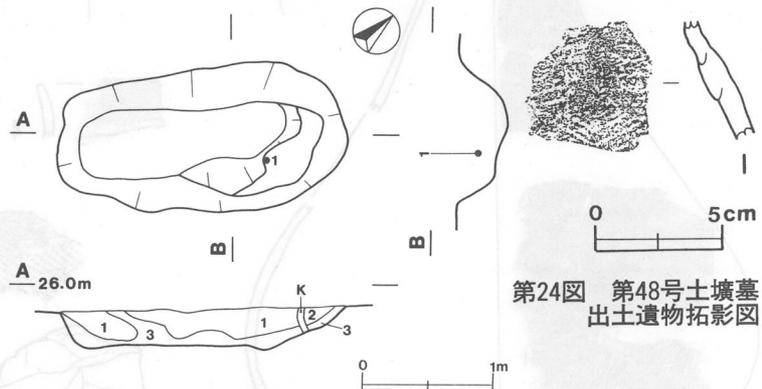
長径方向 N-36°-E

覆土 ブロック状の堆積やわずかではあるがロームブロックを含有していることから、人為堆積と思われる。

1層は、ローム粒子少量含む黒褐色土。2層は、ローム粒子少量とロームブロック極少量含む暗褐色土。3層は、ロームブロックとローム粒子を少量、焼土粒子を極少量含む褐色土である。

遺物 覆土中から弥生式土器11片が出土している。1の土器片は北東部の覆土中層から出土している。

所見 本跡は、遺構の形状や出土土器片から弥生時代中期後葉の土壌墓と思われる。



第23図 第48号土壌墓実測図

第24図 第48号土壌墓出土遺物拓影図

第51号土壌墓 (第25図)

位置 調査区の北西部, B3h<sub>2</sub>区。

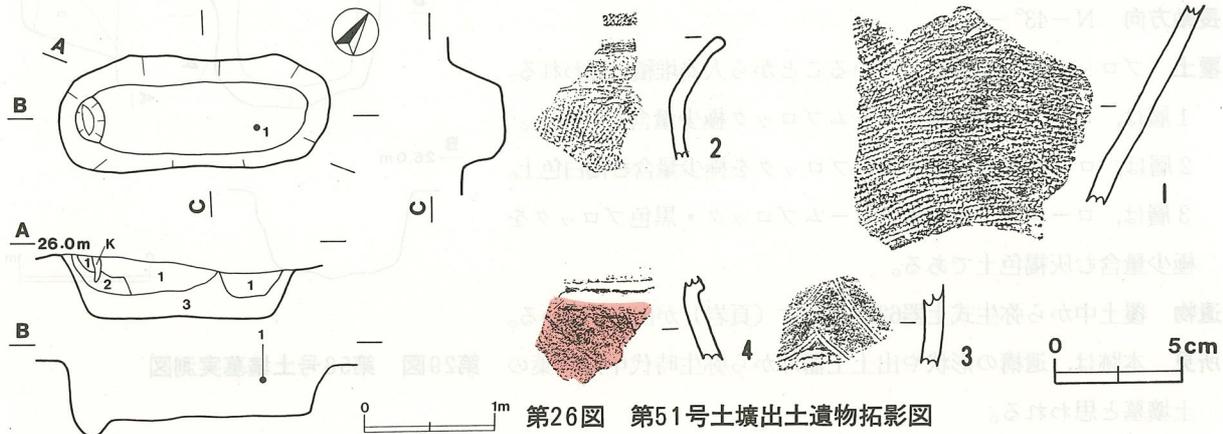
規模と形状 掘り方は長径2.1m, 短径0.8mの楕円形で、深さ41cmである。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がっている。

長径方向 N-54°-E

**覆土** ロームブロックや焼土粒子の含有が見られることから人為堆積と思われる。1層は、ローム粒子を少量含む黒褐色土。2層は、ローム粒子少量とロームブロック極少量含む暗褐色土。3層は、ローム粒子とロームブロックを少量、焼土粒子を極少量含む褐色土である。

**遺物** 覆土中から弥生式土器16片が出土している。1の胴部片は北東部の覆土上層から、2～4の破片は覆土中から出土している。

**所見** 本跡は、遺構の形状や足洗2式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉の土壌墓と思われる。



第26図 第51号土壌出土遺物拓影図

第25図 第51号土壌墓実測図

1は単節の縄文が施されている。2は甕の胴部・口縁部片で、口唇部には縄文が、胴部には附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。3は平行沈線による重連弧文が描かれている。4は壺の胴部片で、頸部との境に断面「三角形」の帯が巡っている。

**第53号土壌墓（第27図）**

**位置** 調査区の北西部，B3g<sub>2</sub>区。

**規模と形状** 遺構の北東部が調査区外に延びているため、全容は不明であるが、掘り方は長径1.1m，短径(0.8)mで楕円形の一部と思われる。深さは37cmである。底面はやや凹凸が見られ，壁は外傾して立ち上がっている。

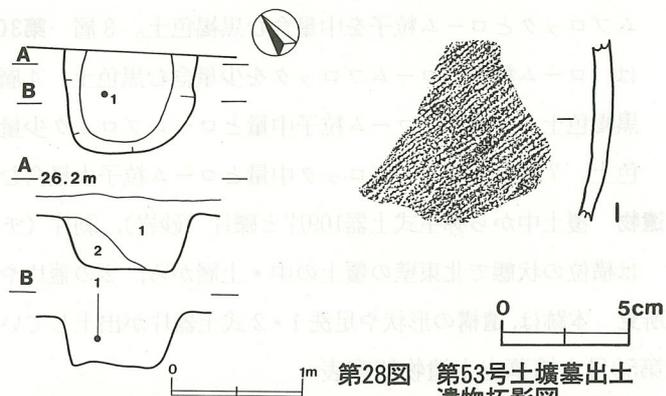
**長径方向** N-45°-E

**覆土** 人為堆積。1層は、ローム粒子少量と黒色ブロック極少量含む灰褐色土。2層は、ローム粒子を極少量含む黒褐色土である。

**遺物** 覆土中から弥生式土器22片が出土している。

1の胴部片は覆土中層から出土している。

**所見** 本跡は、遺構の形状や出土土器片から弥生時代中期後葉の土壌墓と思われる。



第27図 第53号土壌墓実測図

第28図 第53号土壌墓出土遺物拓影図

1は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

第58号土墳墓 (第29図)

位置 調査区の北西部, B3h<sub>1</sub>区。

重複関係 本跡は, 第57号土坑に切られている。

規模と形状 掘り方は長軸 (2.7) m, 短軸1.4mの隅丸長方形で, 深さ62cmである。底面はやや凹凸が見られ, 壁は外傾して立ち上がっている。

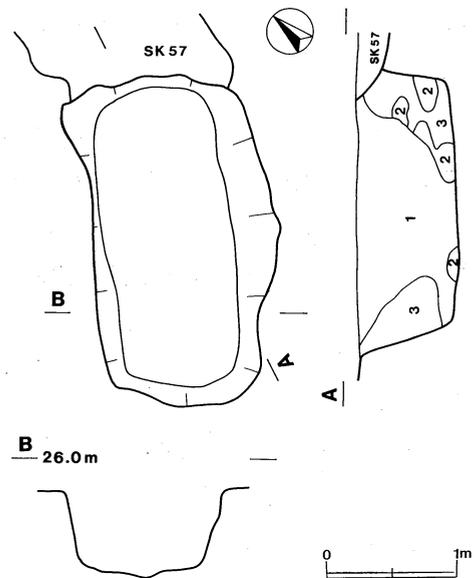
長軸方向 N-43°-E

覆土 ブロック状の堆積をしていることから人為堆積と思われる。

- 1層は, ローム粒子少量とロームブロック極少量含む黒色土。
- 2層は, ローム粒子少量と黒色ブロックを極少量含む褐白色土。
- 3層は, ローム粒子を少量とロームブロック・黒色ブロックを極少量含む灰褐色土である。

遺物 覆土中から弥生式土器62片と剥片 (頁岩) が出土している。

所見 本跡は, 遺構の形状や出土土器片から弥生時代中期後葉の土墳墓と思われる。



第29図 第58号土墳墓実測図

第59号土墳墓 (第30図)

位置 調査区の北西部, B3g<sub>1</sub>区。

規模と形状 掘り方は長径2.6m, 短径1.6mの不整楕円形で, 深さ60cmである。底面はやや凹凸が見られ硬く締まっている。壁は緩やかに立ち上がっている。

長径方向 N-45°-E

覆土 ロームブロックの含有が多いことやブロック状の堆積をしていることから人為堆積と思われる。1層は, ローム粒子を少量含む黒色土。2層は, ロームブロックとローム粒子を中量含む黒褐色土。3層

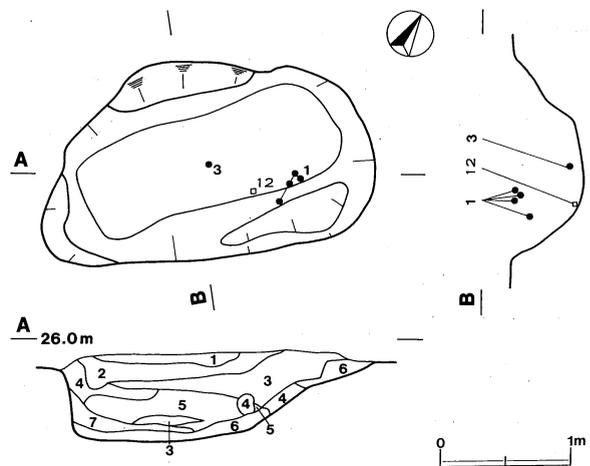
- 4層は, ローム粒子中量とロームブロック極少量含む黒褐色土。
- 5層は, ローム粒子中量とロームブロック少量含む極暗褐色土。
- 6層は, 黒色粒子を中量含む褐色土。
- 7層は, ロームブロック中量とローム粒子少量含む暗褐色土である。

遺物 覆土中から弥生式土器109片と礫片 (砂岩), 剥片 (チャート, 頁岩) が出土している。1の甕の胴部片は横位の状態で北東壁の覆土の中・上層から, 2の蓋片や3~11の土器片は覆土中から出土している。

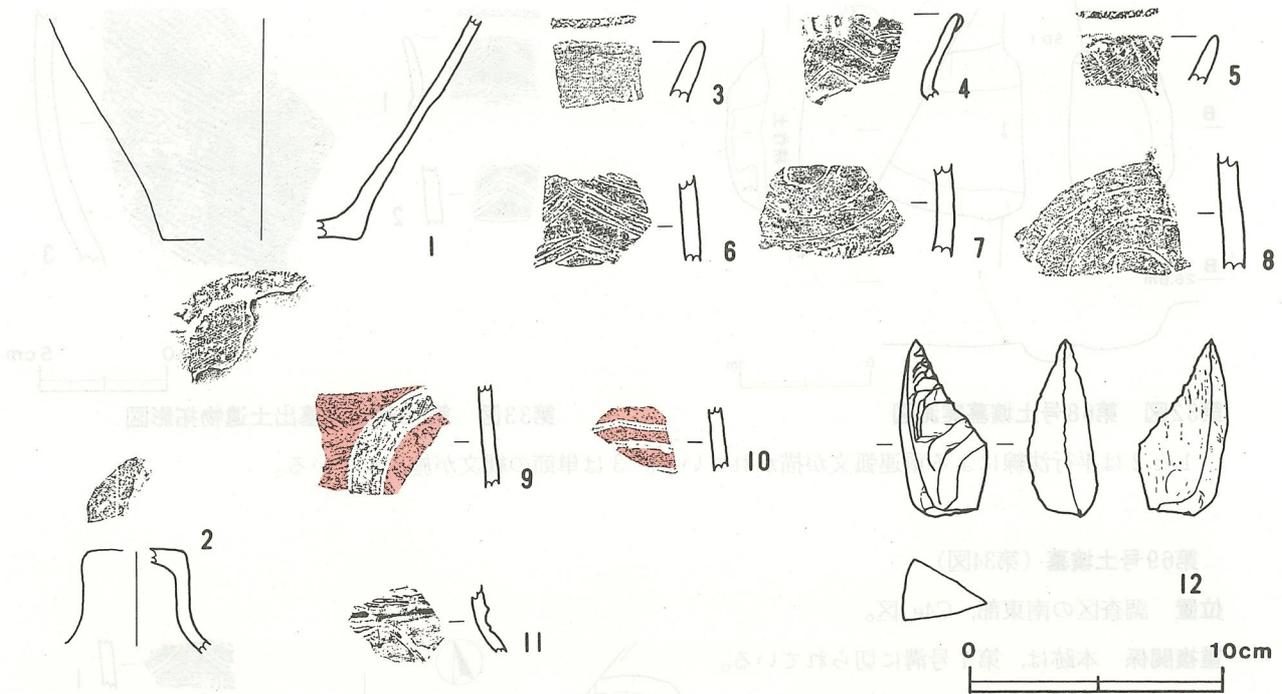
所見 本跡は, 遺構の形状や足洗1・2式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉の土墳墓と思われる。

第59号土墳墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第31図 1	甕 弥生式土器	B (8.8) C [7.8]	底部・胴部片。平底で, 平織布痕が見られる。胴部は内彎気味に外傾する。二次火熱痕が見られ, 全体的に剥離が激しい。	長石, 石英 赤褐色 普通	P33, 30%
2	蓋 弥生式土器	B (3.8) F [3.8] G 2.8	天井部・体部片。天井部は平底で, 木葉痕が見られる。体部は天井部から直線的に伸び, 中位から下方に向けて「ハ」の字状に開く。	長石, 小石 褐色 良好	P34, 5%



第30図 第59号土墳墓実測図



第31図 第59号土壌墓出土遺物実測・拓影図

3は甕の口縁部片で、口唇部に縄文が施されている。4は壺の口縁部片で、口縁部上位に2個1単位の貼瘤が付き、平行沈線による重山形文が描かれている。5は口縁部片で、口唇部に縄文が施され、口縁部には1本沈線による重山形文が描かれている。6は平行沈線による重山形文が描かれている。7と8は胴部片で、1本沈線による渦巻文が描かれている。9は1本沈線による渦巻文が描かれ、縄文部は朱彩されている。10は太い沈線による重山形文が描かれ、全面朱彩されている。11は壺の頸部片で、頸部には平行沈線が重層し、胴部との境には断面「三角形」の帯が巡り、胴部には平行沈線による山形文が描かれている。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第31図 12	剥片	7.1	2.7	2.4	49.5	頁岩	覆土	Q4

### 第68号土壌墓 (第32図)

位置 調査区の南東部, C4e<sub>1</sub>区。

重複関係 本跡は、第1号溝に切られている。

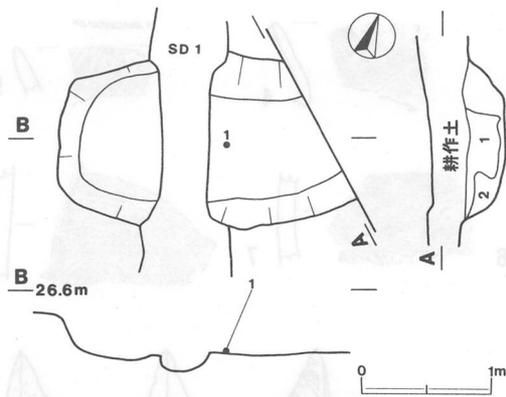
規模と形状 遺構の東部が調査区外に延びているため、全容は不明であるが、掘り方は長軸(2.0)m、短軸1.3mで隅丸長方形の一部と思われる。深さは37cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。

長軸方向 N-67°-E

覆土 レンズ状の堆積をしていないことから人為堆積と思われる。1層は、ローム粒子少量とロームブロック極少量含む黒褐色土。2層は、ローム粒子を少量とロームブロック・黒色ブロックを極少量含む灰褐色土である。

遺物 覆土中から弥生式土器19片が出土している。3の胴部片は底面から出土している。

所見 本跡は、遺構の形状や足洗2式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉の土壌墓と思われる。



第32図 第68号土墳墓実測図



第33図 第68号土墳墓出土遺物拓影図

1と2は平行沈線による重連弧文が描かれている。3は単節の縄文が施されている。

第69号土墳墓 (第34図)

位置 調査区の南東部, C4e<sub>1</sub>区。

重複関係 本跡は, 第1号溝に切られている。

規模と形状 遺構の東部が調査区外に延

びているため, 全容は不明である。確

認した掘り方は長軸(1.8)m, 短軸1.1

mの隅丸長方形になるものと思われる。

深さ26cmである。底面はほぼ平坦で,

壁は緩やかに立ち上がっている。

長軸方向 N-80°-E

覆土 ローム粒子と黒色ブロックを極少

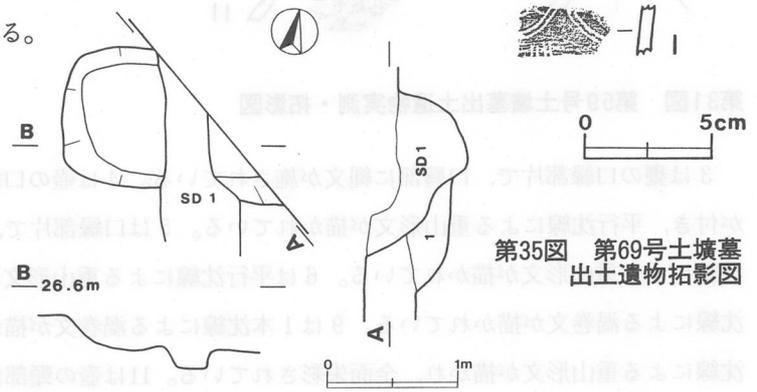
量含む灰褐色土である。

遺物 覆土中から弥生式土器5片が出土している。

所見 本跡は, 遺構の形状や足洗2式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉の土墳墓と思われる。

1は平行沈線による連弧文が描かれている。

第34図 第69号土墳墓実測図



第35図 第69号土墳墓出土遺物拓影図

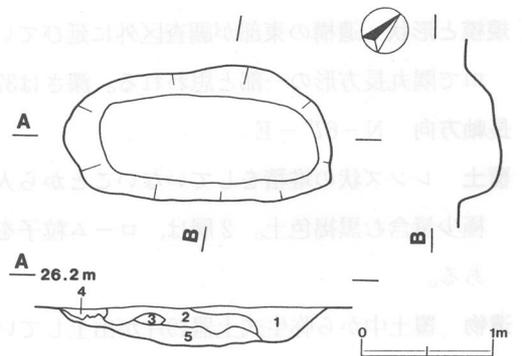
第84号土墳墓 (第36図)

位置 調査区の中央部西寄り, C3e<sub>4</sub>区。

規模と形状 掘り方は長径2.5m, 短径1.1mの楕円形で, 深さ30cmである。底面はやや凹凸が見られ, 壁は緩やかに立ち上がっている。

長径方向 N-47°-E

覆土 ロームブロックの含有が多いことやブロック状の堆積をしていることから人為堆積と思われる。1層は, ローム粒子中量とロームブロックを極少量含む黒褐色土。2層は, ローム粒子中量とロームブロックを少量含む極暗褐色土。3層は, ローム粒子中量とロームブロックを少量含む黒褐



第36図 第84号土墳墓実測図

色土。4層は、ローム粒子とロームブロック少量含む黒褐色土。5層は、黒色粒子を多量に含む褐色土である。

遺物 覆土中から弥生式土器3片が出土している。

所見 本跡は、遺構の形状や足洗2式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉の土壌墓と思われる。

第85号土壌墓 (第37図)

位置 調査区の中央部西寄り, C3e<sub>4</sub>区。

規模と形状 掘り方は長軸2.5m, 短軸1.1mの隅丸長方形で、深さ55cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

長軸方向 N-65°-E

覆土 ロームの含有が多いことから人為堆積と思われる。

1層は、ローム粒子とロームブロックを中量と

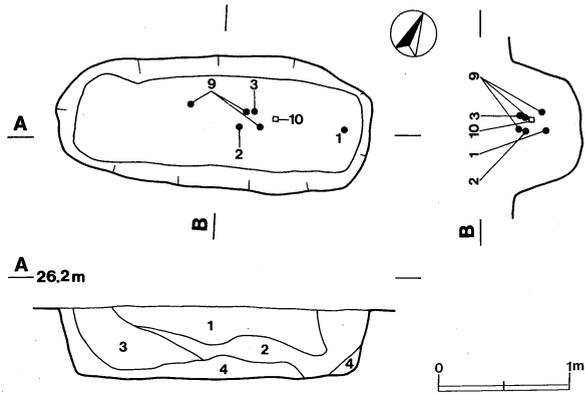
スコリア粒子を極少量含む黒褐色土。2層は、ロー

ム粒子を中量とロームブロック・スコリア粒子を少量含む黒褐色土。3層は、ローム粒子多量とロームブロッ

ク中量, スコリア粒子・炭化物極少量含む極暗褐色土。4層は、ローム粒子を多量に含む暗褐色土である。

遺物 覆土上層を中心に、弥生式土器57片と礫片(長石)が出土している。1の壺の胴部片は北東壁際の覆土中層から出土している。2の壺の底部片は覆土上層から出土しており、隣接している第84号土壌墓出土のものと同接できた。9の胴部片は中央部の覆土中層と上層の接合資料である。10のチョッパー(砂岩製)は、覆土上層から出土している。

所見 本跡は、遺構の形状や足洗2式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉の土壌墓と思われる。また、2の壺片が第84号土壌墓のものと同接できたことと土壌に土を埋める際に破碎した土器と一緒に埋めた可能性があることから、両土壌墓は同時に掘られたものと思われる。



第37図 第85号土壌墓実測図

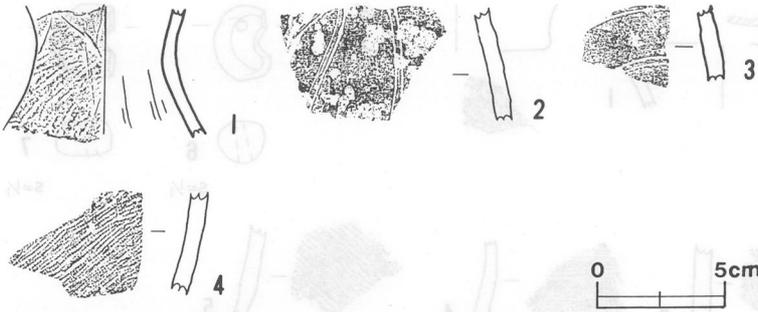
第85号土壌墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第38図 1	壺 弥生式土器	B (6.6)	胴部片。胴部は内彎しながら外傾する。外面へう磨き。	白色鈹物, 石英 黄褐色 普通	P35, 30%
2	壺 弥生式土器	B (4.2) C [8.0]	底部・胴部片。平底で、木葉痕が見られる。胴部下位で外彎し、さらに内彎気味に外傾する。	白色鈹物, 石英 乳白色 良好	P36, 10%
3	不明 弥生式土器	B (2.1) C [7.9]	底部片。平底で、平織布痕が見られる。	長石, 石英 褐色 普通	P37, 5%

4は甕の口縁部片で、口唇部に縄文が施されている。5は口縁部片で、附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。6と7は壺の頸部片で、横方向の平行沈線が重層している。8と9は胴部片で、反捺の縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第38図 10	チョッパー	10.6	9.1	4.4	546.8	砂岩	覆土上層	Q5





第40図 第86号土壌墓出土遺物実測・拓影図

第87号土壌墓 (第41図)

位置 調査区の中央部西寄り, C3d<sub>3</sub>区。

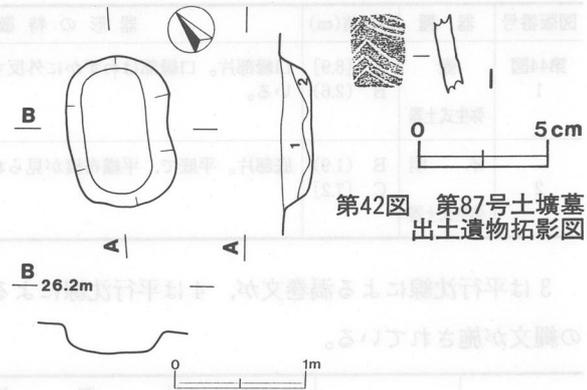
規模と形状 掘り方は長軸1.2m, 短軸0.8mの隅丸長方形で, 深さ19cmである。底面はほぼ平坦で, 壁は緩やかに立ち上がっている。

長軸方向 N-37°-E

覆土 ローム粒子の含有が多いことから人為堆積と思われる。1層は, ローム粒子中量とロームブロック・スコリア粒子を極少量含む極暗褐色土。2層は, 黒色粒子を中量含む褐色土である。

遺物 覆土中から弥生式土器10片と剥片(赤瑪瑙)が出土している。

所見 本跡は, 遺構の形状や足洗2式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉の土壌墓と思われる。また, 他の土壌墓に比べ, 規模が小さいことから小児用のものと思われる。



第42図 第87号土壌墓出土遺物拓影図

第41図 第87号土壌墓実測図

1は平行沈線による重連弧文が描かれている。

第88号土壌墓 (第43図)

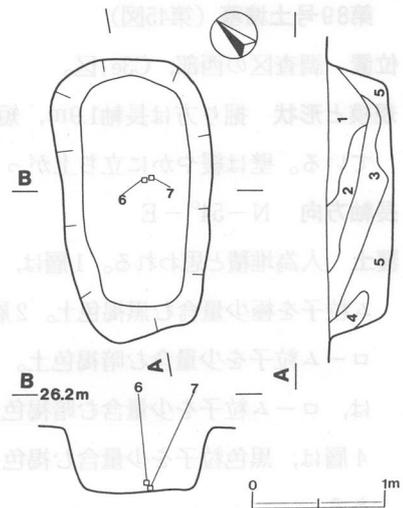
位置 調査区の中央部西寄り, C3c<sub>3</sub>区。

規模と形状 掘り方は長軸2.2m, 短軸1.2mの隅丸長方形で, 深さ52cmである。底面は平坦で, 壁は外傾して立ち上がっている。

長軸方向 N-45°-E

覆土 ロームの含有が多いことから人為堆積と思われる。1層は, ローム粒子中量とスコリア粒子を少量含む黒褐色土。2層は, ロームブロックを中量とローム粒子・スコリア粒子を極少量含む極暗褐色土。3層は, ローム粒子少量とロームブロック・スコリア粒子極少量含む極暗褐色土。4層は, ローム粒子を少量含む極暗褐色土。5層は, ローム粒子多量とロームブロック少量, スコリア粒子極少量含む暗褐色土である。

遺物 覆土中から弥生式土器26片と勾玉(凝灰岩製)2点が出土している。



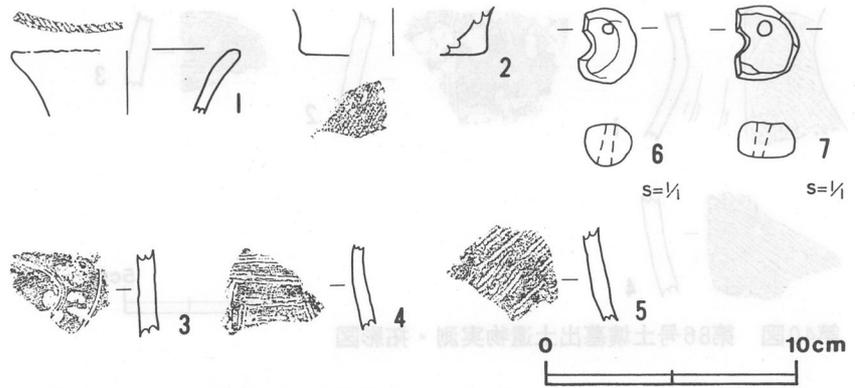
第43図 第88号土壌墓実測図

る。1の壺の口縁部は覆土中層から、6と7の勾玉は中央部の覆土下層から出土している。

所見 本跡は、遺構の形状や足洗2式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉の土壌墓と思われる。

また、貝輪を出土した第117号土器棺墓が近接しており、

土器棺墓と土壌墓の関係を考える上でも重要な遺構配置と思われる。



第44図 第88号土壌墓出土遺物実測・拓影図

第88号土壌墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第44図 1	壺 弥生式土器	A [8.9] B (2.6)	口縁部片。口縁部はわずかに外反する。口唇部には縄文が施されている。	白色鉱物, 石英 黒褐色 普通	P39, 3%
2	不明 弥生式土器	B (1.9) C [7.2]	底部片。平底で、平織布痕が見られる。	白色鉱物, スコリア 黒褐色 普通	P40, 2%

3は平行沈線による渦巻文が、4は平行沈線による重四角文が描かれている。5は附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第44図 6	勾玉	0.9	0.8	0.5	0.7	凝灰岩	覆土下層	Q6
7	勾玉	0.9	0.8	0.5	0.7	凝灰岩	覆土下層	Q7

第89号土壌墓(第45図)

位置 調査区の西部, C3e<sub>1</sub>区。

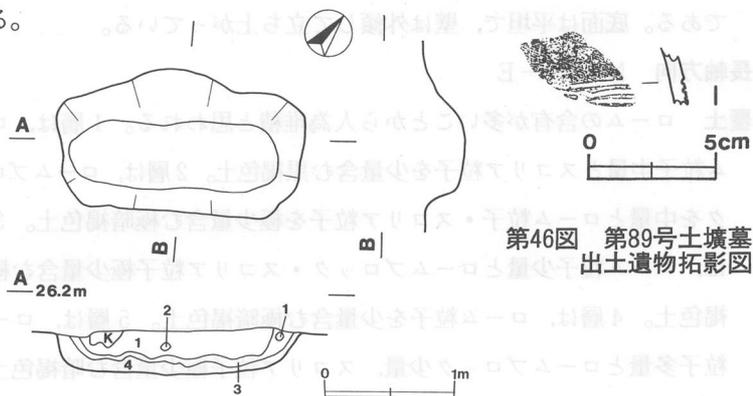
規模と形状 掘り方は長軸1.9m, 短軸1.1mの隅丸長方形で、深さ34cmである。底面はほぼ平坦で硬く締まっている。壁は緩やかに立ち上がっている。

長軸方向 N-54°-E

覆土 人為堆積と思われる。1層は、ローム粒子を極少量含む黒褐色土。2層は、ローム粒子を少量含む暗褐色土。3層は、ローム粒子を少量含む暗褐色土。4層は、黒色粒子を少量含む褐色土である。

遺物 覆土中から弥生式土器8片が出土

している。1の壺の頸部片は覆土中層



第46図 第89号土壌墓出土遺物拓影図

第45図 第89号土壌墓実測図

から出土している。

所見 本跡は、遺構の形状や足洗式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉の土壌墓と思われる。

1は壺の頸部片で、横方向に太い沈線が重層している。

### 第90号土壌墓（第47図）

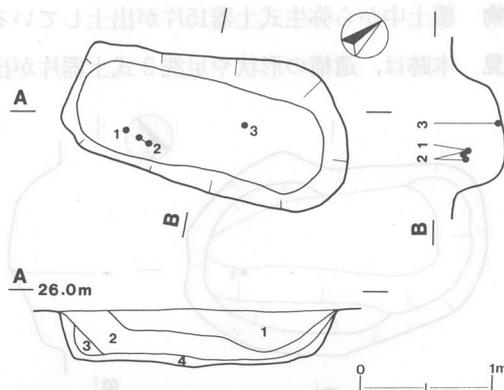
位置 調査区の西部、C3d<sub>3</sub>区。

規模と形状 掘り方は長軸2.3m、短軸1.1mの隅丸長方形で、深さ40cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。

長軸方向 N-54°-E

覆土 ローム粒子の含有が多いことから人為堆積と思われる。

1層は、ローム粒子を少量含む黒褐色土。2層は、ローム粒子少量とロームブロックを極少量含む極暗褐色土。3層

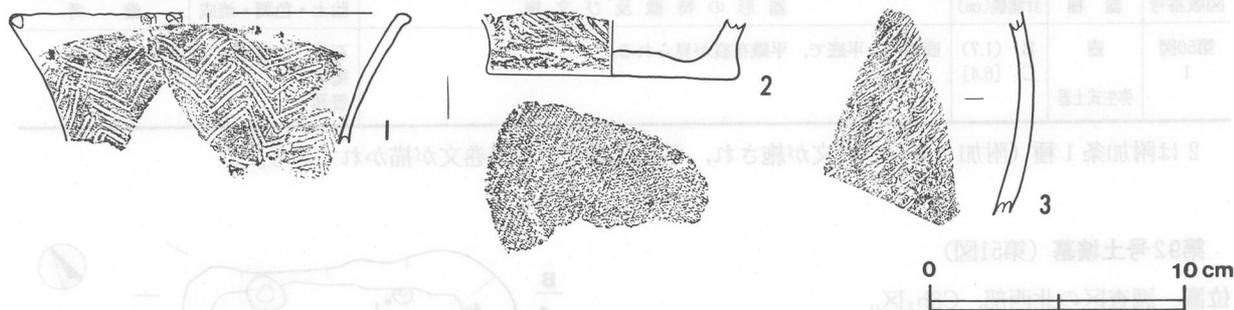


第47図 第90号土壌墓実測図

は、ローム粒子を中量含む暗褐色土。4層は、黒色粒子を多量に含む褐色土である。

遺物 覆土上層を中心に弥生式土器24片が出土している。1の壺の口縁部と2の底部片は南西部の覆土上層から、3の胴部片は北東寄りの底面から出土している。

所見 本跡は、遺構の形状や足洗2式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉の土壌墓と思われる。



第48図 第90号土壌墓出土遺物実測・拓影図

### 第90号土壌墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第48図 1	壺 弥生式土器	A [15.6] B (5.2)	口縁部片。口唇部には縄文が施されている。口縁端部には2つ単位の貼瘤が付けられている。口縁外面は平行沈線による重山形文が施されている。	長石、白色鈹物 乳白色 普通	P41, 20%
2	甕 弥生式土器	B (2.2) C [9.8]	底部・胴部片。平底で、平織布痕が見られる。胴部は無節の縄文が施されている。	白色鈹物、石英 褐色 普通	P42, 10%

3は反撚の縄文が施されている。

### 第91号土壌墓（第49図）

位置 調査区の北西部、C3b<sub>3</sub>区。

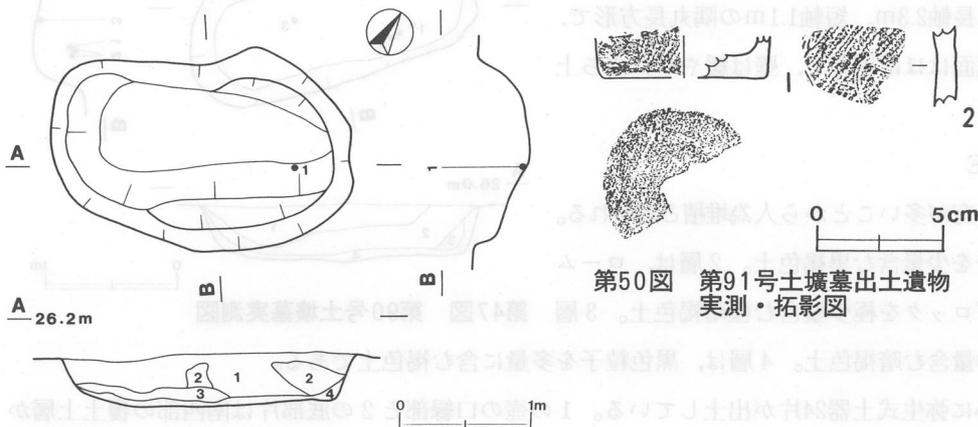
規模と形状 掘り方は長径2.4m、短径1.5mの楕円形で、深さ40cmである。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

長径方向 N-62°-E

**覆土** ブロック状の堆積をしていることから人為堆積と思われる。1層は、ローム粒子少量と焼土粒子・焼土ブロックを極少量含む黒色土。2層は、ローム粒子を少量含む灰褐色土。3層は、含有物のない灰褐色土。4層は、ローム粒子を少量含む褐色土である。

**遺物** 覆土中から弥生式土器15片が出土している。1の底部片は底面から出土している。

**所見** 本跡は、遺構の形状や足洗2式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉の土壌墓と思われる。



第50図 第91号土壌墓出土遺物  
実測・拓影図

第49図 第91号土壌墓実測図

第91号土壌墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第50図 1	壺 弥生式土器	B (1.7) C [6.4]	底部片。平底で、平織布痕が見られる。	石英、白色鉱物 褐色 普通	P43, 10%

2は附加条1種(附加2条)の縄文が施され、平行沈線による渦巻文が描かれている。

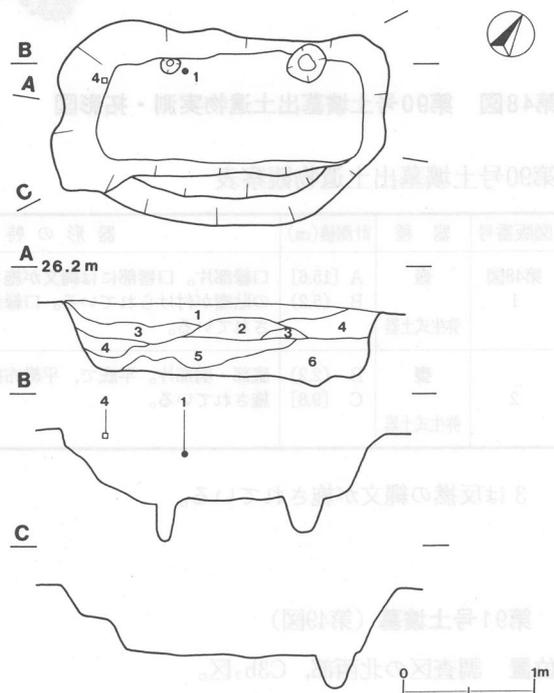
**第92号土壌墓 (第51図)**

**位置** 調査区の北西部, C3b<sub>2</sub>区。

**規模と形状** 掘り方は長軸2.5m, 短軸1.5mの隅丸長方形で、深さ52cmである。底面はやや凹凸が見られ、壁は緩やかに立ち上がっている。

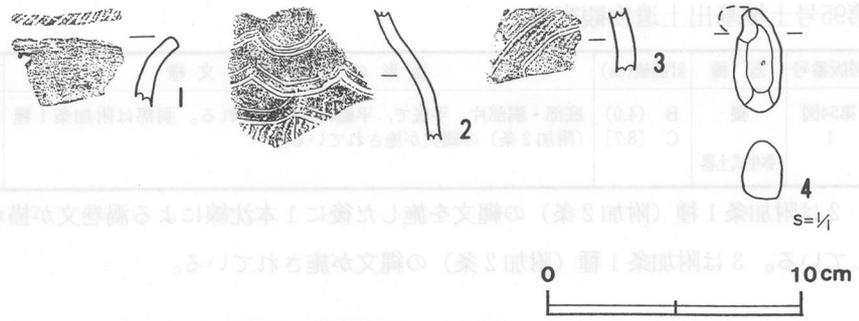
長軸方向 N-57°-E

**覆土** ロームブロックの含有が多いこととブロック状の堆積をしていることから人為堆積と思われる。1層は、ローム粒子を少量含む黒褐色土。2層は、ローム粒子を中量とロームブロック極少量含む褐色土。3層は、黒色粒子多量とローム粒子少量, ロームブロック極少量含む黒褐色土。4層は、ローム粒子とロームブロックを少量と焼土粒子極少量含む黒褐色土。5層は、ローム粒子とロームブロックを少量含む褐色土。6層は、ローム粒子少量とロームブロック・黒色粒子を極少量含む黒褐色土である。



第51図 第92号土壌墓実測図

遺物 覆土中・上層を中心に弥生式土器25片と勾玉（凝灰岩製）1点、礫片（砂岩）が出土している。1の甕片は北西壁際の覆土中層から、4の勾玉は西壁際の覆土上層から出土している。



第52図 第92号土壌墓出土遺物実測・拓影図

所見 本跡は、遺構の形状や

足洗2式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉の土壌墓と思われる。

第92号土壌墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第52図 4	勾玉	(1.4)	[0.7]	0.6	(0.4)	凝灰岩	覆土上層	Q8

1は甕の口縁部片で、口唇部に縄文が施されている。2は壺の胴部片で、平行沈線による重連弧文が、3は平行沈線による渦巻文が描かれている。

第95号土壌墓（第53図）

位置 調査区の北西部、C3a<sub>2</sub>区。

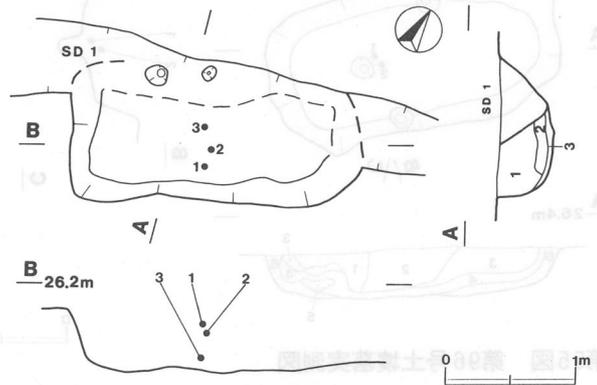
重複関係 本跡は、第1号溝に切られている。

規模と形状 本跡の北西部は第1号溝に切られており、全容は不明であるが、掘り方は長軸（2.2）m、短軸（0.8）mで隅丸長方形の一部と思われる。深さ49cmである。底面は凹凸が見られ、壁は緩やかに立ち上がっている。

長軸方向 N-60°-E

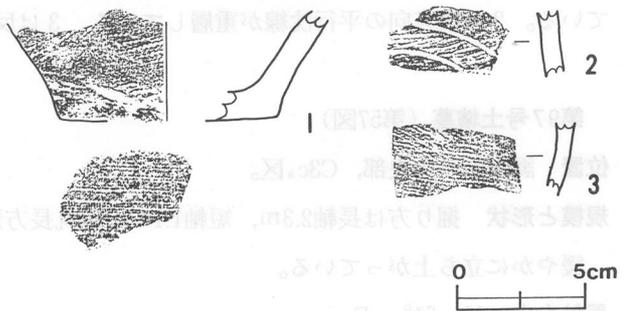
覆土 人為堆積。1層は、ローム粒子少量とロームブロックを極少量含む黒褐色土。2層は、ローム粒子を極少量含む灰褐色土。3層は、ローム粒子を少量含む褐色土である。

遺物 覆土中から弥生式土器22片が出土している。1の甕の底部片は中央部の覆土上層から、3の胴部片は中央部の覆土下層から出土している。



第53図 第95号土壌墓実測図

所見 2の胴部片は猪式土器と思われるが、他の土壌墓からは足洗式を中心とする土器片がほとんどで、1片を持って中期中葉の土壌墓と断定することは危険であることや他の遺跡において土壌墓に一形式古い土器を副葬した例もあり、本跡も弥生時代中期後葉のものとした。



第54図 第95号土壌墓出土遺物実測・拓影図

第95号土墳墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第54図 1	甕 弥生式土器	B (4.0) C [8.7]	底部・胴部片。平底で、平織布痕が見られる。胴部は附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	スコリア多量 乳白色 普通	P45, 5%

2は附加条1種(附加2条)の縄文を施した後に1本沈線による渦巻文が描かれ、渦巻の間の縄文を磨り消している。3は附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

第96号土墳墓(第55図)

位置 調査区の中央部, C3d<sub>7</sub>区。

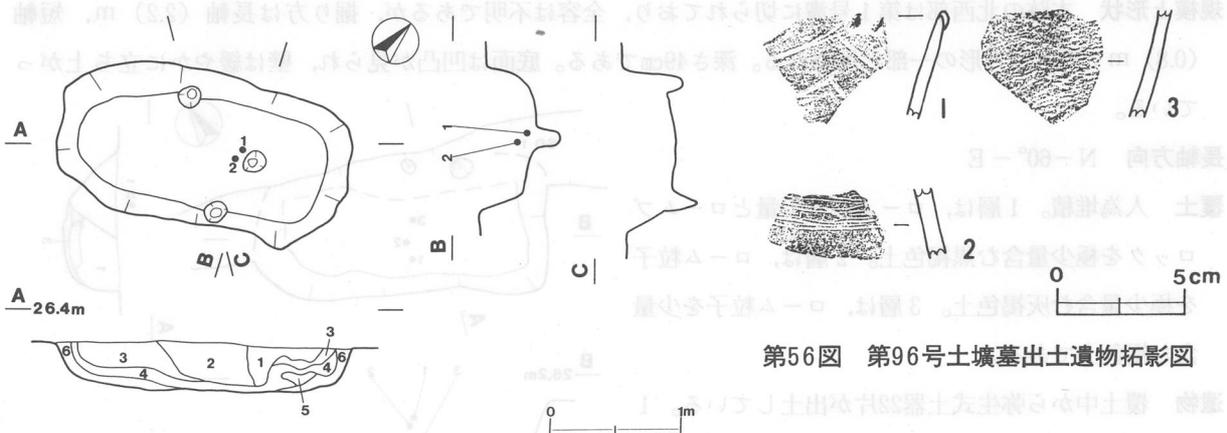
規模と形状 掘り方は長軸2.3m, 短軸1.2mの隅丸長方形で、深さ41cmである。底面はやや凹凸が見られ、壁は緩やかに立ち上がっている。

長軸方向 N-57°-E

覆土 ロームの含有が多いことやブロック状の堆積をしていることから人為堆積と思われる。1層は、ローム粒子極少量含む黒色土。2層は、ロームブロック中量とローム粒子を少量含む黒褐色土。3層は、ロームブロック多量とローム粒子中量を含む極暗褐色土。4層は、ローム粒子とロームブロックを少量含む灰褐色土。5層は、黒色粒子を多量に含む褐色土。6層は、黒色粒子を中量含む褐色土である。

遺物 覆土中から弥生式土器46片が出土している。1の壺の口縁部片と2の胴部片は中央付近の覆土下層から出土している。

所見 本跡は、遺構の形状や足洗2式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉の土墳墓と思われる。



第56図 第96号土墳墓出土遺物拓影図

第55図 第96号土墳墓実測図

1は壺の口縁部片で、口縁部上位に2個1単位の貼瘤が付き、口縁部には平行沈線による重連弧文が描かれている。2は横方向の平行沈線が重層している。3は反撚の縄文が施されている。

第97号土墳墓(第57図)

位置 調査区の中央部, C3c<sub>8</sub>区。

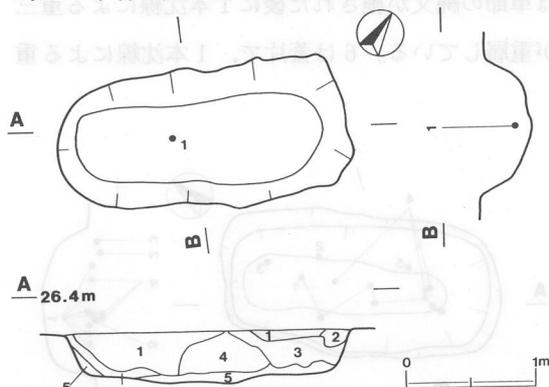
規模と形状 掘り方は長軸2.3m, 短軸1.1mの隅丸長方形で、深さ41cmである。底面は皿状をしており、壁は緩やかに立ち上がっている。

長軸方向 N-51°-E

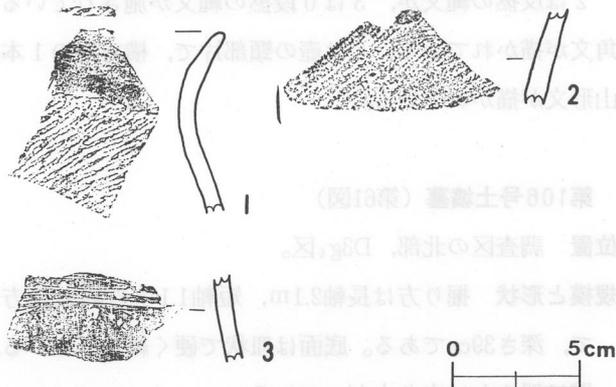
覆土 ブロック状の堆積をしていることから人為堆積と思われる。1層は、ローム粒子を極少量含む黒色土。

2層は、ローム粒子を中量含む黒色土。3層は、ローム粒子少量とロームブロック・黒色ブロックを極少量含む暗褐色土。4層は、ローム粒子とロームブロックを極少量含む黒褐色土。5層は、ローム粒子中量とロームブロック極少量含む褐色土である。

**遺物** 覆土中層を中心に弥生式土器33片が出土している。1の甕の頸部片は中央の覆土下層から出土している。  
**所見** 本跡は、遺構の形状や足洗式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉の土壌墓と思われる。



第57図 第97号土壌墓実測図



第58図 第97号土壌墓出土遺物拓影図

1は甕の胴部・口縁部片で、口唇部に縄文が施され、胴部は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。2は附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。3は壺の頸部片で、横方向の太い沈線が重層している。

### 第100号土壌墓（第59図）

**位置** 調査区の中央部北東寄り，C3b<sub>2</sub>区。

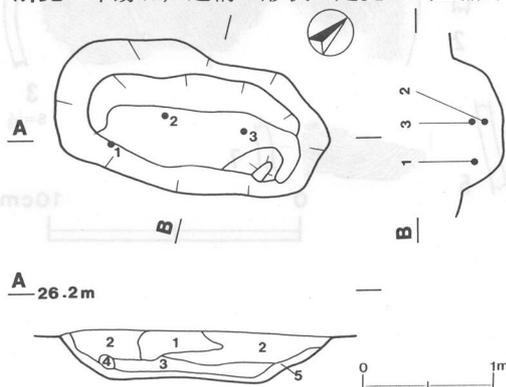
**規模と形状** 掘り方は長径2.2m，短径1.1mの楕円形で，深さ38cmである。底面は皿状で，壁は緩やかに立ち上がっている。

**長径方向** N-54°-E

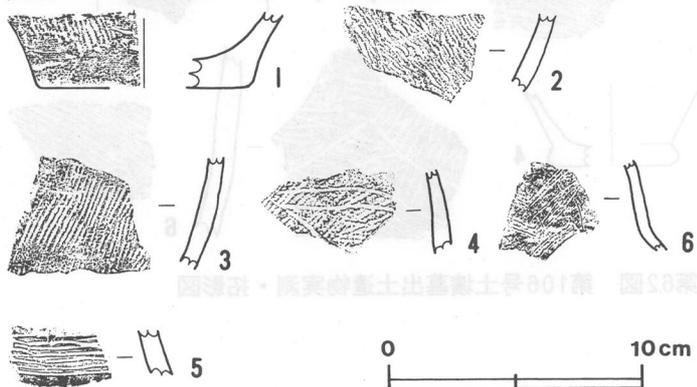
**覆土** ロームの含有が多いことやブロック状の堆積が見られることから人為堆積と思われる。1層は，ローム粒子を中量含む灰褐色土。2層は，ローム粒子を多量とロームブロックを極少量含む黒褐色土。3層は，ローム粒子を極少量含む黒色土。4層は，ローム粒子を少量含む灰褐色土。5層は，ローム粒子を中量含む褐色土である。

**遺物** 覆土中から弥生式土器21片が出土している。1の甕の底部片は南コーナー壁際の覆土中層から，2と3の土器片は中央部の覆土中層から出土している。

**所見** 本跡は，遺構の形状や足洗1式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉の土壌墓と思われる。



第59図 第100号土壌墓実測図



第60図 第100号土壌墓出土遺物実測・拓影図

第100号土墳墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第60図 1	甕 弥生式土器	B (3.8) C [8.2]	底部・胴部片。平底。胴部は無節の縄文が施され、下位は無文部が残る。	長石、石英、スコリア 茶褐色 普通	P46, 5%

2 は反撚の縄文が、3 は0段撚の縄文が施されている。4 は単節の縄文が施された後に1本沈線による重三角文が描かれている。5 は壺の頸部片で、横方向の1本沈線が重層している。6 は蓋片で、1本沈線による重山形文が描かれている。

第106号土墳墓 (第61図)

位置 調査区の北部, D3g区。

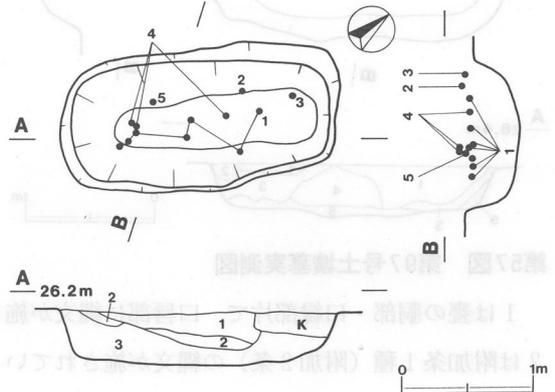
規模と形状 掘り方は長軸2.1m, 短軸1.1mの隅丸長方形で、深さ39cmである。底面は皿状で硬く締まっている。壁は緩やかに立ち上がっている。

長軸方向 N-33°-E

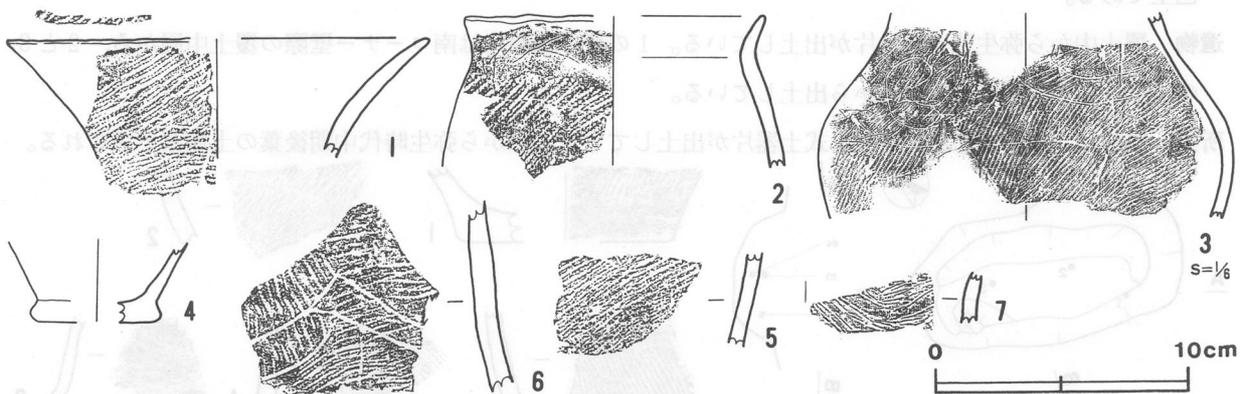
覆土 人為堆積と思われる。1層は、ローム粒子少量とロームブロックを極少量含む黒褐色土。2層は、ローム粒子を多量に含む暗褐色土。3層は、黒色粒子を多量に含む褐色土である。

遺物 覆土上層から弥生式土器45片が出土している。1の口縁部片は遺構全体の覆土上層から、2の甕片は中央付近の覆土上層から、3と4の壺片も覆土上層から出土しており、3は1の壺と同一個体の可能性がある。5の胴部片は南西部の覆土上層から出土している。

所見 本跡は、遺構の形状や足洗1式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉の土墳墓と思われる。また、土器片の全てが覆土上層からの出土であり、破碎されて遺構上にはばらまかれた可能性があり、何らかの祭祀行為があったものと思われる。



第61図 第106号土墳墓実測図



第62図 第106号土墳墓出土遺物実測・拓影図

第106号土墳墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第62図 1	壺 弥生式土器	A [16.4] B (4.8)	口縁部片。口唇部には縄文が施されている。口縁外面には附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	長石, スコリア 赤褐色 普通	P47, 5%
2	甕 弥生式土器	A [11.8] B (6.0)	胴部・口縁部片。胴部は内彎し, 口縁部は直線的に外傾して立ち上がる。口唇部には縄文が施されている。胴部は附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	白色鉱物, スコリア 茶褐色 普通	P48, 15%
3	壺 弥生式土器	B (29.3)	胴部片。胴部中位に最大径を持ち, 附加条1種(附加2条)の縄文を施した後に一本沈線の渦巻文が描かれている。	石英, 白色鉱物 褐色 普通	P49, 40%
4	壺 弥生式土器	B (3.3) C [5.2]	底部・胴部片。平底で, 底部と胴部の境は突出し, 胴部は内彎気味に外傾する。	白色鉱物 橙色 良好	P50, 10%

5は附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。6は附加条1種(附加2条)の縄文を施した後に1本沈線による連弧文が描かれている。7は壺の頸部片で, 沈線が重層している。

第107号土墳墓(第63図)

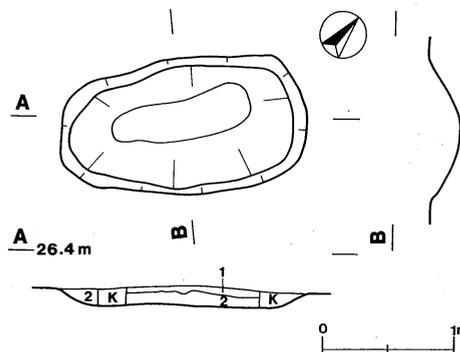
位置 調査区の北東部, B3i<sub>0</sub>区。

規模と形状 掘り方は長径2.0m, 短径1.1mの楕円形で, 深さ24cmである。底面は皿状をしており, 壁は緩やかに立ち上がっている。

長径方向 N-46°-E

覆土 人為堆積と思われる。1層は, ローム粒子を極少量含む黒色土。2層は, ローム粒子を少量含む暗褐色土である。

所見 遺物は出土していないが, 他の土墳墓と形状や覆土の状況が類似していることから, 本跡は弥生時代中期後葉の土墳墓と思われる。



第63図 第107号土墳墓実測図

第108号土墳墓(第64図)

位置 調査区の東部, C3a<sub>0</sub>区。

規模と形状 掘り方は長軸2.6m, 短軸1.1mの隅丸長方形で, 深さ34cmである。底面はほぼ平坦で, 壁は緩やかに立ち上がっている。また, 西壁下にピット1基が確認されている。ピット覆土と土壌覆土が同一のものであったことから, 土壌を掘った際に何らかの目的で, 同時に掘ったものと思われる。

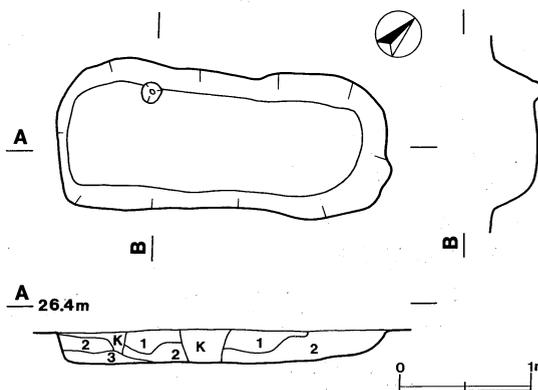
長軸方向 N-49°-E

覆土 ロームの含有が多いことから人為堆積と思われる。

1層は, ロームブロック中量とローム粒子少量含む黒色土。2層は, ローム粒子を中量含む暗褐色土。3層は, 黒色粒子を多量に含む明褐色土である。

遺物 覆土中から弥生式土器1片が出土している。

所見 本跡は, 遺構の形状や出土土器片から弥生時代中期後葉の土墳墓と思われる。



第64図 第108号土墳墓実測図

第109号土墳墓 (第65図)

位置 調査区の東部, C4b<sub>1</sub>区。

規模と形状 掘り方は長軸2.4m, 短軸1.4mの隅丸長方形で, 深さ32cmである。底面はほぼ平坦で, 壁は緩やかに立ち上がっている。

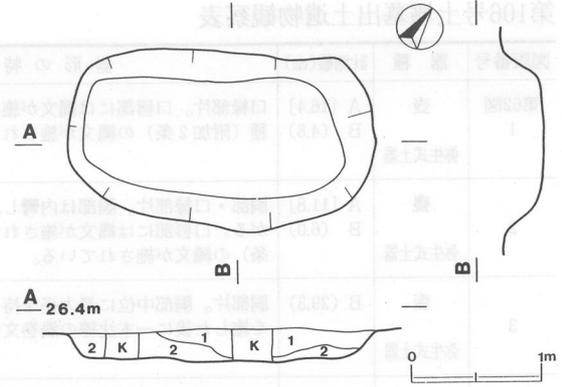
長軸方向 N-56°-E

覆土 人為堆積と思われる。1層は, ローム粒子を少量含む黒褐色土。2層は, ローム粒子多量とロームブロック中量含む暗褐色土である。

遺物 覆土中から弥生式土器2片が出土している。

第65図 第109号土墳墓実測図

所見 本跡は, 遺構の形状や出土土器片から弥生時代中期後葉の土墳墓と思われる。



3 土器棺墓

本調査区の中央部西寄りで, 土器棺墓2基 (SK94・117) を確認した。以下, その特徴と出土遺物について記載する。

第94号土墳 (第66図)

位置 調査区の中央部西寄り, C3d<sub>4</sub>区。

規模と形状 長径0.7m, 短径0.5mの不整楕円形で, 深さ13cmである。底面は皿状をしており, 壁は緩やかに立ち上がっている。

長径方向 N-33°-E

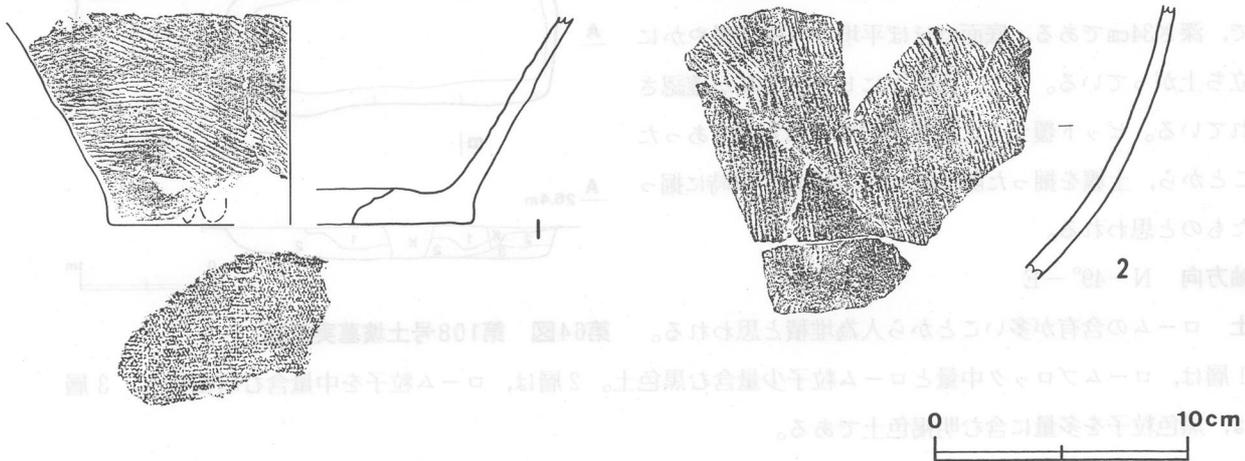
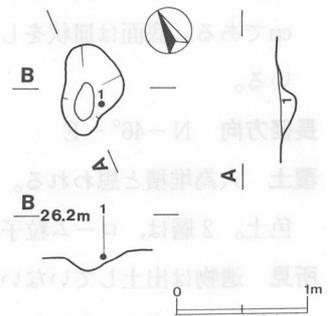
覆土 ローム粒子を極少量含む黒色土の単層である。

遺物 覆土下層から弥生式土器19片が出土している。1の甕の底部片は斜位状態で, 底面から出土している。

所見 1の足洗2式土器の甕片は, 底部が外面から内面に向かって焼成後に穿孔されており, 土器棺として転用されているものと思われる。このことから, 本跡は弥生時代中期後葉の土

器棺墓と思われる。

第66図 第94号土墳実測図



第67図 第94号土墳出土遺物実測・拓影図

第94号土壌出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第67図 1	甕 弥生式土器	B (8.1) C [14.2]	底部～胴部片。平底で、平織布痕が見られ、焼成後に外面から穿孔されている。胴部は直線的に外傾している。胴部は無節の縄文が施されており、下位は若干の無文部が残る。	石英、白色鉱物 乳白色 良好	P44, 40%

2は無節の縄文が施されている。

第117号土壌 (第68図)

位置 調査区の中央部西寄り, C3d<sub>3</sub>区。

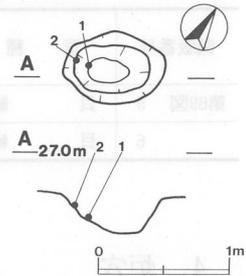
規模と形状 長径0.8m, 短径0.6mの楕円形で、深さ30cmである。底面は皿状をしており、壁は緩やかに立ち上がっている。

長径方向 N-57°-E

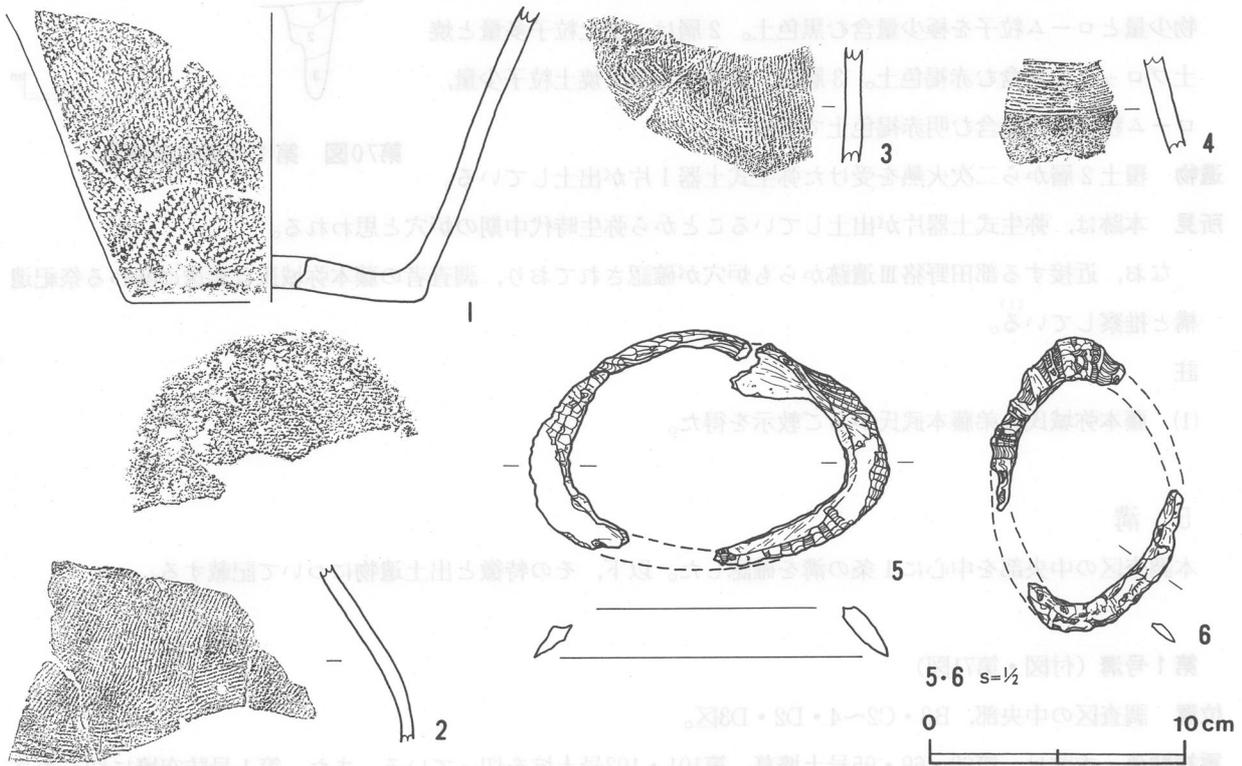
覆土 ローム粒子を少量含む黒褐色土の単層である。

遺物 覆土中や底面から弥生式土器27片と剥片(長石)が出土している。1の甕の底部片は斜位の状態で、底面から出土している。また、甕の覆土内から未製品の貝輪2点(オオツタノハ製・サルボウガイ製)と骨片が出土している。

所見 1の足洗2式土器の甕片は、焼成後に底部が穿孔されており、土器棺として転用されている。このことから、本跡は弥生時代中期後葉の土器棺墓である。また、本跡に並んで、勾玉を出土した第88号土壌墓が確認されている。この配列は、福島県楡葉町楡葉天神原遺跡<sup>(1)</sup>での土壌墓と土器棺墓のそれに類似しており、遺物ばかりでなく遺構配列の上でも興味深いものである。



第68図 第117号土壌実測図



第69図 第117号土壌出土遺物実測・拓影図

註

(1) 馬目順一 『楯葉天神原遺蹟の研究』 1972年3月

第117号土壌出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第69図 1	甕 弥生式土器	B (11.5) C [6.0]	底部・胴部片。平底で、平織布痕が見られ、焼成後に穿孔されている。胴部は直線的に外傾する。胴部外面には単節の縄文が施され、下位は無文部が残る。内面は剥離が激しい。	針状鉱物、石英、長石 黄橙色 普通	P 51, 20%

2と3は0段撚の縄文が施されている。4は平行沈線が重層している。

図版番号	器種	計測値				種類	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第69図 5	貝輪	[9.3]	[6.3]	1.3	(14.4)	サルボウガイ	土器内覆土	N 2, 未製品
6	貝輪	[7.8]	[5.0]	0.6	(3.1)	オオツタノハ	土器内覆土	N 1, 未製品

4 炉穴

本調査区の北西部で1基のみを確認した。以下、その特徴と出土遺物について記載する。

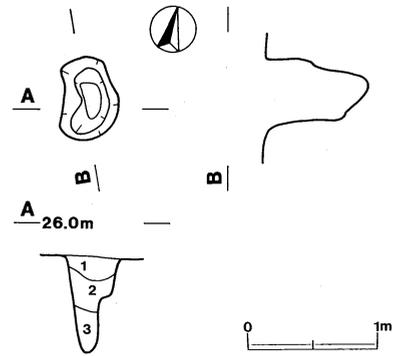
第1号炉穴(第70図)

位置 調査区の北西部, B2i<sub>0</sub>区。

規模と形状 掘り方は長径0.6m, 短径0.4mの不整楕円形で、深さ80cmである。底面は皿状をしており、壁は垂直に立ち上がっている。

長径方向 N-23°-W

覆土 レンズ状の堆積をしており、自然堆積と思われる。1層は、炭化物少量とローム粒子を極少量含む黒色土。2層は、焼土粒子多量と焼土ブロック中量含む赤褐色土。3層は、灰粒子多量と焼土粒子少量、ローム粒子極少量含む明赤褐色土である。



第70図 第1号炉穴実測図

遺物 覆土2層から二次火熱を受けた弥生式土器1片が出土している。

所見 本跡は、弥生式土器片が出土していることから弥生時代中期の炉穴と思われる。

なお、近接する部田野猪Ⅲ遺跡からも炉穴が確認されており、調査者の藤本弥城氏は葬送に関わる祭祀遺構と推察している<sup>(1)</sup>。

註

(1) 藤本弥城氏の弟藤本武氏からご教示を得た。

5 溝

本調査区の中央部を中心に1条の溝を確認した。以下、その特徴と出土遺物について記載する。

第1号溝(付図・第71図)

位置 調査区の中央部, B3・C2~4・D2・D3区。

重複関係 本跡は、第68・69・95号土壌墓, 第101・103号土坑を切っている。また、第1号防空壕に切られている。

**規模と形状** 南東部は調査区外に延びているため、全容は不明であるが、確認した部分の規模は上幅0.3~1.0 m、下幅0.1~0.6m、深さ20~60cm、全長(145) mで、平面形は「コ」の字状をしている。断面形は西側で「U」状を、他のか所では「V」状をしており、底面は皿状や平坦である。

**方向** 調査区外から北西方向(N-28°-W)に63m程直線的に延び、C2h<sub>2</sub>区ではほぼ垂直に曲がり、北東方向(N-70°-E)に44m程直線的に延び、B3i<sub>8</sub>区でさらに垂直に曲がり、南東方向(N-160°-E)に38m程直線的に延びて調査区外に至る。

**覆土** レンズ状の堆積をしており、自然堆積である。B土層の1層は、ローム粒子と炭化粒子少量と炭化物極少量含む褐色土。2層は、黒色粒子少量と炭化物極少量含む褐色土である。A土層の1層は、ローム粒子極少量含む黒褐色土。2層は、ローム粒子少量とロームブロック極少量含む黒褐色土。3層は、黒色粒子を多量に含む褐色土。4層は、ローム粒子を中量含む黒褐色土。5層は、ローム粒子を多量に含む暗褐色土である。

**遺物** 覆土中・上層を中心に縄文式土器片(田戸下層式土器)や弥生式土器片(猪式土器や足洗式土器)、凹石等が出土している。これらの多くは、摩滅が見られることから流れ込みと思われる。

**所見** 本跡は、重複関係から弥生時代中期後葉から昭和初期の間に掘られたものと思われるが、性格は不明である。

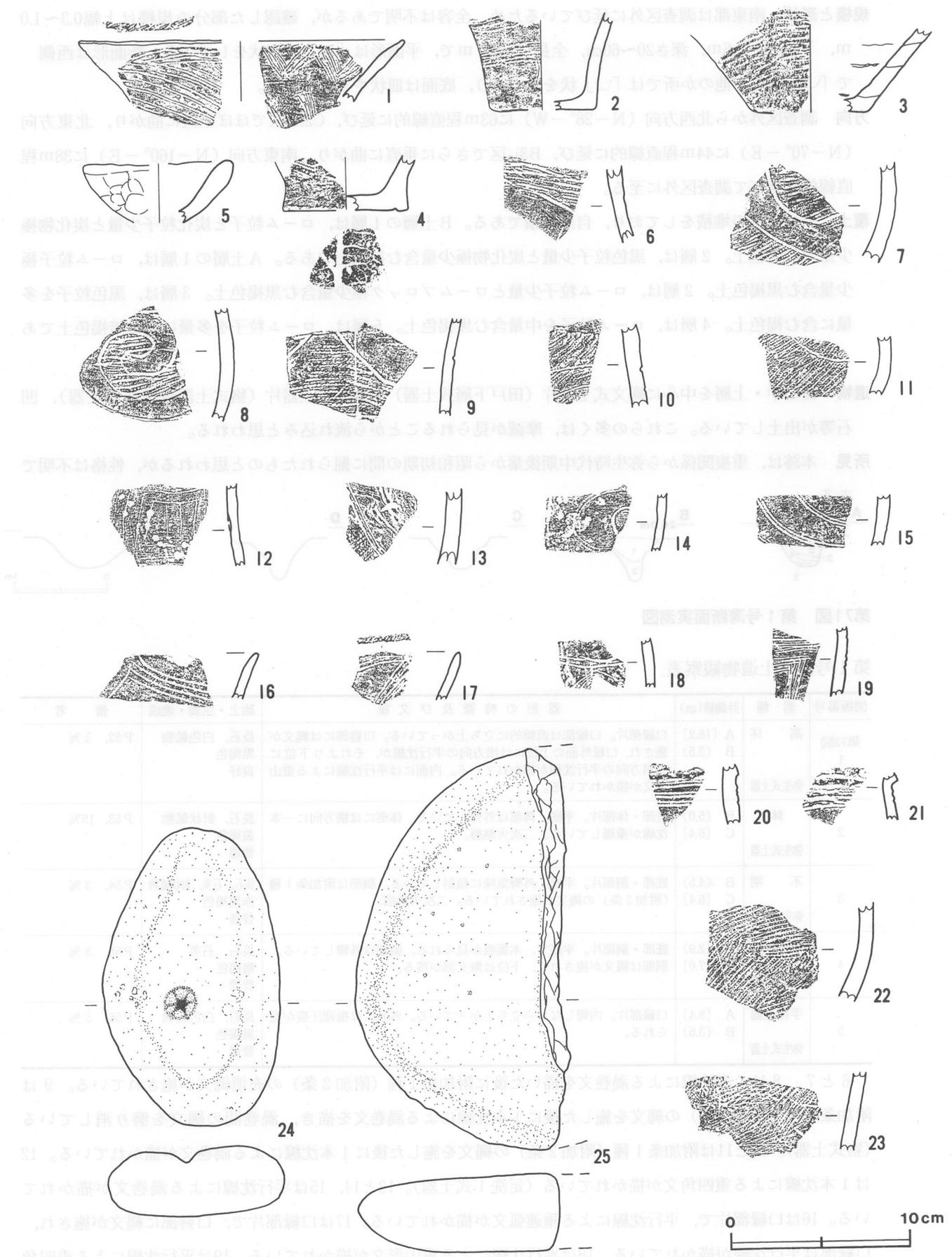


第71図 第1号溝断面実測図

第1号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第72図 1	高 坏 弥生式土器	A [18.2] B (3.5)	口縁部片。口縁部は直線的に立ち上がっている。口唇部には縄文が施され、口縁外面の上位には横方向の平行沈線が、それより下位には斜方向の平行沈線が描かれている。内面には平行沈線による重山形文が描かれている。	長石、白色鉾物 黒褐色 良好	P52, 5%
2	鉢 弥生式土器	B (5.0) C [6.4]	底部・体部片。平底。体部は外彎している。体部には横方向に一本沈線が重層している。二次火熱痕。	長石、針状鉾物 黄褐色 普通	P53, 15%
3	不 明 弥生式土器	B (4.5) C [6.4]	底部・胴部片。平底。外彎気味に傾斜している。胴部は附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。二次火熱痕。	長石、石英、針状鉾物 赤黒褐色 普通	P54, 3%
4	壺 弥生式土器	B (2.9) C [7.0]	底部・胴部片。平底で、木葉痕が見られる。胴部は外彎している。胴部は縄文が施されて、下位は無文部が残る。	長石、石英 暗褐色 普通	P55, 3%
5	手捏土器 弥生式土器	A [8.4] B (3.5)	口縁部片。内彎しながら立ち上がっている。外面には指頭圧痕が見られる。	長石、白色鉾物 黒褐色 普通	P56, 5%

6と7, 8は1本沈線による渦巻文を描いた後に附加条1種(附加2条)の充填縄文が施されている。9は附加条1種(附加2条)の縄文を施した後に1本沈線による渦巻文を描き、渦巻間の縄文を磨り消している(猪式土器)。10と11は附加条1種(附加2条)の縄文を施した後に1本沈線による渦巻文が描かれている。12は1本沈線による重四角文が描かれている(足洗1式土器)。13と14, 15は平行沈線による渦巻文が描かれている。16は口縁部片で、平行沈線による重連弧文が描かれている。17は口縁部片で、口唇部に縄文が施され、口縁部は平行沈線が描かれている。18は平行沈線による重山形文が描かれている。19は平行沈線による重四角文が描かれている。20と21は頸部片で、横方向の平行沈線が重層し、その上に断面「三角形」の帯が巡っている。



第72図 第1号溝出土遺物実測・拓影図

る（足洗2式土器）。22と23は胴部片で、附加条1種（附加2条）の縄文が施されている。

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第72図 24	凹石	17.0	9.7	4.0	952.7	砂岩	覆土	Q9
25	石皿	22.8	(11.4)	4.5	(1689.0)	砂岩	覆土	Q10

## 6 土坑

本調査区のI区を中心に確認した。以下、時期のわかる土坑を中心にその特徴と出土遺物について記載する。

### 第2号土坑（第73図）

**位置** 調査区の西部，C2j<sub>8</sub>区。

**規模と形状** 掘り方は長径2.0m，短径1.1mの楕円形で，深さ20cmである。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

**長径方向** N-35°-E

**覆土** 人為堆積と思われる。1層は，含有物のない黒褐色土。2層は，ローム粒子中量と黒色ブロック・スコリア粒子を極少量含む褐色土。3層は，ローム粒子を少量含む褐色土である。

**遺物** 覆土中から弥生式土器1片が出土している。

**所見** 本跡は，遺構の形状や覆土の堆積状況から弥生時代の土壌墓の可能性はあるが，遺物の出土量が少なく時期や性格など確認できない。

1は壺の頸部片で，横方向の平行沈線が施されている。

### 第3号土坑（第75図）

**位置** 調査区の西部，C2j<sub>8</sub>区。

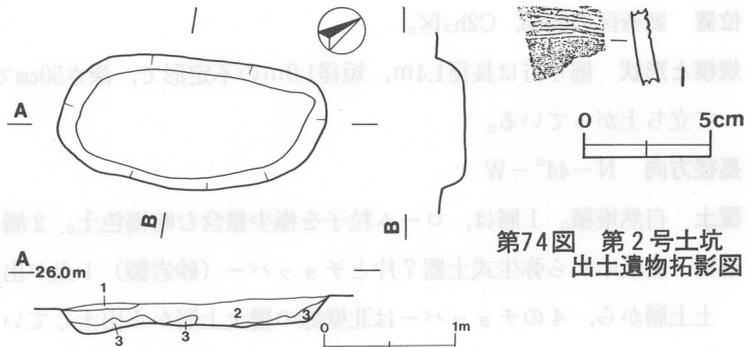
**規模と形状** 掘り方は直径1.1mの円形で，深さ20cmである。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。中央部付近に本跡に伴う小ピットが確認されている。

**長径方向** N-44°-E

**覆土** 自然堆積。1層は，ローム粒子少量とロームブロック極少量含む灰褐色土。2層は，黒色ブロックを中量とロームブロック少量を含む褐色土である。

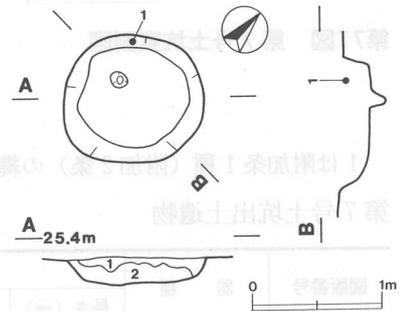
**遺物** 覆土中から縄文式土器4片が出土している。1の胴部片は，北西壁際の覆土上層から出土している。

**所見** 本跡は，田戸下層式土器片が出土していることから縄文時代早期のものと思われる。

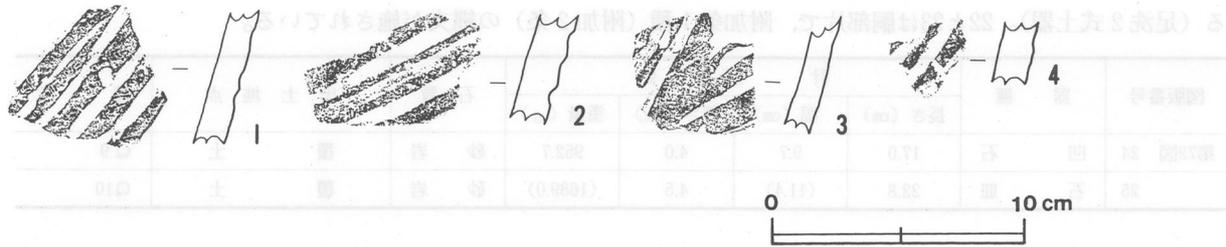


第74図 第2号土坑出土遺物拓影図

第73図 第2号土坑実測図



第75図 第3号土坑実測図



第76図 第3号土坑出土遺物拓影図

1～4は尖底深鉢片で、斜方向の沈線が施されている。

第7号土坑 (第77図)

位置 調査区の西部, C2h<sub>3</sub>区。

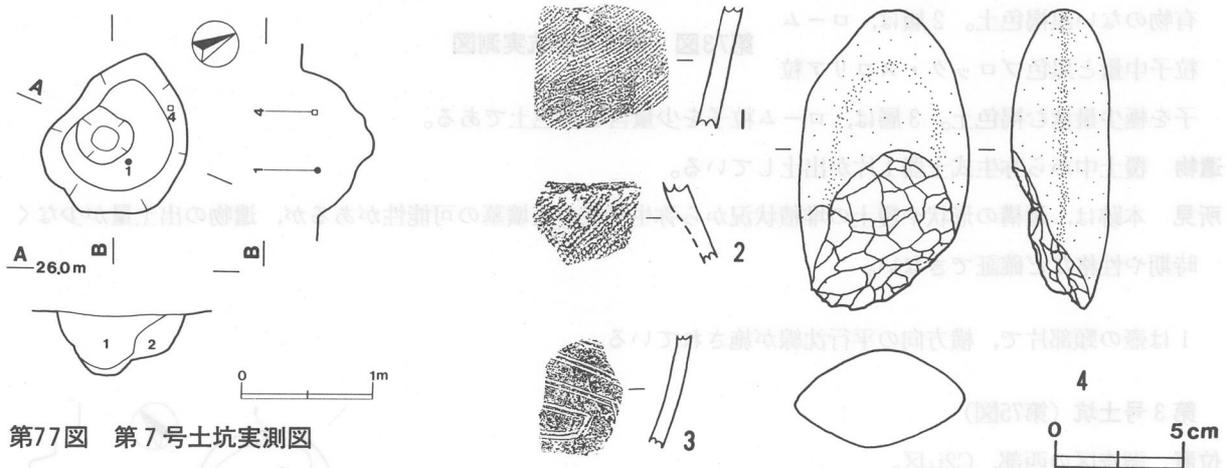
規模と形状 掘り方は長径1.4m, 短径1.0mの不定形で、深さ50cmである。底面は凹凸が見られ、壁は外傾して立ち上がっている。

長径方向 N-44°-W

覆土 自然堆積。1層は、ローム粒子を極少量含む暗褐色土。2層は、黒色粒子を極少量含む明褐色土である。

遺物 覆土中から弥生式土器7片とチョッパー(砂岩製)1点が出土している。1の胴部片は、中央付近の覆土上層から、4のチョッパーは北壁際の覆土上層から出土している。

所見 本跡は、足洗2式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉のものと思われる。



第77図 第7号土坑実測図

第78図 第7号土坑出土遺物実測・拓影図

1は附加条1種(附加2条)の縄文が、2は単節の縄文が、3は平行沈線文が施されている。

第7号土坑出土遺物

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第78図 4	チョッパー	11.9	6.7	4.0	345.2	砂岩	覆土	Q1

第8号土坑 (第79図)

位置 調査区の西部, C2h<sub>2</sub>区。

規模と形状 掘り方は長径1.3m, 短径1.1mの卵形で、深さ25cmである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

長径方向 N-55°-W

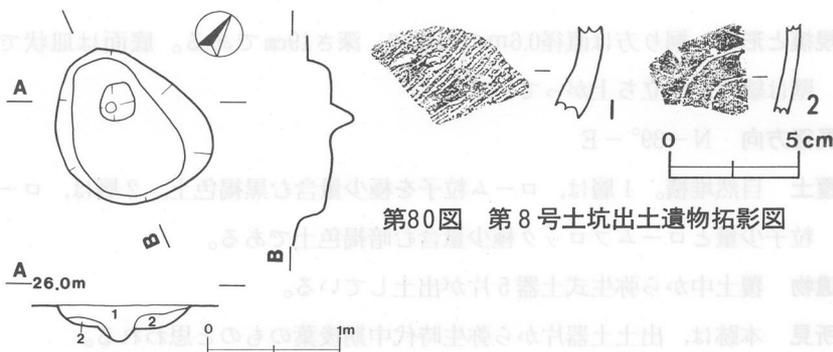
覆土 自然堆積。1層は、ローム粒子を極少量含む暗褐色土。  
2層は、黒色粒子を中量含む褐色土である。

遺物 覆土下層から弥生式土器  
4片が出土している。

所見 本跡は、足洗1式土器片 第79図 第8号土坑実測図

が出土していることから弥生時代中期後葉のものと思われる。

1は附加条1種(附加2条)の縄文が、2は1本沈線による渦巻文が施されている。



第80図 第8号土坑出土遺物拓影図

### 第16号土坑 (第81図)

位置 調査区の西部, C2h<sub>5</sub>区。

重複関係 本跡は、第1号住居跡を切っている。

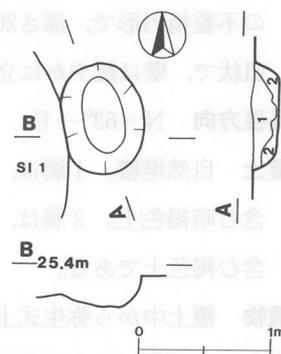
規模と形状 掘り方は長径0.9m, 短径0.6mの楕円形で、深さ20cmである。底面は皿状で、壁は垂直に立ち上がっている。

長径方向 N-10°-W

覆土 自然堆積。1層は、ローム粒子を極少量含む黒褐色土。2層は黒色粒子を極少量含む褐色土である。

遺物 覆土中から弥生式土器4片が出土している。

所見 本跡は、足洗式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉のものと思われる。



第81図 第16号土坑実測図

### 第19号土坑 (第82図)

位置 調査区の北西部, B2j<sub>7</sub>区。

規模と形状 掘り方は長径1.5m, 短径0.9mの楕円形で、深さ13cmである。底面は凹凸が見られ、壁は緩やかに立ち上がっている。北西壁下に直径0.2mの円形ピットが確認されている。

長径方向 N-37°-W

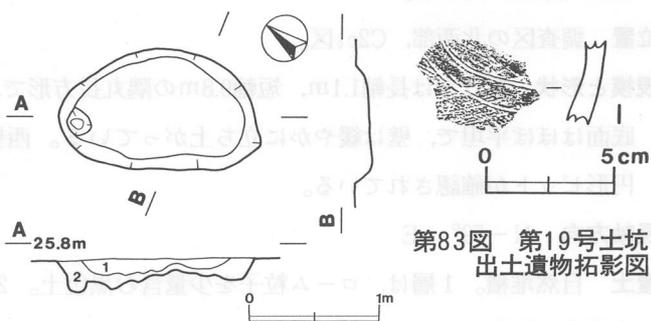
覆土 自然堆積。1層は、ローム粒子中量と炭化物極少量含む極暗褐色土。2層は、黒色粒子中量と炭化粒子極少量含む褐色土である。

遺物 覆土中から弥生式土器4片と土師器1片が出土している。1の胴部片は、中央部の覆土下層から出土している。

所見 本跡は、足洗式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉のものと思われる。

1は単節縄文を施した後に、1本沈線による渦巻文が施されている。

第82図 第19号土坑実測図



第83図 第19号土坑出土遺物拓影図

### 第20号土坑 (第84図)

位置 調査区の北西部, B2j<sub>8</sub>区。

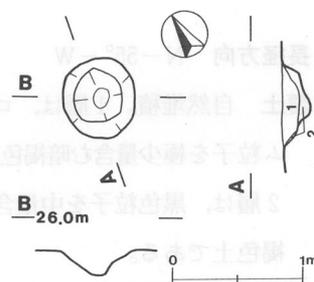
**規模と形状** 掘り方は直径0.6mの円形で、深さ19cmである。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

**長径方向** N-39°-E

**覆土** 自然堆積。1層は、ローム粒子を極少量含む黒褐色土。2層は、ローム粒子少量とロームブロック極少量含む暗褐色土である。

**遺物** 覆土中から弥生式土器5片が出土している。

**所見** 本跡は、出土土器片から弥生時代中期後葉のものと思われる。



第84図 第20号土坑実測図

### 第23号土坑 (第85図)

**位置** 調査区の北西部, B2j<sub>8</sub>区。

**規模と形状** 掘り方は長径0.9m, 短径0.8mの不整楕円形で、深さ20cmである。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

**長径方向** N-63°-E

**覆土** 自然堆積。1層は、ローム粒子を中量含む暗褐色土。2層は、黒色粒子を多量に含む褐色土である。

**遺物** 覆土中から弥生式土器5片が出土している。1の胴部片は、覆土下層から出土している。

**所見** 本跡は、出土土器片から弥生時代中期後葉のものと思われる。

1は附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。

### 第36号土坑 (第87図)

**位置** 調査区の北西部, C2c<sub>0</sub>区。

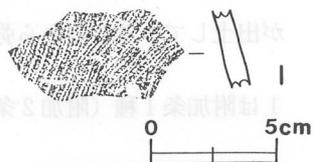
**規模と形状** 掘り方は長軸1.1m, 短軸0.8mの隅丸長方形で、深さ11cmである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっている。西壁下に直径0.5mの円形ピットが確認されている。

**長軸方向** N-59°-E

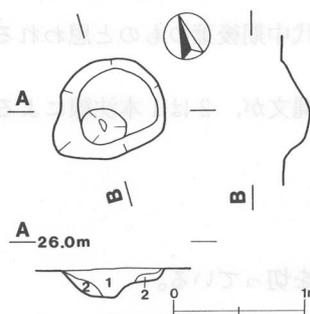
**覆土** 自然堆積。1層は、ローム粒子を少量含む黒色土。2層は、黒色粒子を少量含む褐色土である。

**遺物** 覆土中から弥生式土器8片と礫片(砂岩)が出土している。

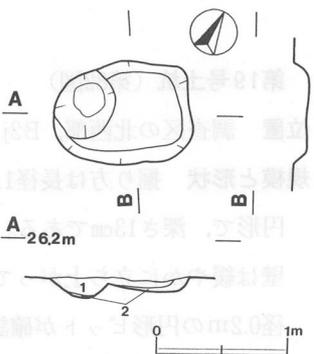
**所見** 本跡は、出土土器片から弥生時代中期後葉のものと思われる。



第86図 第23号土坑出土遺物拓影図



第85図 第23号土坑実測図



第87図 第36号土坑実測図

### 第38号土坑 (第88図)

**位置** 調査区の北西部, C3b<sub>1</sub>区。

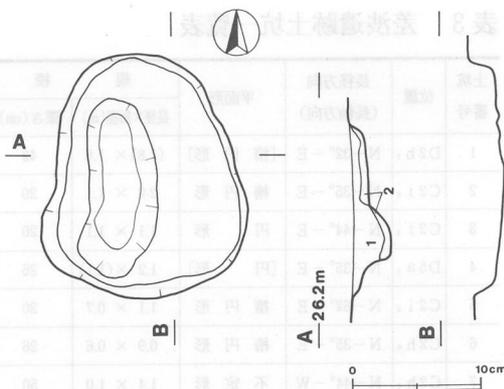
**規模と形状** 掘り方は長径1.9m, 短径1.4mの卵形で、深さ28cmである。底面はやや凹凸が見られ、壁は外傾して立ち上がっている。西部寄りに二段掘り込みが見られる。

**長径方向** N-0°

**覆土** 自然堆積。1層は、ローム粒子を少量含む黒褐色土。2層は、黒色粒子を多量に含む褐色土である。

遺物 覆土下層から弥生式土器5片が出土している。

所見 本跡は、出土土器片から弥生時代中期後葉のものと思われる。



第57号土坑 (第89図)

第88図 第38号土坑実測図

位置 調査区の北西部, B3g1区。

重複関係 本跡は、第56号土坑と第58号土坑を切っている。

また、第54号土坑との新旧関係は不明である。

規模と形状 掘り方は長径[2.1]m, 短径1.5mの不整楕円形になると思われる。深さは23cmである。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

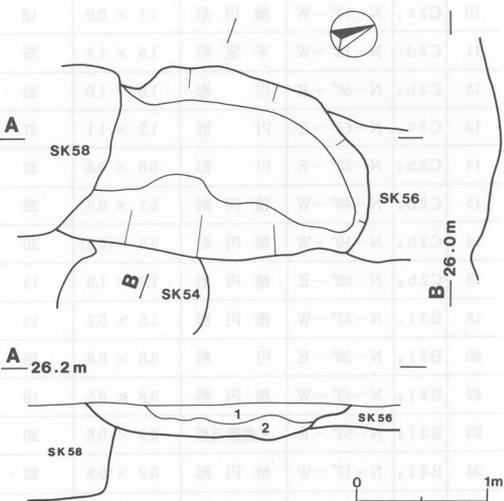
長径方向 N-35°-E

覆土 自然堆積。1層は、ローム粒子を極少量含む黒色土。

2層は、ローム粒子を極少量含む灰褐色土である。

遺物 覆土中から弥生式土器43片が出土している。1の甕の口縁部片と2の壺の頸部片は、覆土下層から出土している。

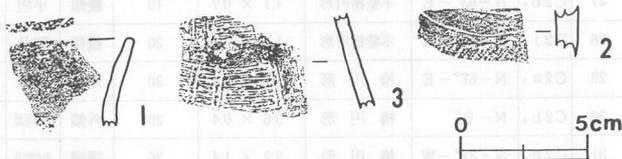
所見 本跡は、足洗2式土器片が出土していることから弥生時代中期後葉のものと思われる。



第89図 第57号土坑実測図

1は甕の口縁部片で、口唇部に縄文が施されている。2は1本沈線による渦巻文が描かれている。3

は平行沈線による格子目文が施されている。



第90図 第57号土坑出土遺物拓影図

第104号土坑 (第91図)

位置 調査区の西部, D3b1区。

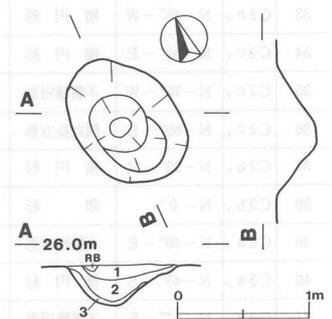
規模と形状 掘り方は長径1.1m, 短径0.8mの楕円形で、深さ30cmである。底面は皿状で、壁は緩やかに立ち上がっている。

長径方向 N-22°-W

覆土 ロームの含有が多いことから人為堆積と思われる。1層は、ローム粒子とロームブロックを少量含む黒褐色土。2層は、ローム粒子中量とロームブロックを少量含む暗褐色土。3層は、黒色粒子を中量含む明褐色土である。

遺物 覆土中から弥生式土器16片が出土している。

所見 本跡は、出土土器片から弥生時代中期後葉のものと思われる。



第91図 第104号土坑実測図

表3 差波遺跡土坑一覽表

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 新旧関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	D2b <sub>7</sub>	N-32°-E	[楕円形]	(1.8)×1.6	42	外傾	やや凹凸	自然	弥生式土器3片	
2	C2j <sub>8</sub>	N-35°-E	楕円形	2.0×1.1	20	外傾	平坦	人為	弥生式土器1片	
3	C2j <sub>8</sub>	N-44°-E	円形	1.1×1.1	20	外傾	平坦	自然	縄文式土器4片	縄文時代早期
4	D5a <sub>8</sub>	N-35°-E	[円形]	1.2×(1.1)	26	外傾	ほぼ平	自然		
5	C2i <sub>8</sub>	N-62°-E	楕円形	1.1×0.7	20	外傾	ほぼ平	人為	弥生式土器2片	
6	C2h <sub>8</sub>	N-35°-E	楕円形	0.9×0.6	26	外傾	ほぼ平	自然	礫片	
7	C2h <sub>8</sub>	N-44°-W	不定形	1.4×1.0	50	外傾	凹凸	自然	弥生式土器7片, チョッパー(砂岩)	弥生時代中期
8	C2h <sub>2</sub>	N-55°-W	卵形	1.3×1.1	25	外傾	ほぼ平	自然	弥生式土器4片	弥生時代中期
9	C2f <sub>2</sub>	N-90°-E	楕円形	0.9×0.8	36	緩傾	やや凹凸	自然		
10	C2e <sub>1</sub>	N-13°-W	楕円形	1.1×0.9	18	垂直	平坦	自然		
11	C2d <sub>1</sub>	N-15°-W	不定形	1.5×1.4	25	外傾	ほぼ平	自然		
12	C2b <sub>8</sub>	N-56°-E	円形	1.0×1.0	33	外傾	平坦	自然	弥生式土器1片	
13	C2c <sub>8</sub>	N-61°-E	円形	1.2×1.1	37	外傾	皿状	自然	弥生式土器2片, 須恵器1片	
14	C2b <sub>8</sub>	N-52°-E	円形	0.8×0.8	32	外傾	平坦	自然	弥生式土器2片	
15	C2b <sub>4</sub>	N-49°-W	楕円形	0.7×0.6	22	外傾	平坦	自然		
16	C2h <sub>8</sub>	N-10°-W	楕円形	0.9×[0.6]	20	垂直	皿状	自然	弥生式土器4片	弥生時代中期, S11→本跡
18	C2b <sub>8</sub>	N-58°-E	楕円形	1.3×1.0	15	外傾	ほぼ平	自然		
19	B2j <sub>7</sub>	N-37°-W	楕円形	1.5×0.9	13	緩傾	凹凸	自然	弥生式土器4片, 土師器1片	弥生時代中期
20	B2j <sub>8</sub>	N-39°-E	円形	0.6×0.6	19	緩傾	皿状	自然	弥生式土器5片, 須恵器1片	弥生時代中期
22	B2j <sub>8</sub>	N-43°-W	楕円形	0.8×0.5	18	外傾	凹凸	自然	弥生式土器1片	
23	B2j <sub>8</sub>	N-63°-E	不整楕円形	0.9×0.8	20	緩傾	皿状	自然	弥生式土器5片	弥生時代中期
24	B2j <sub>8</sub>	N-17°-W	楕円形	0.9×0.8	22	緩傾	皿状	自然	弥生式土器1片	
25	B2j <sub>8</sub>	N-40°-W	楕円形	0.9×0.7	18	外傾	凹凸	自然	弥生式土器2片	
26	C2a <sub>9</sub>	N-23°-W	不整楕円形	1.1×0.9	27	外傾	傾斜	自然	弥生式土器3片	
27	C2b <sub>7</sub>	N-63°-E	不整楕円形	1.1×0.7	19	緩傾	平坦	自然		
28	B2j <sub>8</sub>	N-55°-E	不整楕円形	1.3×0.9	20	緩傾	凹凸	自然	弥生式土器1片	
29	C2a <sub>9</sub>	N-67°-E	楕円形	0.5×0.4	20	外傾	平坦	自然	弥生式土器2片	
30	C2b <sub>8</sub>	N-0°	楕円形	0.6×0.4	20	外傾	ほぼ平	自然		
31	C2e <sub>9</sub>	N-32°-W	楕円形	3.2×1.4	26	緩傾	やや凹凸	自然		
32	C2e <sub>9</sub>	N-47°-W	楕円形	1.7×1.1	12	外傾	ほぼ平	自然		
33	C2e <sub>9</sub>	N-45°-W	楕円形	0.6×0.5	26	緩傾	皿状	自然		
34	C2c <sub>9</sub>	N-52°-E	楕円形	1.0×0.8	20	緩傾	皿状	自然	弥生式土器1片	
35	C2c <sub>9</sub>	N-78°-W	不整楕円形	0.9×0.8	14	緩傾	皿状	自然	弥生式土器1片	
36	C2c <sub>9</sub>	N-59°-E	隅丸長方形	1.1×0.8	11	緩傾	ほぼ平	自然	弥生式土器8片, 礫片	弥生時代中期
37	C2b <sub>9</sub>	N-22°-E	楕円形	1.3×1.1	25	外傾	凹凸	自然		
38	C3b <sub>1</sub>	N-0°	卵形	1.9×1.4	28	外傾	やや凹凸	自然	弥生式土器5片	弥生時代中期
39	C3a <sub>1</sub>	N-46°-E	不整楕円形	1.8×0.7	37	外傾	やや凹凸	人為	弥生式土器11片	弥生時代中期の土壌墓
40	C3a <sub>1</sub>	N-43°-E	楕円形	2.0×1.1	32	緩傾	平坦	人為	弥生式土器35片, 礫片	弥生時代中期の土壌墓, SK45新旧不明
41	C3a <sub>2</sub>	N-57°-E	不整楕円形	2.4×1.0	37	緩傾	皿状	人為	弥生式土器34片, 礫片	弥生時代中期の土壌墓
42	B3j <sub>2</sub>	N-47°-E	隅丸長方形	(2.1)×1.1	39	緩傾	ほぼ平	人為	弥生式土器61片, 管玉1点	弥生時代中期の土壌墓, SK62新旧不明
43	B2j <sub>9</sub>	N-39°-E	隅丸長方形	2.5×1.6	55	垂直	平坦	人為	弥生式土器44片, 剥片	弥生時代中期の土壌墓
44	B2j <sub>9</sub>	N-40°-E	隅丸長方形	2.2×1.0	50	外傾	やや凹凸	人為	弥生式土器147片, 礫片	弥生時代中期の土壌墓, 本跡→SK63
45	B3j <sub>1</sub>	N-57°-E	楕円形	(1.2)×0.9	19	緩傾	ほぼ平	人為	弥生式土器1片	
46	B3j <sub>1</sub>	N-80°-W	楕円形	0.8×0.6	16	緩傾	凹凸	-	弥生式土器1片	
47A	B3j <sub>1</sub>	N-35°-E	隅丸長方形	2.6×1.1	52	外傾	ほぼ平	人為	弥生式土器180片, 礫片	弥生時代中期の土壌墓

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
47B	B3j <sub>1</sub>	N-35°-E	隅丸長方形	1.4 × 0.8	17	緩傾	平坦	人為	弥生式土器21片	弥生時代中期の土壌墓
48	B3i <sub>1</sub>	N-36°-E	楕円形	2.3 × 1.2	37	緩傾	皿状	人為	弥生式土器11片	弥生時代中期の土壌墓
49	B2h <sub>1</sub>	N-0°	円形	0.6 × 0.6	19	外傾	傾斜	-		
50	B3h <sub>1</sub>	N-58°-W	楕円形	0.7 × 0.6	18	緩傾	皿状	自然	弥生式土器1片	
51	B3h <sub>2</sub>	N-54°-E	楕円形	2.1 × 0.8	41	垂直	ほぼ平	人為	弥生式土器16片	弥生時代中期の土壌墓
52	C4g <sub>1</sub>	N-0°	楕円形	0.8 × 0.7	16	緩傾	皿状	自然		
53	B3g <sub>2</sub>	N-45°-E	[楕円形]	1.1 × (0.8)	37	外傾	やや凸	人為	弥生式土器20片, 礫片	弥生時代中期の土壌墓
54	B3h <sub>1</sub>	N-32°-E	[円形]	1.1 × (1.0)	10	緩傾	皿状	人為	弥生式土器5片, 縄文式土器1片	SK57・58新旧不明
55	B3g <sub>1</sub>	N-0°	円形	0.6 × 0.6	20	緩傾	皿状	-		
56	B3g <sub>1</sub>	N-13°-W	不定形	1.5 × (0.9)	14	緩傾	ほぼ平	人為		本跡→SK57
57	B3g <sub>1</sub>	N-35°-E	[不整楕円形]	[2.1] × 1.5	23	緩傾	皿状	自然	弥生式土器43片	弥生時代中期, SK56・58→本跡
58	B3h <sub>1</sub>	N-43°-E	[隅丸長方形]	(2.7) × 1.4	62	外傾	やや凸	人為	弥生式土器62片, 剥片	弥生時代中期の土壌墓, 本跡→SK57
59	B3g <sub>1</sub>	N-45°-E	不整楕円形	2.6 × 1.6	60	緩傾	やや凸	人為	弥生式土器109片, 礫	弥生時代中期の土壌墓
60	B2g <sub>1</sub>	-	-	(0.7) × (0.5)	43	緩傾	皿状	自然	弥生式土器3片	
61	B2g <sub>1</sub>	N-47°-W	[楕円形]	(0.9) × 0.8	32	緩傾	皿状	自然		
62	B3j <sub>2</sub>	N-18°-W	[不整楕円形]	(1.8) × 1.0	25	緩傾	凹凸	-	弥生式土器3片	SK42新旧不明
63	C2a <sub>1</sub>	N-59°-E	[楕円形]	(1.4) × (1.0)	30	緩傾	凹凸	-		SK44→本跡
64	C2h <sub>1</sub>	N-90°-E	楕円形	1.0 × 0.8	20	緩傾	皿状	自然	弥生式土器1片	
65	C4g <sub>2</sub>	N-10°-E	楕円形	1.0 × 0.6	11	緩傾	平坦	人為		
66	C4g <sub>1</sub>	N-35°-E	隅丸長方形	1.4 × 0.8	21	緩傾	皿状	自然	弥生式土器3片	
67	C4f <sub>1</sub>	N-61°-W	不整楕円形	0.8 × 0.6	18	緩傾	凹凸	人為		
68	C4e <sub>1</sub>	N-67°-E	[隅丸長方形]	(2.0) × 1.3	37	緩傾	やや凸	人為	弥生式土器19片	弥生時代中期の土壌墓, 本跡→SD1
69	C4e <sub>1</sub>	N-80°-E	[隅丸長方形]	(1.8) × 1.1	26	緩傾	ほぼ平	人為	弥生式土器5片	弥生時代中期の土壌墓, 本跡→SD1
70	C4f <sub>1</sub>	N-32°-W	楕円形	0.9 × 0.8	20	緩傾	ほぼ平	自然	弥生式土器2片	
71	C3f <sub>1</sub>	N-65°-W	楕円形	1.0 × 0.9	15	緩傾	凹凸	人為		
72	C4g <sub>1</sub>	N-35°-W	楕円形	0.9 × 0.6	25	緩傾	皿状	自然		
73	C4h <sub>1</sub>	N-31°-E	卵形	0.9 × 0.8	28	緩傾	凹凸	自然		
74	C3h <sub>1</sub>	N-61°-E	卵形	1.1 × 0.7	21	緩傾	凹凸	自然		
75	C4h <sub>1</sub>	N-31°-E	不定形	0.7 × 0.6	19	緩傾	傾斜	自然		
76	C3j <sub>1</sub>	N-77°-W	不定形	0.8 × 0.7	30	緩傾	皿状	自然		
77	C3j <sub>1</sub>	N-43°-E	楕円形	0.8 × 0.6	48	外傾	皿状	自然		
78	C3j <sub>1</sub>	N-55°-E	不定形	1.3 × 1.1	35	緩傾	凹凸	自然	弥生式土器5片	
79	D3a <sub>1</sub>	N-69°-W	楕円形	0.9 × 0.6	22	緩傾	凹凸	自然		
80	C3i <sub>1</sub>	N-47°-W	不整楕円形	0.6 × 0.6	32	緩傾	皿状	自然		
81	C3j <sub>1</sub>	N-20°-E	不整楕円形	0.8 × 0.4	28	外傾	皿状	自然		
82	D3b <sub>1</sub>	N-44°-E	楕円形	1.0 × 0.8	30	緩傾	凹凸	自然		
83	D3b <sub>1</sub>	N-44°-W	楕円形	0.6 × 0.5	21	緩傾	皿状	自然		
84	C3e <sub>1</sub>	N-47°-E	楕円形	2.1 × 1.1	30	緩傾	やや平	人為	弥生式土器3片	弥生時代中期の土壌墓
85	C3e <sub>1</sub>	N-65°-E	隅丸長方形	2.5 × 1.1	55	外傾	平坦	人為	弥生式土器57片, 須恵器1片, 礫片, チョッパー	弥生時代中期の土壌墓
86	C3d <sub>1</sub>	N-38°-E	隅丸長方形	2.3 × 1.0	28	緩傾	皿状	人為	弥生式土器21片, 礫片	弥生時代中期の土壌墓
87	C3d <sub>1</sub>	N-37°-E	隅丸長方形	1.2 × 0.8	19	緩傾	ほぼ平	人為	弥生式土器10片, 剥片	弥生時代中期の土壌墓
88	C3c <sub>1</sub>	N-45°-E	隅丸長方形	2.2 × 1.2	52	外傾	平坦	人為	弥生式土器26片, 勾玉2点	弥生時代中期の土壌墓
89	C3e <sub>1</sub>	N-54°-E	隅丸長方形	1.9 × 1.1	34	緩傾	ほぼ平	人為	弥生式土器8片	弥生時代中期の土壌墓
90	C3e <sub>1</sub>	N-54°-E	隅丸長方形	2.3 × 1.1	40	緩傾	ほぼ平	人為	弥生式土器24片	弥生時代中期の土壌墓
91	C3b <sub>1</sub>	N-62°-E	楕円形	2.4 × 1.5	40	緩傾	皿状	人為	弥生式土器15片	弥生時代中期の土壌墓
92	C3b <sub>1</sub>	N-57°-E	隅丸長方形	2.5 × 1.5	52	緩傾	やや凸	人為	弥生式土器25片, 礫片, 勾玉1点	弥生時代中期の土壌墓
93	C3b <sub>2</sub>	N-28°-W	円形	0.7 × 0.7	10	緩傾	平坦	人為		
94	C3d <sub>1</sub>	N-33°-E	不整楕円形	0.7 × 0.5	13	緩傾	皿状	人為	弥生式土器19片	弥生時代中期の土器棺墓
95	C3a <sub>2</sub>	N-60°-E	[隅丸長方形]	(2.2) × (0.8)	49	緩傾	凹凸	人為	弥生式土器22片	弥生時代中期の土壌墓, 本跡→SD1

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
96	C3d <sub>1</sub>	N-57°-E	隅丸長方形	2.3 × 1.2	41	緩傾	やや凹	人為	弥生式土器46片	弥生時代中期の土壌墓
97	C3c <sub>6</sub>	N-51°-E	隅丸長方形	2.3 × 1.1	41	緩傾	皿状	人為	弥生式土器33片	弥生時代中期の土壌墓
98	C3c <sub>3</sub>	N-90°-E	楕円形	0.8 × 0.7	20	緩傾	傾斜	人為		
99	C3a <sub>4</sub>	N-26°-E	楕円形	0.7 × 0.6	14	緩傾	平坦	自然		
100	C3b <sub>5</sub>	N-54°-E	楕円形	2.2 × 1.1	38	緩傾	皿状	人為	弥生式土器21片	弥生時代中期の土壌墓
101	C4g <sub>1</sub>	-	-	0.7 × (0.4)	15	外傾	平坦	-		本跡→SD1
102	C4g <sub>1</sub>	-	円形	0.4 × 0.4	11	緩傾	皿状	-		
103	C4g <sub>1</sub>	N-7°-W	楕円形	0.6 × 0.5	24	緩傾	皿状	-		本跡→SD1
104	D3b <sub>1</sub>	N-22°-W	楕円形	1.1 × 0.8	30	緩傾	皿状	自然	弥生式土器16片	弥生時代中期
105	D3e <sub>3</sub>	N-27°-W	不定形	0.6 × (0.4)	17	緩傾	平坦	-		
106	D3g <sub>6</sub>	N-33°-E	隅丸長方形	2.1 × 1.1	39	緩傾	皿状	人為	弥生式土器45片	弥生時代中期の土壌墓
107	B3i <sub>0</sub>	N-46°-E	楕円形	2.0 × 1.1	24	緩傾	皿状	人為		弥生時代中期の土壌墓
108	C3a <sub>0</sub>	N-49°-E	隅丸長方形	2.6 × 1.1	34	緩傾	ほぼ平埋	人為	弥生式土器1片	弥生時代中期の土壌墓
109	C4b <sub>1</sub>	N-56°-W	隅丸長方形	2.4 × 1.4	32	緩傾	ほぼ平埋	人為	弥生式土器2片	弥生時代中期の土壌墓
110	B3c <sub>9</sub>	N-44°-E	楕円形	1.6 × 1.2	12	緩傾	ほぼ平埋	自然		
111	B3c <sub>9</sub>	N-39°-W	楕円形	0.8 × 0.6	16	緩傾	皿状	自然		
112	B3c <sub>0</sub>	N-52°-E	楕円形	1.0 × 0.8	21	緩傾	皿状	自然		
113	B3c <sub>0</sub>	N-87°-E	円形	0.5 × 0.5	22	緩傾	皿状	-		
114	B3a <sub>7</sub>	N-35°-E	楕円形	0.7 × 0.6	33	緩傾	皿状	自然		
115	A3g <sub>0</sub>	N-55°-W	楕円形	0.8 × 0.7	21	緩傾	平坦	自然		
116	A3g <sub>0</sub>	-	円形	0.7 × 0.7	30	緩傾	皿状	-		
117	C3d <sub>3</sub>	N-57°-E	楕円形	0.8 × 0.6	30	緩傾	皿状	-	弥生式土器27片, 貝輪2点, 剥片	弥生時代中期の土器棺墓

## 7 集石遺構

本調査区の北西部を中心に1か所の集石遺構を確認した。以下、その特徴と出土遺物について記載する。

### 第1号集石遺構（第92図）

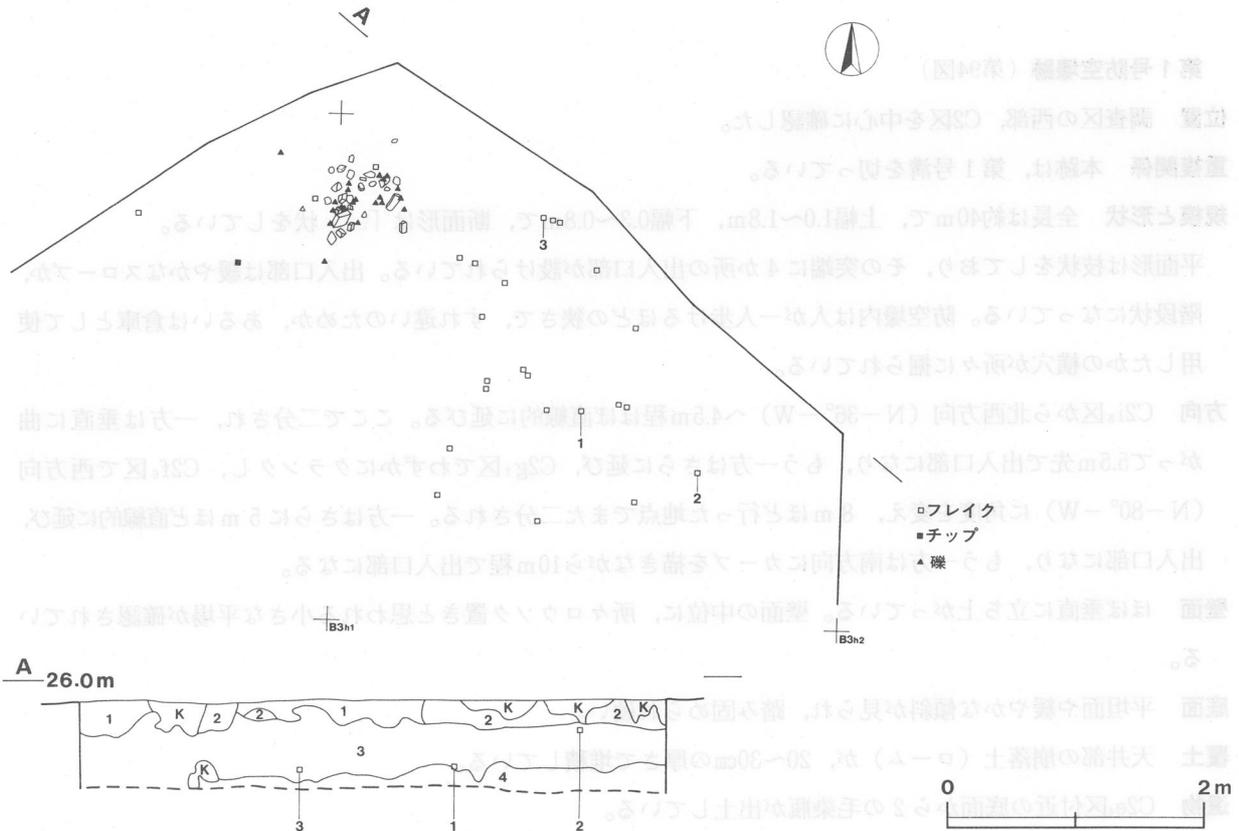
**位置** 調査区の北西部，B2g<sub>0</sub>・B3g<sub>1</sub>区。

**規模** 半径60cmの円形の範囲に焼けた礫や礫片（流紋岩）が積まれた状態で確認された。

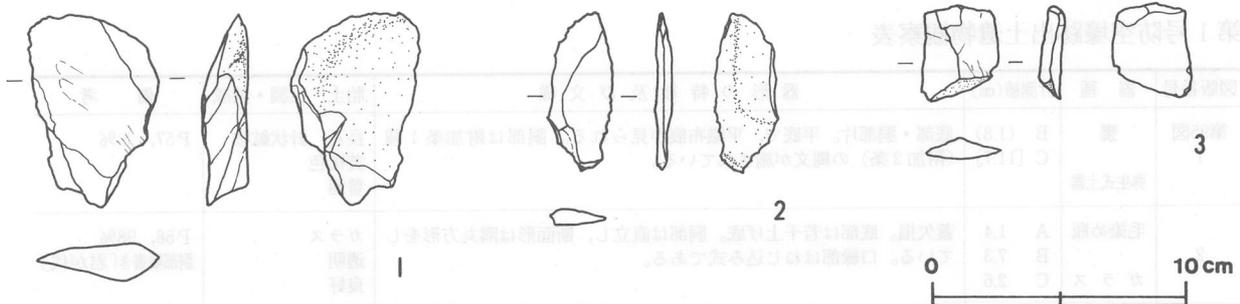
**確認土層** ソフトローム下層からハードローム上面にかけて確認した。

**遺物** 集石遺構の周辺から剥片（頁岩）が、28点出土している。

**所見** 遺物の出土土層や集石の確認土層から、旧石器時代後期の調理場遺構と思われる。



第92図 第1号集石遺構実測図



第93図 第1号集石遺構出土遺物実測図

第1号集石遺構出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第93図 1	剥片	7.6	5.1	1.8	59.4	頁岩		Q12
2	剥片	6.3	2.6	0.7	8.6	頁岩		Q13
3	剥片	3.8	3.1	0.9	8.6	頁岩		Q14

## 8 防空壕跡

本調査区の西部から防空壕跡を1か所確認した。以下、その特徴と出土遺物について記載する。

### 第1号防空壕跡 (第94図)

**位置** 調査区の西部, C2区を中心に確認した。

**重複関係** 本跡は, 第1号溝を切っている。

**規模と形状** 全長は約40mで, 上幅1.0~1.8m, 下幅0.3~0.8mで, 断面形は「┌」状をしている。

平面形は枝状をしており, その突端に4か所の出入口部が設けられている。出入口部は緩やかなスロープか, 階段状になっている。防空壕内は人が一人歩けるほどの狭さで, すれ違いのためか, あるいは倉庫として使用したかの横穴が所々に掘られている。

**方向** C2i<sub>a</sub>区から北西方向 (N-36°-W) へ4.5m程ほぼ直線的に延びる。ここで二分され, 一方は垂直に曲がって5.5m先で出入口部になり, もう一方はさらに延び, C2g<sub>7</sub>区でわずかにクランクし, C2f<sub>6</sub>区で西方向 (N-80°-W) に角度を変え, 8mほど行った地点でまた二分される。一方はさらに5mほど直線的に延び, 出入口部になり, もう一方は南方向にカーブを描きながら10m程で出入口部になる。

**壁面** ほぼ垂直に立ち上がっている。壁面の中位に, 所々ロウソク置きと思われる小さな平場が確認されている。

**底面** 平坦面や緩やかな傾斜が見られ, 踏み固められ硬い。

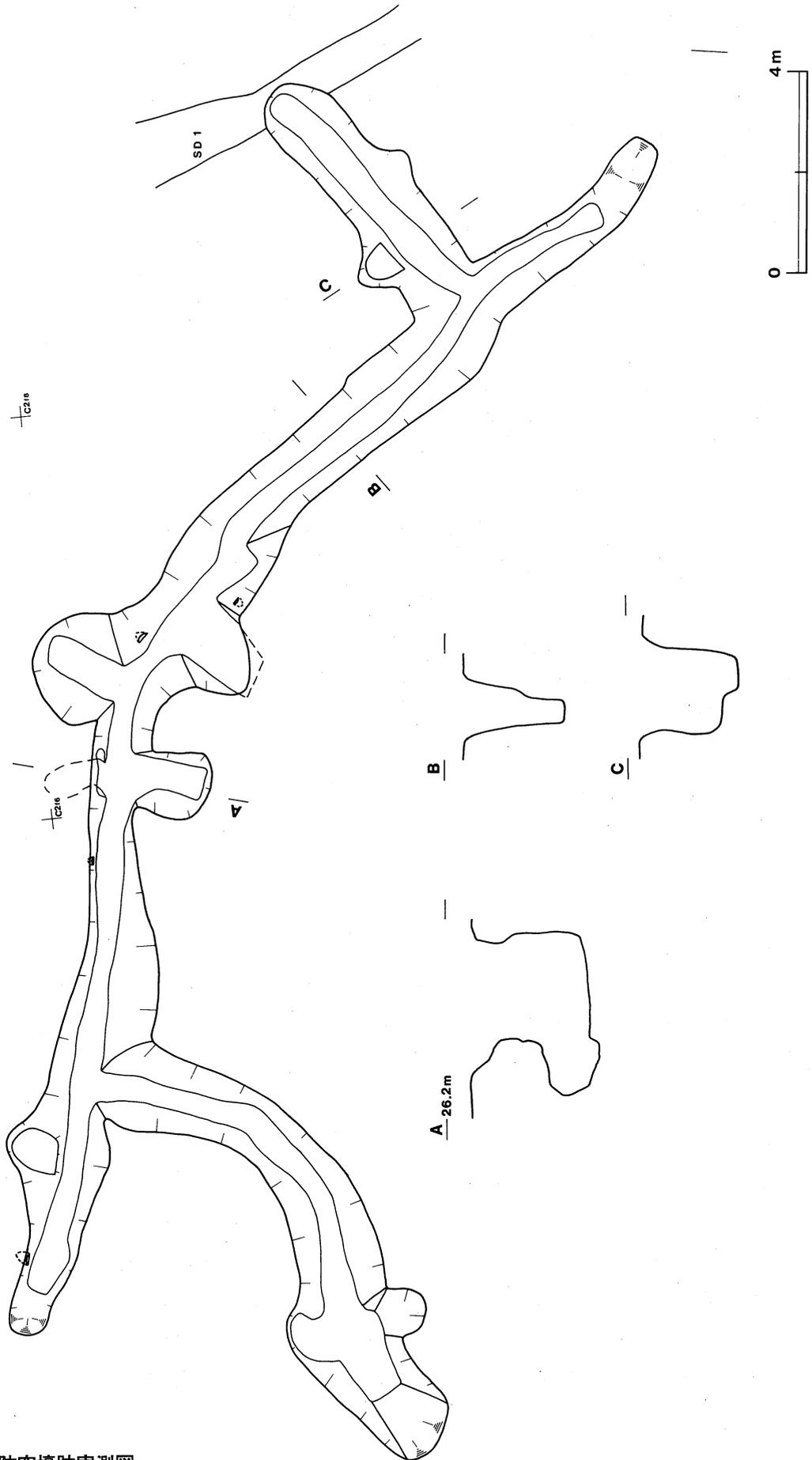
**覆土** 天井部の崩落土 (ローム) が, 20~30cmの厚さで堆積している。

**遺物** C2e<sub>4</sub>区付近の底面から2の毛染瓶が出土している。

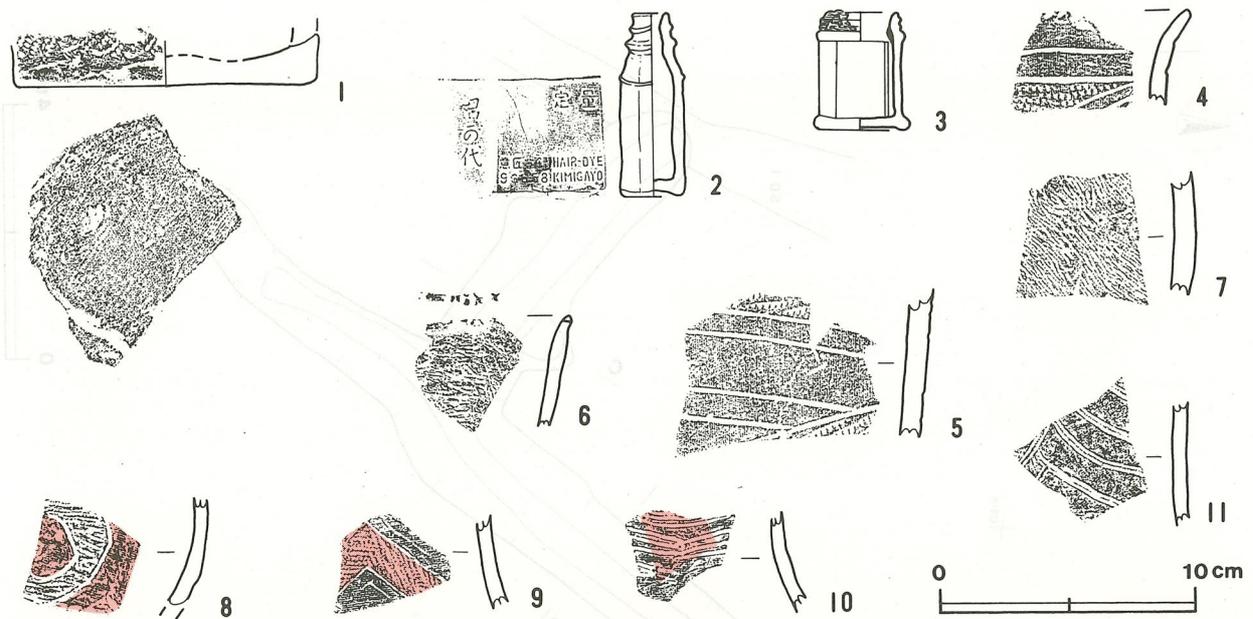
**所見** 本跡の北東約1kmの地点に旧日本海軍の飛行場跡があることと遺構の形状から昭和初期に掘られた軍関係の防空壕跡と思われる。

第1号防空壕跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第95図 1	甕 弥生式土器	B (1.8) C [11.7]	底部・胴部片。平底で, 平織布痕が見られる。胴部は附加条1種 (附加2条) の縄文が施されている。	長石, 針状鉱物 黄褐色 普通	P 57, 5%
2	毛染め瓶 ガラス	A 1.4 B 7.3 C 2.6	蓋欠損。底部は若干上げ底。胴部は直立し, 断面形は隅丸方形をしている。口縁部はねじ込み式である。	ガラス 透明 良好	P 58, 98% 胴部縦書き「君が代」
3	軟膏瓶 ガラス	A 2.9 B 4.3 D 3.8	蓋一部欠損。底部は若干上げ底。底部と胴部の境は若干突出し, 上方に向かって直立している。断面形は六角形をしている。口縁部はねじ込み式である。蓋は鉄製であるが, 腐食が激しい。	ガラス 緑色で透明 良好	P 59, 98%



第94图 第1号防空壕迹实测图



第95図 第1号防空壕跡出土遺物実測・拓影図

4と5は太い沈線と貝殻腹縁文が施されており、縄文時代早期の三戸式土器である。6は口縁部片で、口唇部に棒状工具による刻み目がみられ、口縁部は反撚の縄文が、7も同じ縄文が施されている。8は1本沈線による渦巻文が描かれ、渦巻間に朱彩した充填縄文が施されている。9は1本沈線による重三角文が描かれ、単節の充填縄文部は朱彩されている（貉式土器）。10は壺の頸部片で、横方向の太い1本沈線が重層している。11は平行沈線による重連弧文が描かれている（足洗2式土器）。

## 9 遺構外出土遺物

ここでは、遺物集中地点から出土した遺物とその他の遺構外や表面採集された遺物に分けて記述する。

### (1) 遺物集中地点（付図）

**位置** 調査区の北西部、C2j1区付近。

**規模と状態** 第39～44・47・48号土壌墓の上面に、直径8m前後の円形の範囲に土器の集中が見られた。

**覆土** 粒子の粗い黒色土が幅20cm前後の厚さで堆積していた。低いマウンド状の堆積であった可能性もある。

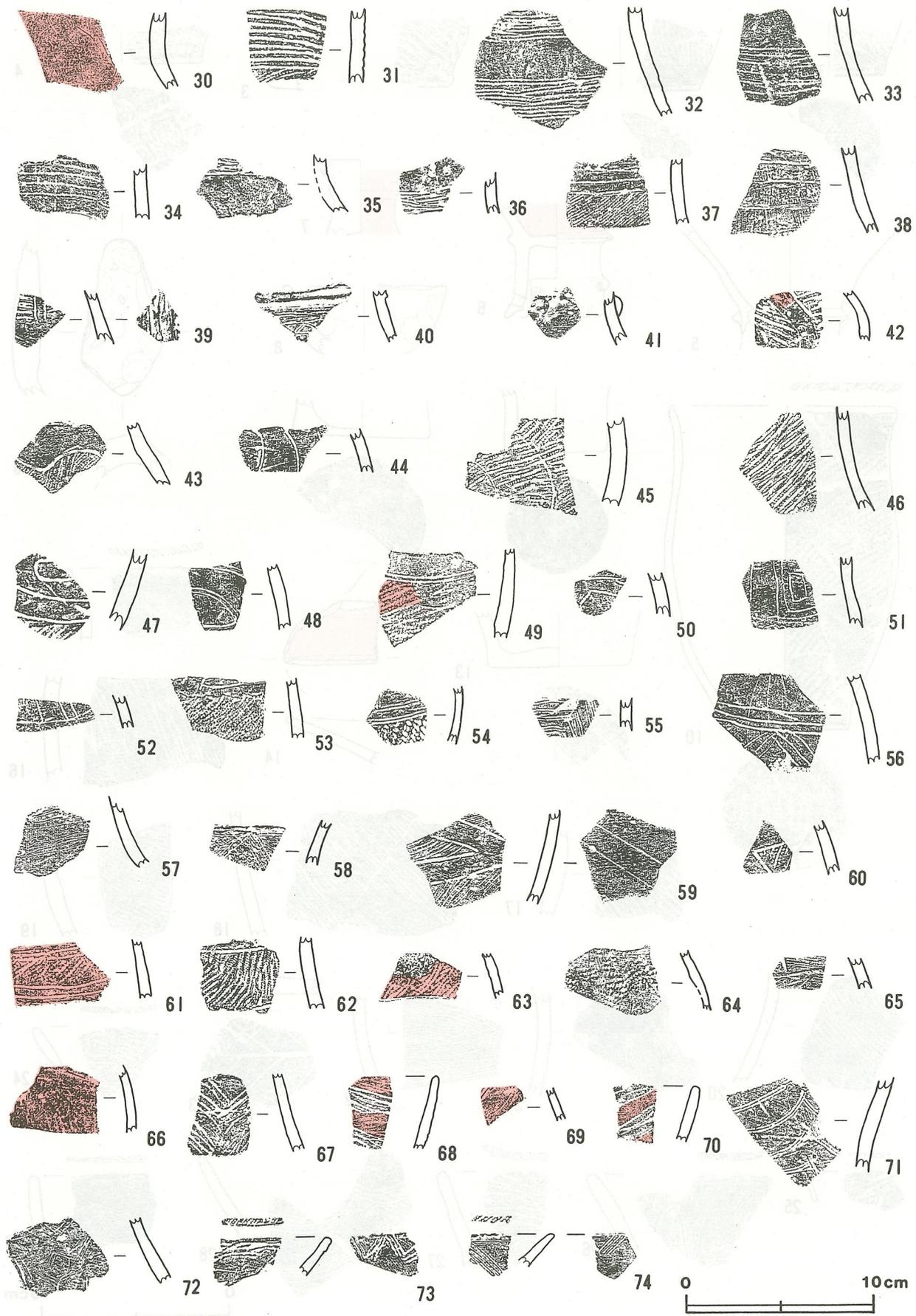
**遺物** 覆土中から弥生式土器998片と礫片（砂岩が中心）、剥片（頁岩・長石）がバラまかれた状態で出土している。特に、壺片の出土が多い。10の小形甕以外の弥生式土器片は接合しないことから、他の場所で故意に割られ、捨てられた可能性がある。

**所見** 本跡は、遺物の出土状態や朱塗りされた6の台付鉢片や7の高環片、8の手捏ね土器片、二次火熱のある土器片等特異な土器も出土していることから、埋葬前や埋葬時にこれらの土器を使用しての葬送にかかわる祭祀行為があったものと思われる。しかし、この行為が全ての土壌墓に見られる事でないことから、本跡の被葬者と他の土壌墓の被葬者とに身分差等の違いがあった可能性がある。

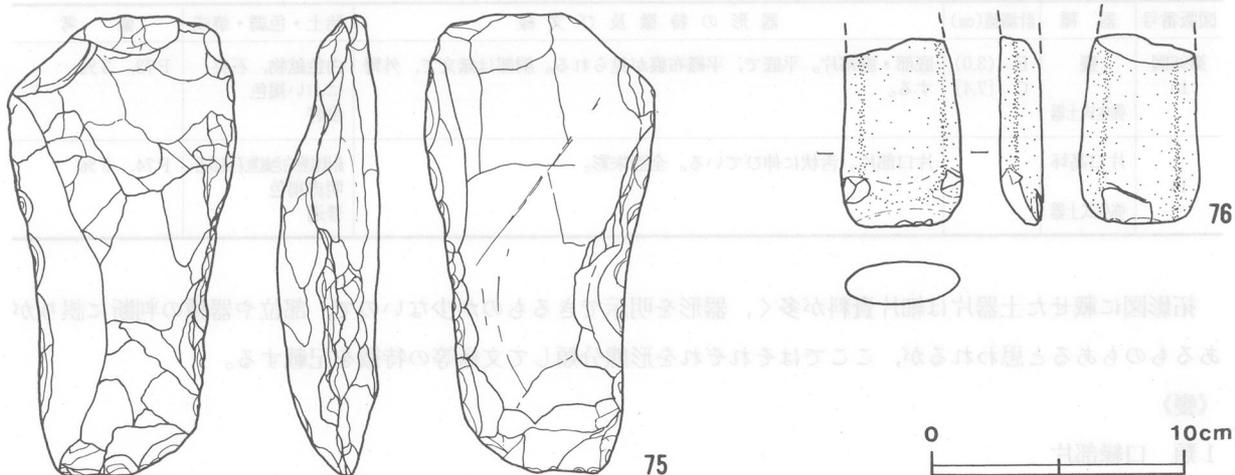
祭祀が行われた時期は、足洗2式土器を中心に貉式・足洗1式土器も少量出土しており、葬送にかかわる土器は古い形式の土器を使用する場合もあることから、ここでは弥生時代中期後葉でも新しい時期を当てはめたい。



第96图 遺物集中地点出土遺物実測・拓影図(1)



第97图 遺物集中地点出土遺物拓影图 (2)



第98図 遺物集中地点出土遺物実測図(3)

遺物集中地点出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第96図 1	壺 弥生式土器	B (3.1) C [5.6]	底部・胴部片。平底で、平織布痕が見られる。胴部は外彎気味に外傾する。胴部外面に附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	針状鉱物、石英、長石 橙色 普通	P 61, 10%
2	甕 弥生式土器	B (3.5) C [8.4]	底部・胴部片。平底で、平織布痕が見られる。胴部は直線的に外傾する。胴部外面に附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。下位はヘラ削りが施されている。	長石、小石 にぶい橙色 普通	P 62, 3%
3	不明 弥生式土器	B (3.4) C [9.8]	底部・胴部片。平底。胴部は直線的に外傾する。胴部外面に附加条1種(附加2条)の縄文が施され、下位は無文部を残す。	長石、石英、雲母 にぶい黄橙色 普通	P 63, 3%
4	甕 弥生式土器	B (1.6) C [8.8]	底部片。平底で、木葉痕が見られる。	白色鉱物、長石、スコリア にぶい橙色 普通	P 64, 3%
5	台付鉢 弥生式土器	B (5.8)	脚部・体部片。脚部と体部の境に断面「三角形」の帯が巡る。体部は逆「ハ」の字状に開く。	長石、石英、雲母 にぶい黄橙色 普通	P 65, 10% 体部外面刷圧痕
6	台付鉢 弥生式土器	B (6.0) D 5.0 E 3.7	脚部・体部片。脚部下位には焼成前の穿孔が2か所見られ、ほぼ同じ位置に貼瘤が2個見られる。脚部と体部の境には断面「三角形」の帯が巡っている。体部の内・外面は朱彩されている。	石英、雲母、白色鉱物 にぶい橙色 普通	P 66, 20%
7	高坏 弥生式土器	B (3.5) E (2.8)	脚部片。脚部と坏部の境に断面「三角形」の太い帯が巡る。外面朱彩。	長石、白色鉱物 赤褐色 普通	P 67, 5%
8	手捏土器 弥生式土器	A [8.7] B (3.7)	体部・口縁部片。口縁部は内彎しながら立ち上がる。体部外面指頭圧痕。	白色鉱物 灰黄褐色 普通	P 68, 20%
9	手捏土器 弥生式土器	B (8.4)	形状不明。外面指頭圧痕。	長石、石英、雲母 にぶい黄橙色 普通	P 69
10	甕 弥生式土器	A [12.1] B 17.4 C 6.6	底部～口縁部片。平底で、平織布痕が見られる。胴部は内彎気味に外傾し、口縁部でわずかに外反する。胴部は単節の縄文が施されている。口縁部は無文で、口唇部に縄文が施されている。胴部には二次火熱痕が見られる。	長石 にぶい黄褐色 普通	P 70, 40%
11	鉢 弥生式土器	B (3.5) C 5.3	底部・体部片。平底で、平織布痕が見られる。体部は無文で、直立している。	石英、長石、雲母 明赤褐色 普通	P 71, 10%
12	不明 弥生式土器	B (2.0) C 7.1	底部片。平底で、平織布痕が見られる。	針状鉱物、長石、石英 にぶい黄橙色 普通	P 72, 10%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第96図 13	甕 弥生式土器	B (3.0) C [7.4]	底部・胴部片。平底で、平織布痕が見られる。胴部は無文で、外彎する。	白色磁物、石英にふい褐色良好	P 73, 3%
14	片口高坏 弥生式土器		片口部片。舌状に伸びている。全面朱彩。	針状磁物、白色磁物、石英、長石、明赤褐色、普通	P 74, 5%

拓影図に載せた土器片は細片資料が多く、器形を明示できるものが少ないので、部位や器種の判断に誤りがあるものもあると思われるが、ここではそれぞれを形態分類して文様等の特徴を記載する。

#### 《甕》

##### 1類 口縁部片

a : 口唇部に縄文が施され、口縁部は無文のもの(第96図15)・・・足洗式土器

##### 2類 胴部片

a : 附加条1種(附加2条)の縄文が施されているもの(第96図16~21)

b : 単節の縄文が施されているもの(第96図22)

##### 3類 底部片

a : 木葉痕を残すもの(第96図23)

b : 平織布痕を残すもの(第96図2)

#### 《壺》

##### 1類 口縁部片

a : 受口状の口縁で、外面に附加条1種(附加2条)の縄文が施されているもの(第96図24)

b : 口唇部に三角状の刻み目を持ち、口縁部は無文のもの(第96図25)

c : 口唇部に縄文が施され、口縁部は板状工具による縦方向のナデが施されているもの(第96図26)

d : 口唇部に縄文が施され、口縁部は附加条1種(附加2条)の縄文が施されているもの(第96図27)

e : 平行沈線による重連弧文が描かれているもの(第96図28, 29)・・・足洗2式土器

##### 2類 頸部片

a : 無文で、朱彩されているもの(第97図30)

b : 横方向に太い1本沈線が重層しているもの(第97図31)・・・足洗1式土器

c : 横方向に平行沈線が重層しているもの(第97図32~36)・・・足洗2式土器

d : 横方向に幅の狭い平行沈線が描かれているもの(第97図37, 38)・・・足洗2式土器

e : 平行沈線による格子文が施されているもの(第97図39)・・・足洗2式土器

f : 断面「三角形」の帯を持ち、横方向の平行沈線の重層と平行沈線による重山形文が施されているもの(第97図40)・・・足洗2式土器

g : 無文で、貼瘤を持つもの(第97図41)

##### 3類 胴部片

a : 1本沈線による渦巻文を描いた後に渦巻間に充填縄文が施されているもの(第97図42, 43)・・・猪式土器

b : 1本沈線による渦巻文が施されているもの(第97図44~47)・・・足洗1式土器

c : 平行沈線による渦巻文が施されているもの(第97図48, 49)・・・足洗2式土器

- d : 1本沈線による重四角文が施されているもの(第97図50~53)・・・足洗1式土器
- e : 平行沈線による重四角文が施されているもの(第97図54, 55)・・・足洗2式土器
- f : 1本沈線による重山形文が施されているもの(第97図56~58)・・・足洗1式土器
- g : 1本沈線区画による三角文を描いた後に附加条1種(附加2条)の充填縄文が施されているもの(第97図59, 60)・・・貉式土器
- h : 横方向の平行沈線間を附加条1種(附加2条)の縄文で充填されているもの(第97図61~63)
- i : 附加条1種(附加2条)の縄文が施されているもの(第97図64)
- j : 無節縄文を押圧し, その周辺を細い平行沈線で重層しているもの(第97図65)
- k : 無文で, 朱彩されているもの(第97図66)
- l : 1本沈線による重連弧文が施され, 幅の広い弧の部分に朱彩しているもの(第97図67・69)

《鉢》

体部に平行沈線による重連弧文が施されているもの(第97図71)・・・足洗2式土器

《蓋》

体部は「ハ」の字状に開き, 細い1本沈線による重山形文が施されているもの(第97図72)

《高坏》

1類 口縁部片

- a : 口唇部に縄文が施され, 外面に1本沈線による, 内面に平行沈線による重山形文が施されているもの(第97図73)・・・足洗1式土器
- b : 口唇部に縄文が施され, 内・外面に平行沈線による重山形文が施されているもの(第97図74)・・・足洗2式土器

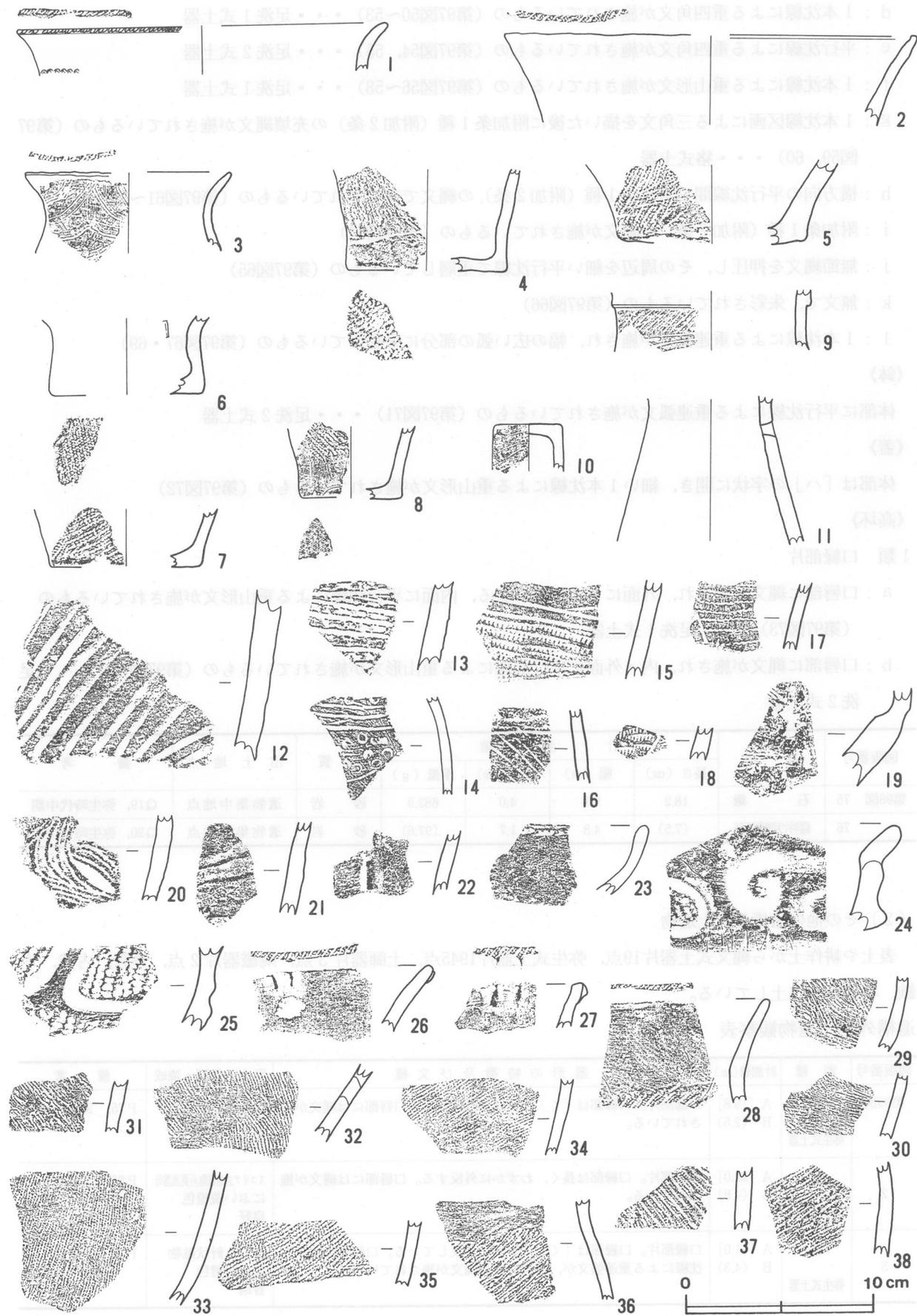
図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第98図 75	石 鉢	18.2	9.1	4.0	682.5	砂 岩	遺物集中地点	Q19, 弥生時代中期
76	扁平刃磨製石斧	(7.5)	4.8	1.7	(97.6)	砂 岩	遺物集中地点	Q20, 弥生時代中期

(2) その他の遺構外出土遺物

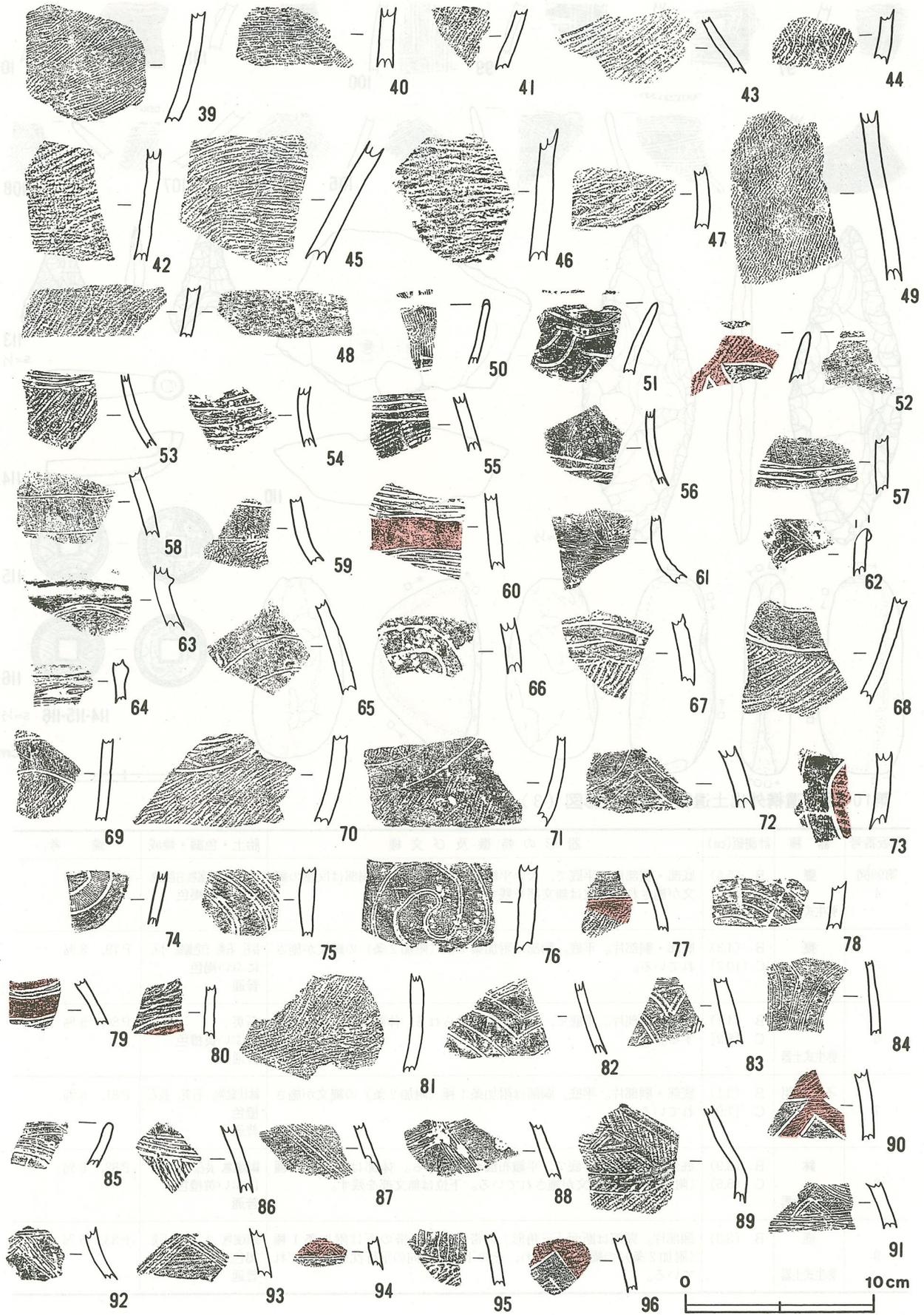
表土や耕作土から縄文式土器片19点, 弥生式土器片1945点, 土師器片3点, 陶磁器片2点, 煙管, 古銭, 石鏃, 石槍等が出土している。

遺構外出土遺物観察表

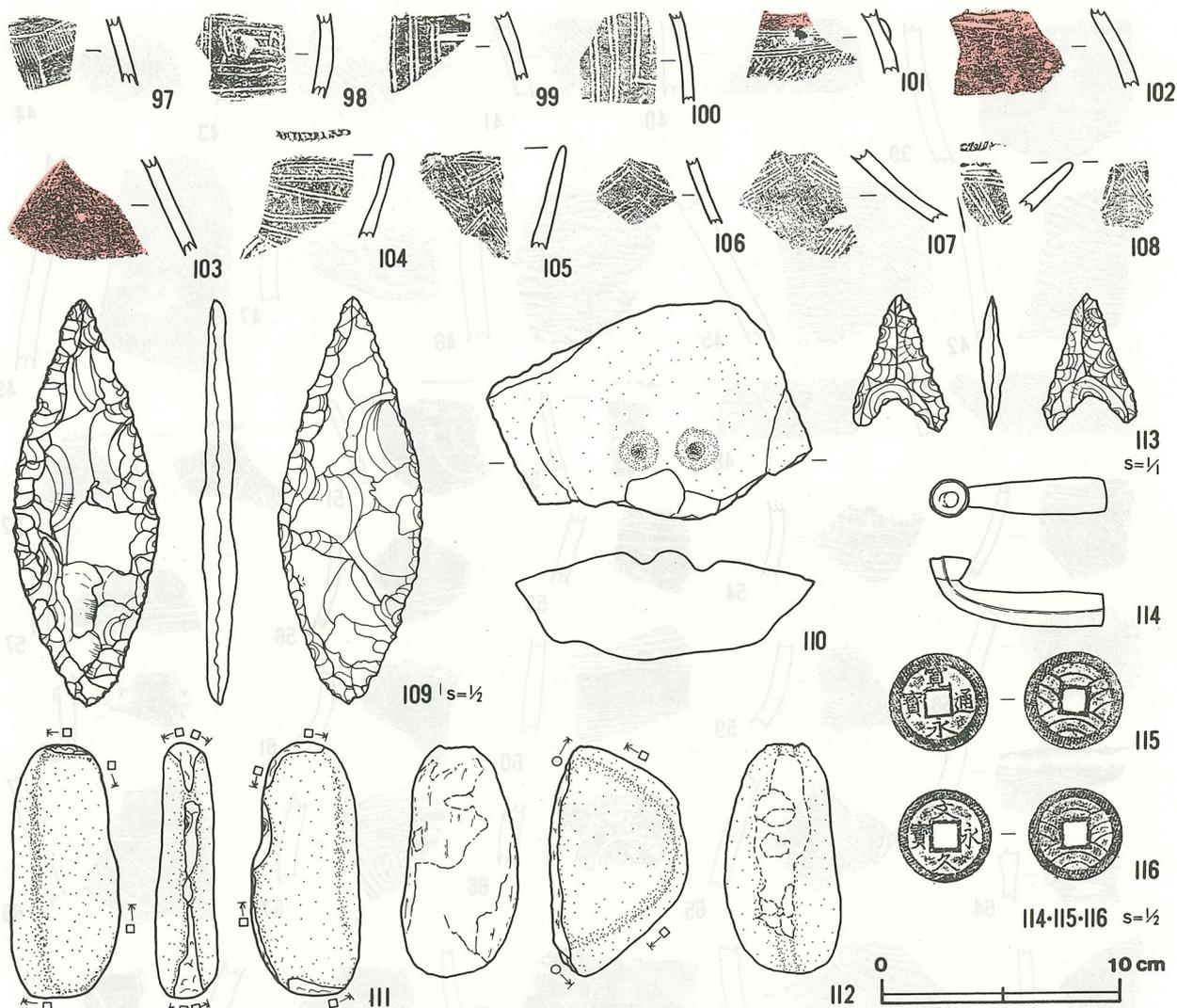
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第99図 1	甕 弥生式土器	A [19.8] B (2.5)	口縁部片。口縁部は「く」の字状に外反する。口唇部には縄文が施されている。	白色磁物, 石英にぶい黄橙色普通	P75, 2%
2	甕 弥生式土器	A [22.0] B (4.8)	口縁部片。口縁部は長く, わずかに外反する。口唇部には縄文が施されている。	スリッ白色磁物石英黒雲母にぶい黄橙色良好	P76, 3%
3	甕 弥生式土器	A [11.0] B (4.3)	口縁部片。口縁部は「く」の字状に外反している。口縁部には平行沈線による重連弧文が, 口唇部には縄文が施されている。	長石, 針状磁物にぶい橙色普通	P77, 5%



第99図 遺構外出土遺物実測・拓影図(1)



第100图 遺構外出土遺物拓影图 (2)



第101図 遺構外出土遺物実測・拓影図(3)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第99図 4	甕 弥生式土器	B (5.5) C [8.4]	底部・胴部片。平底で、太い平織布痕が見られる。胴部は反撚の縄文が施され、下位は無文部を残す。	スコリア、鉢状鉱物、白色鉱物にぶい黄褐色普通	P 78, 5%
5	甕 弥生式土器	B (4.3) C [10.2]	底部・胴部片。平底。胴部は附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	長石、石英、白色鉱物、小石にぶい褐色普通	P 79, 3%
6	鉢 弥生式土器	B (4.1) C [8.2]	底部・体部片。平底で、平織布痕が見られる。体部は無文で、外彎する。	石英にぶい黄褐色普通	P 80, 5%
7	不明 弥生式土器	B (3.1) C [7.9]	底部・胴部片。平底。胴部は附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。	鉢状鉱物、石英、長石、橙色普通	P 81, 5%
8	鉢 弥生式土器	B (3.9) C (5.6)	底部・体部片。平底で、平織布痕が見られる。体部は附加条1種(附加2条)の縄文が施されている。下位は無文部を残す。	鉢状鉱物、長石、白色鉱物にぶい黄褐色普通	P 82, 5%
9	壺 弥生式土器	B (3.3)	頸部片。頸部は断面「三角形」の帯が巡り、帯の下は附加条1種(附加2条)の縄文が施され、その下は横方向の平行沈線が施されている。	鉢状鉱物、スコリア、石英、褐色普通	P 83, 5%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第99図 10	蓋 弥生式土器	F 3.6 G (2.5)	天井部・体部片。天井部は平らである。体部は垂直に伸び、外面に一本沈線による重連弧文が描かれている。	長石 褐色 普通	P 84, 3%
11	不明 弥生式土器	B (7.6)	頸部片。頸部はわずかに外傾する。焼成後に外面から内面に向けての斜方向の穿孔が見られる。	針状鉱物石英長石雲母 にぶい黄橙色 普通	P 85, 5%

拓影図の第99図12と13は尖底深鉢片で、斜方向の沈線が施されており、縄文時代早期の田戸下層式土器である。14は円形竹管文が施されており、上記よりは新しい田戸下層式土器である。15と16は斜方向の沈線と貝殻腹縁文が、17と18は貝殻腹縁文が、19は尖底深鉢で、斜方向に沈線が施されている。これらは縄文時代早期の三戸式土器である。20は集合沈線文が施されており、縄文時代前期末の十三菩提式土器である。21と22は隆起線文が施されている。23は深鉢の口縁部片で、口縁上位に結節沈線が施されている。これらは縄文時代中期中葉の阿玉台 I a 式土器である。24と25は口縁部片で、縄文時代中期後葉の加曾利 E II 式土器である。

弥生式土器は多量に出土しており、土器集中地点の拓影図同様、形態分類して記載する。

#### 《甕》

##### 1類 口縁部片

- a : 口唇部に縄文が施され、口縁部上位に2個1単位の縦長の貼瘤がつくもの(第99図26, 27)
- b : 口唇部に縄文が施され、口縁部は無文のもの(第99図28)・・・足洗式土器

##### 2類 胴部片

- a : 反撚の縄文が施されているもの(第99図29~32)
- b : 単節の縄文が施されているもの(第99図33~35)
- c : 附加条1種(附加2条)の縄文が施されているもの(第99図36~38, 第100図39~49)

#### 《壺》

##### 1類 口縁部片

- a : 口唇部に刻み目を持ち、口唇部と口縁部に擬縄文が施されているもの(第100図50)・・・東南部系土器か
- b : 口唇部に刻み目を持ち、口縁部に平行沈線による重連弧文が描かれているもの(第100図51)・・・足洗2式土器
- c : 口唇部に縄文が施され、口縁部に朱彩された縄文と1本沈線による区画があり、口縁端部内面に1条の沈線が巡るもの(第100図52)・・・猪式土器の古段階

##### 2類 頸部片

- a : 横方向に1本沈線が重層するもの(第100図53~57)
- b : 1本沈線間の幅の広いもの(第100図58, 59)
- c : 1本沈線が重層している間の無文部に朱彩されているもの(第100図60)
- d : 横方向と山形に平行沈線が巡るもの(第100図61)
- e : 斜方向に平行沈線が描かれ、1単位の貼瘤が付くもの(第100図62)
- f : 断面「三角形」の帯が巡っているもの(第100図63, 64)

##### 3類 胴部片

- a : 1本沈線による渦巻文が描かれているもの(第100図65~73)・・・足洗式土器

- b : 1本沈線による渦巻文が描かれ、渦巻間を擬縄文で充填しているもの(第100図74)・・・東西南部系土器か
- c : 平行沈線による渦巻文が描かれているもの(第100図75~77)・・・足洗2式土器
- d : 幅広の平行沈線による渦巻文が描かれているもの(第100図78)・・・足洗2式土器
- e : 平行沈線による渦巻文が描かれ、朱彩されているもの(第100図79, 80)・・・足洗2式土器
- f : 附加条1種(附加2条)の縄文が施されているもの(第100図81)
- g : 1本沈線による重連弧文が描かれているもの(第100図82)・・・足洗1式土器
- h : 平行沈線による重連弧文が描かれているもの(第100図83, 84)・・・足洗2式土器
- i : 斜方向に平行沈線が重層しているもの(第100図85~88)
- j : 附加条1種(附加2条)の縄文を施した後に1本沈線による重山形文が描かれ、縄文部に朱彩されているもの(第100図89, 90)・・・足洗1式土器
- k : 平行沈線による重山形文が描かれているもの(第100図91~93)・・・足洗2式土器
- l : 平行沈線による連続山形文が描かれ、朱彩されているもの(第100図94)・・・東西南部系土器か
- m : 1本沈線による重四角文が描かれているもの(第100図95)・・・足洗1式土器
- n : 1本沈線による重四角文が描かれ、縄文部に朱彩されているもの(第100図96)
- o : 1本沈線による重四角文が描かれ、四角文の間に擬縄文が充填されているもの(第101図97)・・・東西南部系土器か
- p : 平行沈線による重四角文が描かれているもの(第101図98~100)・・・足洗2式土器
- q : 横方向の平行沈線が描かれ、沈線間が朱彩され、貼瘤が付くもの(第101図101)
- r : 無文で朱彩されているもの(第101図102, 103)

《鉢》

1類 口縁部片

- a : 口唇部に刻み目を持ち、口縁部に平行沈線による重連弧文が描かれているもの(第101図104)・・・足洗2式土器
- b : 口縁部に平行沈線による重山形文が描かれているもの(第101図105)・・・足洗2式土器

2類 体部片

- a : 平行沈線による重連弧文が描かれているもの(第101図106)・・・足洗2式土器
- b : 斜方向に平行沈線が重層しているもの(第101図107)

《高坏》

口唇部に縄文が施され、口縁部の内・外面に平行沈線による重山形文が描かれているもの(第101図108)

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第101図109	石 槍	11.5	4.0	1.0	42.5	頁岩	付図(ソフトローム上面)	Q11, 縄文草創期
110	凹 石	(9.2)	(13.7)	(4.6)	(621.1)	砂岩	I区(2トレンチ)	Q15, 縄文時代
111	敲 石	10.6	4.6	2.6	157.4	砂岩	表面採集	Q16, 縄文時代
112	磨 石	9.7	5.7	4.9	348.8	石英	表面採集	Q17
113	石 鏃	1.9	1.3	0.4	0.5	チャート	II区(C3b <sub>r</sub> )	Q18, 縄文時代

図版番号	器 種	計 測 値				備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
第101図 114	煙 管	4.8	1.8	0.9	5.7	M1, 表面採集, 銅製品

図版番号	鋳 名	初 鋳 年		出 土 地 点	備 考
		時 代	年 号 (西 暦)		
第101図115	寛永通寶	江 戸		II 区 表 面 採 集	M2
116	文久永寶	江 戸		I 区 (Dトレンチ)	M3



作 業 風 景

## 第4節 まとめ

当遺跡からは、縄文時代の竪穴住居跡や弥生時代の土壌墓等多くの遺構を確認し、縄文式土器や弥生式土器等の遺物の出土をみた。ここでは弥生時代の土壌墓と土器棺墓の位置、主軸方向、出土土器の特徴及び出土状態等をもとに弥生式土器の編年的位置付けや当時の墓制について若干の検討を加えたい。

### 1 土器編年について

土器集中地点、土壌墓及び土器棺墓を中心に5085点の弥生式土器片が出土している。これらの土器を文様構成や施文具の違い等をもとに分類することにする。

- ・Ⅰ類 本類の土器は、ヘラ状工具による沈線で渦巻文を描いた後に充填縄文を施しているもの(第72図7, 8), 土器の器面に縄文を施した後に沈線で渦巻文を描き, その部分の縄文を磨り消しているもの(第72図9), 縄文を施した後に沈線で重三角文を描き, その部分を磨り消しているもの(第95図9, 第97図59, 第100図71, 89, 90)で, それらは格式土器と思われ, 弥生時代中期中葉の時期を当てはめることができる。
- ・Ⅱ類 本類の土器は, 1本沈線による渦巻文(第97図44, 45, 53), 重山形文(第97図73), 重四角文(第97図50~53)及び重連弧文(第100図82)が描かれているもので, それらは足洗1式土器<sup>(1)</sup>と思われ, 中期後葉でも古い時期を当てはめることができる。その他, 植物の茎を回転させて施文している擬縄文(第100図50, 第101図97)等がみられ, 東北地方南部の土器(二ツ釜式土器)の影響を受けているものと思われる。
- ・Ⅲ類 本類の土器は, 2本や3本の櫛状工具による平行沈線で, 渦巻文(第97図48, 49), 重四角文(第97図54, 55), 重山形文(第97図40), 重連弧文(第96図28, 第97図71, 第100図51)及び格子目文が描かれているものや0段撚が施されているもの(第60図3, 第69図2, 3), 壺の頸部に断面「三角形」の帯が巡っているもの(第100図63, 64), 口縁部や胴部に貼瘤が認められるもの(第99図26, 27)等で, それらは足洗2式土器のものと思われ, 中期後葉でも新しい時期を当てはめることができる。また, これらの土器は形態や文様構成の上で, 福島県の陣場式土器, 桜井式土器及び天神原式土器との関係が窺われる。

出土土器を分類してみるとⅠ・Ⅱ類の土器は非常に少なく, ほとんどがⅢ類の土器であることがわかる。出土遺構が墓跡であることを考えると古い型式の土器(Ⅰ・Ⅱ類)を副葬する可能性は大いにありうることであり, 長期にわたって土壌墓群が形成されたと考えるよりも一型式ないし二型式の土器編年内に収まる時期を想定することが妥当であると思われる。

### 2 墓制について

当遺跡から32基の土壌墓と2基の土器棺墓を確認した。土壌墓は隅丸長方形や楕円形をしており, 主軸方向や位置等から7つのグループ化が可能である。

- ・A群 第51・53号土壌墓からなるグループで, 第51号土壌墓と第53号土壌墓は長軸方向が9度の振り幅内にあり, 共に近接している。  
土壌墓の時期がわかるものは第51号土壌墓で, Ⅲ類の土器が出土している。
- ・B群 第39・40・43・44号土壌墓からなるグループで, 土壌墓の長軸方向が7度と小さな振り幅で, 近接している。  
第40号土壌墓はⅡ類の土器が, 第43号土壌墓はⅡ・Ⅲ類の土器が, 第44号土壌墓はⅢ類の土器が出土しており, 同じグループであるが時期差がある。
- ・C群 第41・42・47A・47B・48号土壌墓からなるグループで, 第47A号土壌墓と第47B号土壌墓は同一方向を向いているものの全体としては長軸方向の振り幅は19度と大きい, 短軸方向が北西にほぼ一直線

に並んでおり、土壌墓群の中心的位置を示している。

第42・47A・47B号土壌墓はⅡ類の土器が、第41号土壌墓はⅢ類の土器が出土しており、時期差が認められる。

- ・D群 第58・59号土壌墓からなるグループで、長軸方向の振り幅は7度と小さい。第59号土壌墓はⅡ・Ⅲ類の土器が出土している。
- ・E群 第91・92・95・100号土壌墓からなるグループで、長軸方向の振り幅は8度である。第100号土壌墓はⅡ類の土器が、第91・92号土壌墓はⅢ類の土器が出土している。短軸方向は北西にはほぼ一直線に並んでおり、土壌墓群の中心的位置を示している。
- ・F群 第84～88号土壌墓と第94・117号土器棺墓からなっている。土壌墓は長軸方向の振り幅が27度と大きい、それぞれ近接している。特に、第86号土壌墓と第94号土器棺墓、第88号土壌墓と第117号土器棺墓の位置のように、それぞれの土壌墓の南東壁側に土器棺墓が位置しており、土壌墓から土器棺墓への再葬が考えられる。また、副葬品を持つものもあり、C・E群同様中心的な土壌墓群である。

F群の全ての土壌墓と土器棺墓からは、Ⅲ類の土器が出土している。

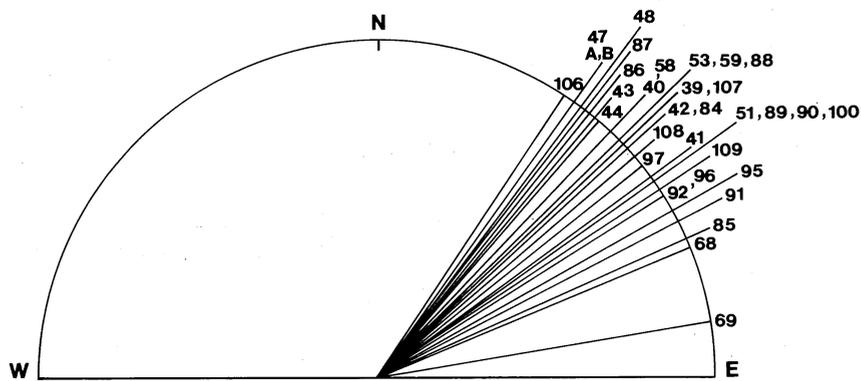
- ・G群 第89・90号土壌墓からなり、同一方向を向いている。  
第90号土壌墓からは、Ⅲ類の土器が出土している。
- ・H群 第96・97号土壌墓からなり、両者は長軸方向の振り幅が7度と小さい。  
第96号土壌墓はⅢ類の土器が出土している。
- ・I群 第68・69号土壌墓からなり、両者は長軸方向の振り幅が14度と大きい、近接している。  
両土壌墓からは、Ⅲ類の土器が出土している。
- ・J群 第108・109号土壌墓からなり、両者は長軸方向の振り幅が7度と小さい。

このように、弥生時代中期後半でも新しい時期の土壌墓がほとんどで、土壌墓同士に重複がなく、いくつかの群をなしていることは第84号と第85号の土壌墓の覆土内出土の土器が接合関係にあるように、戦や病気等で同時に多くの人々が死に一度に複数の遺体を埋葬したか、あるいは、土器型式編年上では変化が認められない時間幅の中で作られたものと思われる。一ノ堰B遺跡では、土壌墓付近に小ピットが認められ、そこに墓標を立てたという見解が出されている<sup>(2)</sup>。当遺跡でも土壌墓内やその近くに小ピットがみられ、埋葬に時期差があっても重複なしに群を形成できる理由とすることができよう。

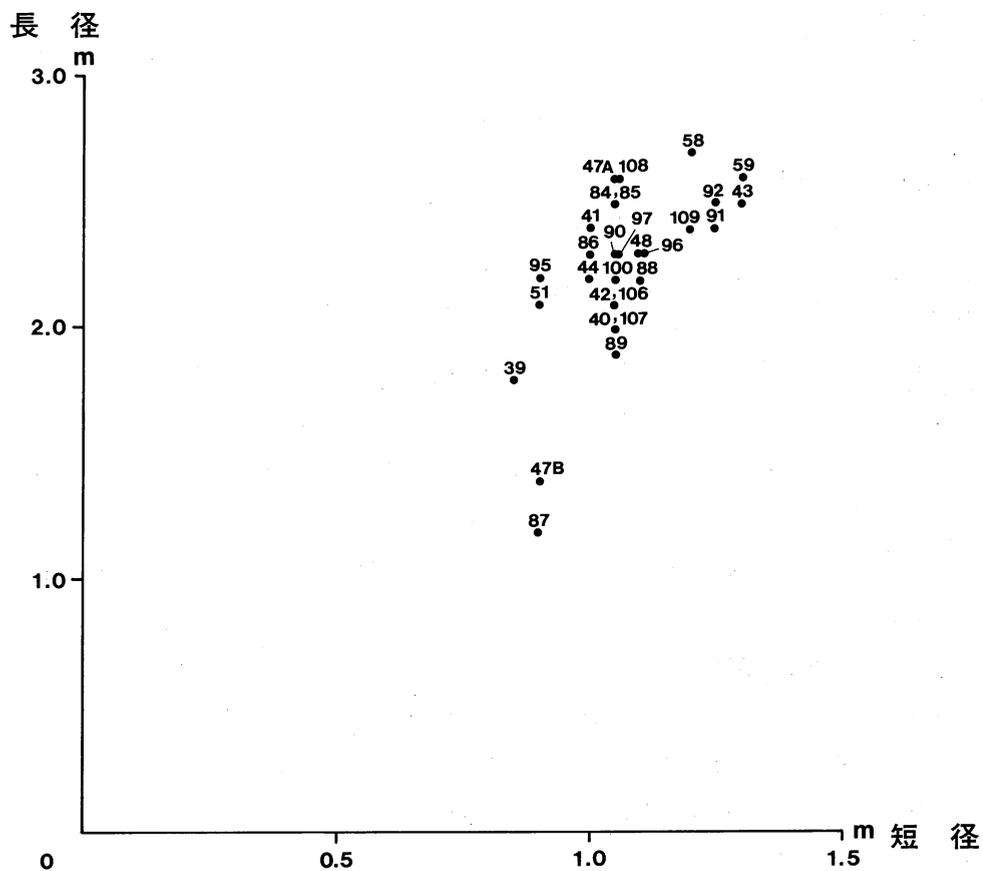
また、土器棺については、2基とも上面が耕作等の攪乱によって削平されており、単棺か合口棺かは不明であるが、土壌内に斜位に納められていたことは間違いない。この出土状態は、県内のこの時期の土器棺墓の一致した埋納形態であるが、なぜ、そのようにするのかは不明である。

次に土壌墓と土器棺墓の関係であるが、土壌墓32基に対し、土器棺墓2基と数にかなりの差がある（土器棺のいくつかは掘り込みが浅く、削平された可能性もある）。かつて、馬目順一氏は足洗遺跡での土器棺内に小児骨が納められていたこと等をもとに、土器棺は小児用、土壌墓や小竪穴墓及び配石墓は成人用と考えた<sup>(3)</sup>。

しかし、今回の調査では第117号土器棺墓から出土している貝輪が未製品であるものの口径が6.0～7.0cmと小児用としては大きく、壮年女性のもの（5.5cm以上は成人用）と考えられることや貴重な貝輪を幼児に副葬するの疑問に思われること、土器棺墓から成人骨が出土している例が増えつつある等、土器棺イコール小児用とは断言できない状況を示している。特に、当遺跡では土壌墓の中に第47B号土壌墓（長軸1.4m、短軸0.8m）や第87号土壌墓（長軸1.2m、短軸0.8m）のように他の土壌墓に比べるとかなり小形のものがあって、小児用と想定されることや、第42号土壌墓出土の管玉が覆土上層からの出土であり、再葬のために掘りおこされ



第102図 土墳墓の長軸方向



第103図 土墳墓の平面グラフ

た可能性を示しており、第86・88号土墳墓のように骨を掘りおこして近接する場所に土器棺墓を作り、再葬した可能性がある。

これらのことから、土墳墓群は近親者の集団を意味するものであり、その中でも土墳墓群での副葬品の有無は被葬者間の身分差等いろいろな関係を示すものと思われる。特に、土器棺に再葬されるのは村の長か祭祀にかかわる人で、厚葬あるいは復活を願う行為と考えることはできないだろうか。

本県における弥生時代中期後半の墓制は、北茨城市足洗遺跡<sup>(5)</sup>やひたちなか市柳沢遺跡等十数遺跡から土器棺が確認されており、土器棺墓が盛行していたものと考えられていた。しかし、今回の調査によって、土墳墓群の中に土器棺墓が存在することが明らかになった。このことは、福島県会津若松市一ノ堰B遺跡や楡葉町天神原遺跡<sup>(6)</sup>の様相と類似しており、東北地方南部の墓制との関連が考えられる。また、土墳墓群の上位に黒色土と共に細かく破碎された土器がバラまかれた状態で出土したり、黒色土内の土器と土墳墓の覆土から出土した土器が接合関係にあたり、二次火熱を受けているものも見られ、埋葬に当たっての何らかの祭祀行為があったと考えらる。これらの状況は、福島県岩代陣場遺跡や一ノ堰B遺跡等での様相とも類似しており、弥生時代中期後葉の東北地方南部から茨城県の海岸部にかけて、同じ墓制を有する集団がいたことと東北地方南部の影響のもとに足洗式土器が成立したことを物語っているものと思われる。

#### 註

- (1) 井上義安 「北茨城市足洗における甕棺調査の概報」『古代32』 1559年4月 による編年観をもとに足洗式土器を2分類した。
- (2) 福島県教育委員会 『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅳ 一ノ堰A・B遺跡』 福島県文化財調査報告書第191集 1988年3月
- (3) 本宮町教育委員会 『岩代陣場の研究』 1971年3月
- (4) 国立歴史民俗博物館の西本豊弘氏からの御教示による。愛知県渥美町教育委員会 『伊川津遺跡』 愛知県渥美町埋蔵文化財調査報告書4 1988年3月 では、貝輪の内径と現代人の腕の径のデータをもとに、貝輪をしていた人の年齢を推定している。
- (5) 井上義安 「常陸足洗発見の弥生式甕棺」『古代19・20』 1956年6月
- (6) 楡葉町教育委員会 『楡葉天神原遺蹟の研究』 1983年3月

#### 参考文献

- ・ 茨城県 『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』 1991年3月
- ・ 勝田市史編纂委員会 『勝田市史 原始・古代編』 1981年9月
- ・ 那珂湊市教育委員会 『柳沢遺跡調査報告』 1972年12月
- ・ 井上義安 「那珂湊市差洪遺跡出土の弥生式土器」『那珂川の先史遺跡』 1971年2月
- ・ 海老澤稔 「茨城県における中期後半の弥生式土器について」『婆良岐考古 第13号』 1991年5月
- ・ 福島県立博物館 『東北からの弥生文化』 1993年1月
- ・ いわき市教育委員会 『龍門寺遺跡』 いわき市埋蔵文化財調査報告第11冊 1985年3月
- ・ いわき市教育委員会 『久世原館・番匠地遺跡』 いわき市埋蔵文化財調査報告第33冊 1993年3月

# 付 章

## 土壌のリン分析について

パリノ・サーヴェイ株式会社

### I. はじめに

那珂台地は、那珂川左岸に広がり北を久慈川により限られる。差洪遺跡は、那珂台地南部の中丸川の支流の本郷川左岸の台地上に立地する。

今回の調査により、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・平安時代の遺構・遺物が検出されている。この中で、弥生時代中期後半の土坑は土壙墓と考えられ、出土した土器とともに東北南部との関係が推定されている。今回の自然科学分析調査では、これらの土坑について遺体埋納の可能性を検証するためにリン分析を行う。リン酸は、人体とくに人骨に多量に含まれ、土壌中に比較的拡散・移動しにくい。したがって、今回のように遺体が確認できない場合には、土坑覆土中のリン酸含有量を測定し、遺体埋納の可能性を定性的に検証する。

### II. 試料

2基の土坑（SK-44・SK-59）から試料が採取されている。リン分析にはSK-44上部・下部、SK-59上層・下層の計4点を選択する。

分析試料を表4に示す。各試料とも半乾の酸化状態にある。土色はSK-59下部の試料を除き、いずれも黒色味の強い褐色土を基質とし、そこに黒色味の弱い褐色土が混在する。一方、SK-59下部の試料では黒色味の弱い褐色土に黒色味の強い褐色土が混在する。土性は、いずれも粘土と砂を半々に感じるか、あるいはやや砂を多く感じる砂壤土～壤土に区分される。その他として、各試料に現在の植物根が含まれる。

表1 差洪遺跡・リン分析試料

遺構名	試料名	乾湿	土色・土性	その他
SK-44	上部	半乾	7.5YR2/2黒褐>7.5YR4/6褐・SL	植物根混在
	下部	半乾	10YR2/2黒褐>7.5YR4/6褐・L	植物根少量混在
SK-59	上層	半乾	7.5YR2/2黒褐・L	植物根混在
	下層	半乾	7.5YR4/4褐>10YR2/2黒褐・L	植物根少量混在

注. (1)土 色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。

>>…少量混在。>…混在。≥…含む。=同量存在。

(2)土 性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性の判定法による。

SL…砂壤土（粘土より砂を多く感じる）、L…壤土（砂と粘土をほぼ半々に感じる）

### III. 分析方法

土壌標準分析・測定法委員会（1986）、土壌養分測定法委員会（1981）、京都大学農学部農芸化学教室（1957）などを参考に、以下の工程で行った。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO<sub>3</sub>）約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO<sub>4</sub>）約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度

計によりリン酸( $P_2O_5$ )濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量( $P_2O_5$ mg/g)を求める。

#### IV. 結果

結果を表2に示す。土壤に普通含まれているリン酸量、いわゆる天然賦存量にはいくつかの報告事例がある(Bowen, 1983: Bolt・Bruggenwert,1980: 川崎ほか, 1991: 天野ほか, 1991)。これらの報告事例から推定されるリン酸の天然賦存量の上限値は約3.0 mg/g程度と考えられるが、今回の試料はいずれもその範囲にある。また、土坑内での試料採取位置によるリン酸含量は、SK-44はほぼ同じ含量を示すのに対し、SK-59では上層の方があきらかに高い含量を示す。

表2 差汲遺跡・リン分析結果

遺構名	試料名	リン酸含量 $P_2O_5$ mg/g
SK-44	上部	1.35
	下部	1.33
SK-59	上層	1.64
	下層	1.12

注) リン酸は乾土1gあたりのmgで表示。

#### V. 考察

今回の分析結果からは、遺体埋納を指摘できる特徴的なリン酸濃集は認められない。また、SK-59での試料採取位置によるリン酸含量の違いは、表2で示したように、試料の土質そのものの差異によるものと考えられ、外的要因による富化(リン酸成分の多い埋納物による影響)ではないと判断される。以上のことにより、SK-44・SK-59ともに遺体埋納を前提に考えた場合には、リン酸の系外への拡散が推定される。

今後は、今回と同じような分析調査事例を考古学的知見と対比させるとともに、拡散の予想されるリン酸を3次元的かつ、細かいサンプリングで分析することが望まれる。

#### 引用文献

- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信(1991) 中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編『土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発』 p.28-36.
- Bowen.H.J.M. (1983) 『環境無機化学-元素の循環と生化学-』. 浅見輝男・茅野充男訳, 297p., 博友社 [Bowen.H.J.M. (1979) Environmental Chemistry of Elements.].
- Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M. (1980) 『土壤の化学』. 岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行訳,309p., 学会出版センター[Bolt,G.H.and Bruggenwert,M.G.M. (1976) SOIL CHEMISTRY], p.235 -236
- 土壤標準分析・測定法委員会編(1986) 『土壤標準分析・測定法』. 354p.,博友社.
- 土壤養分測定法委員会編(1981) 『土壤養分分析法』. 440p.,養賢堂.
- 藤貫 正(1979) カルシウム. 地質調査所科学分析法, 52: 57-61, 地質調査所.
- 川崎 弘・吉田 滯・井上恒久(1991) 九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省 農林水産技術会議事務局編『土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発』. 149p: p.23-27.

京都大学農学部農芸化学教室編（1957）『農芸化学実験書 第1巻』, 411p.,産業図書.

農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖.

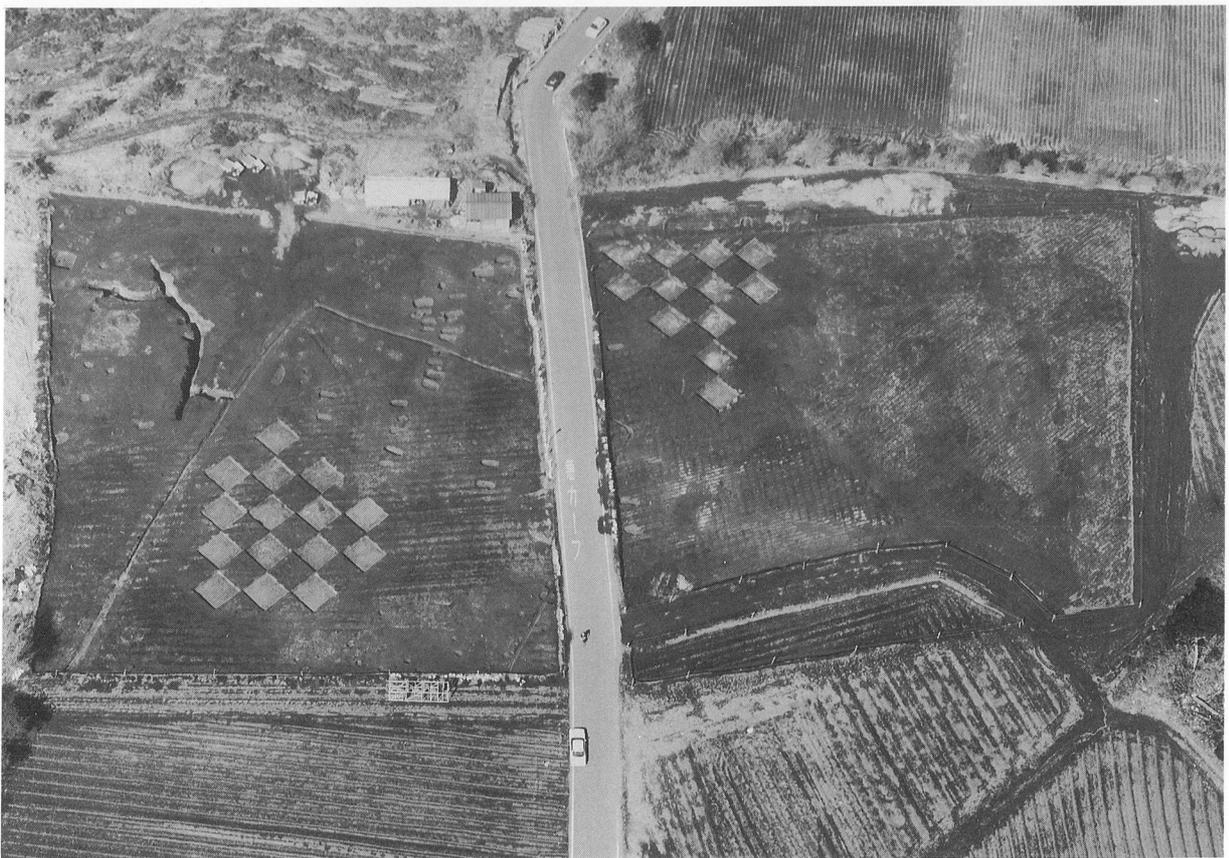
ペドロジスト懇談会編（1984）『土壌調査ハンドブック』, 156p.,博友社.

竹迫 紘・加藤哲郎・坂上寛一・黒部 隆（1980）神谷原遺跡への土壌学的アプローチ. 神谷原 I, p.412 - 416, 八王子市柵田遺跡調査会.

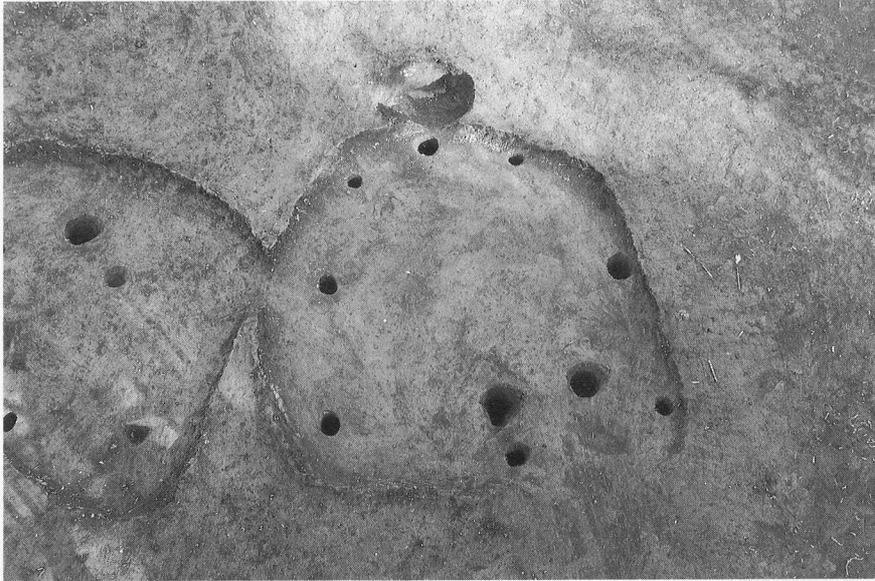
写 真 图 版



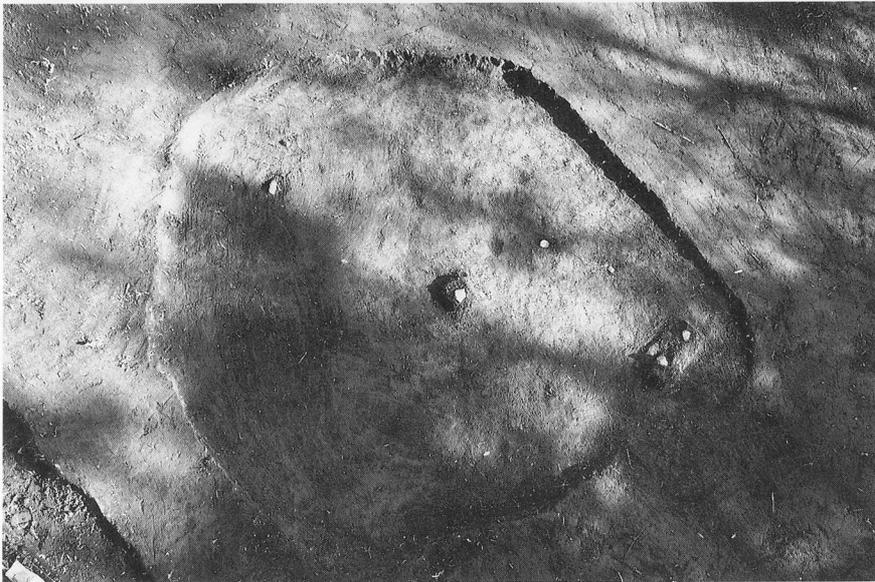
遺跡遠景



遺跡全景



第 1 号住居跡



第 1 号住居跡遺物出土状況



第 2 号住居跡



第 2 号住居跡遺物出土状況



第 3 号住居跡



土墳墓B群

PL 4



土墳墓C群



土墳墓D群



土墳墓B・C・D・E群



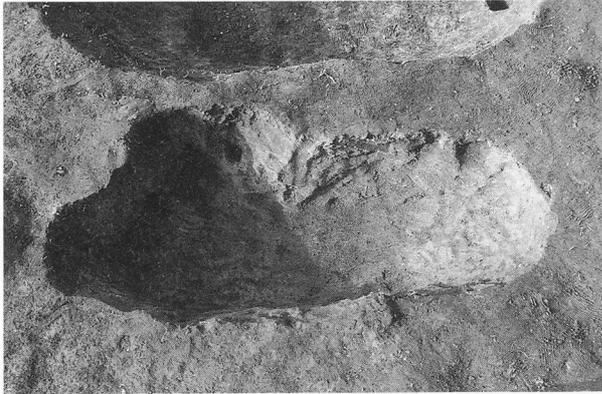
土墳墓E群



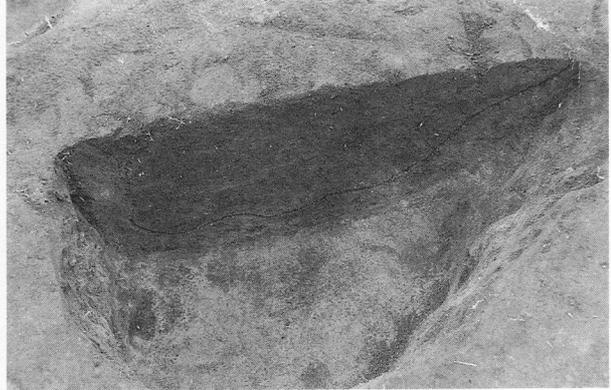
土墳墓E群



土墳墓F群



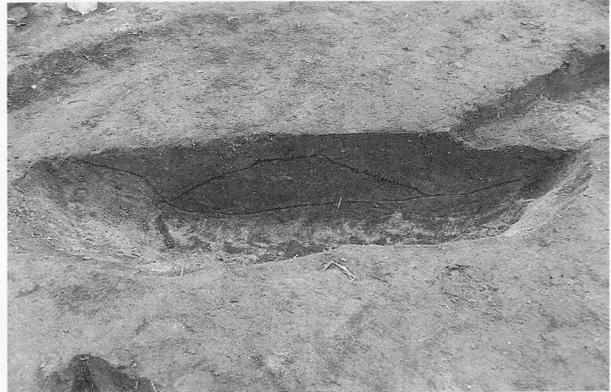
第39号土壙墓



第39号土壙墓土层断面



第40号土壙墓



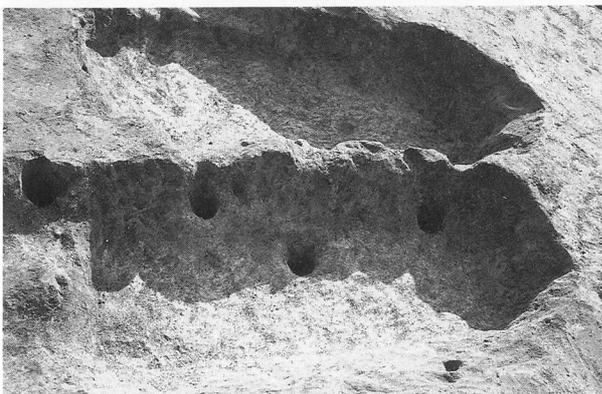
第40号土壙墓土层断面



第41号土壙墓遺物出土狀況



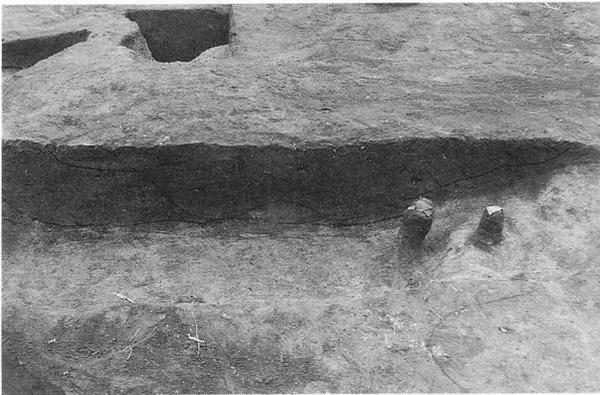
第41号土壙墓土层断面



第42号土壙墓



第42号土壙墓遺物出土狀況



第42号土墳墓土層断面



第43号土墳墓遺物出土状况



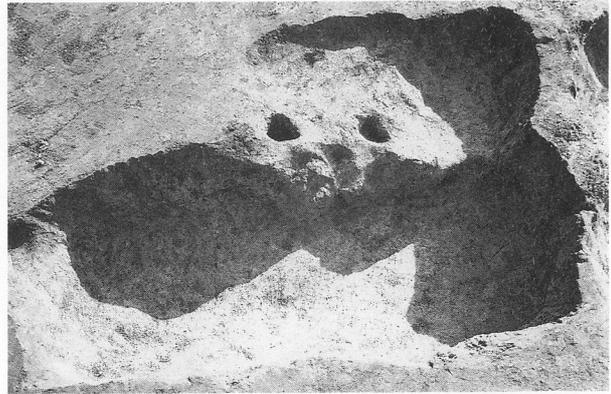
第43号土墳墓遺物出土状况



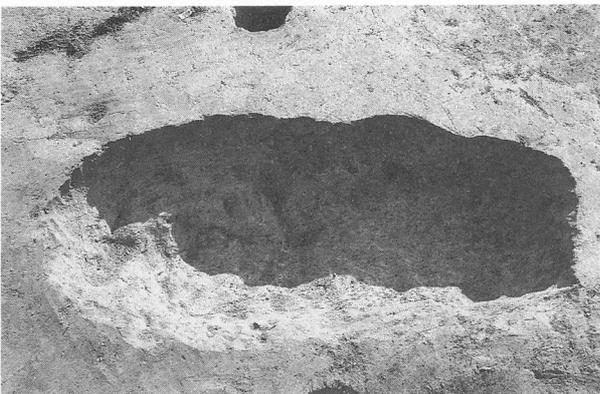
第43号土墳墓土層断面



第44号土墳墓遺物出土状况



第47A・B号土墳墓



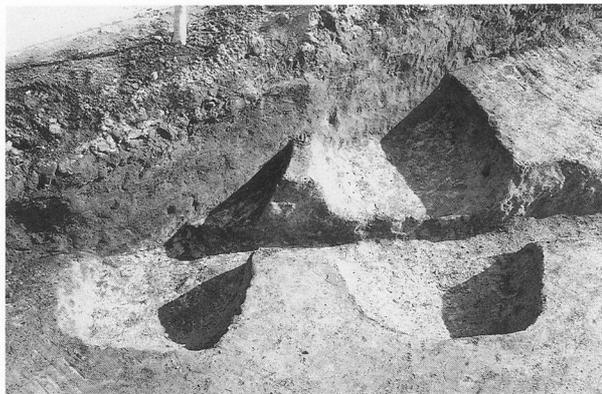
第48号土墳墓



第48号土墳墓土層断面



第53号土壙墓土层断面



第68·69号土壙墓



第58号土壙墓



第58号土壙墓土层断面



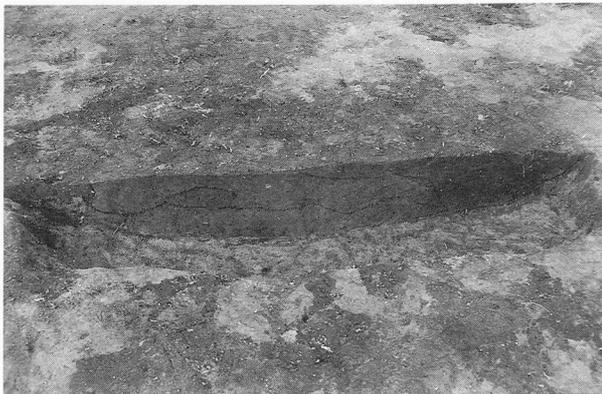
第59号土壙墓



第59号土壙墓土层断面



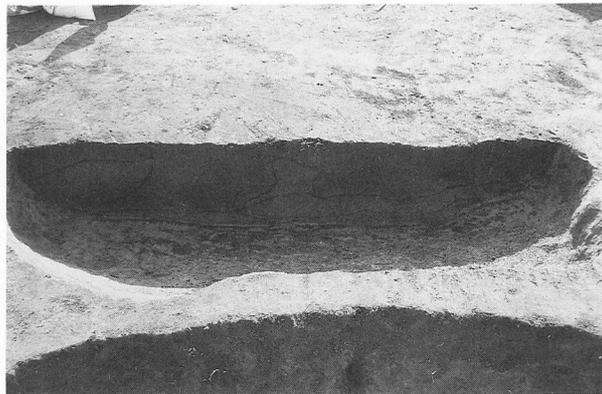
第84号土壙墓



第84号土壙墓土层断面



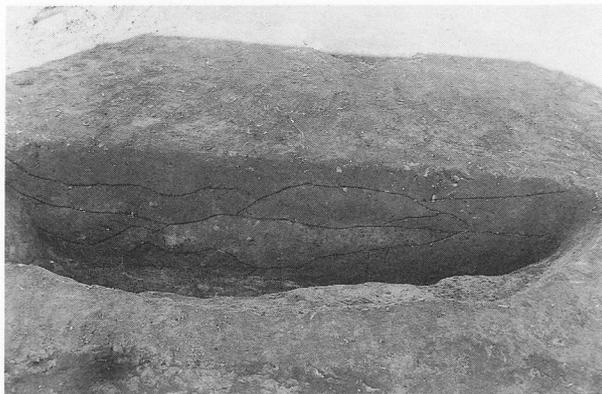
第91号土壙墓



第91号土壙墓土层断面



第92号土壙墓



第92号土壙墓土层断面



第95号土壙墓



第95号土壙墓土层断面



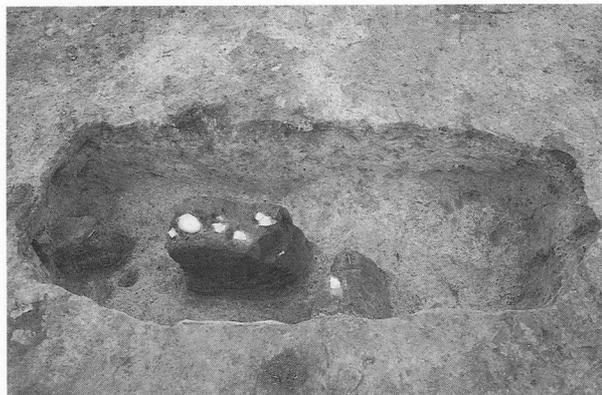
第96号土壙墓



第96号土壙墓土层断面



第85·86·87号土壙墓



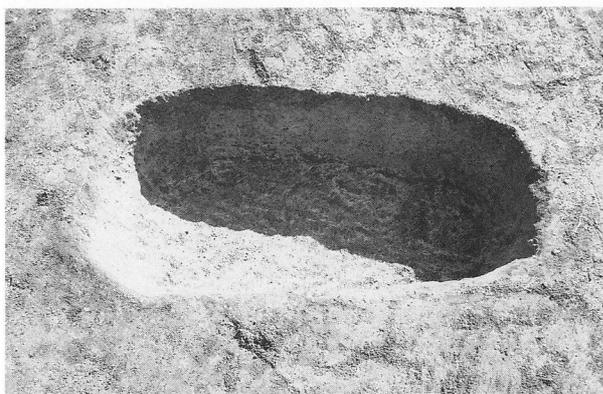
第85号土壙墓遺物出土狀況



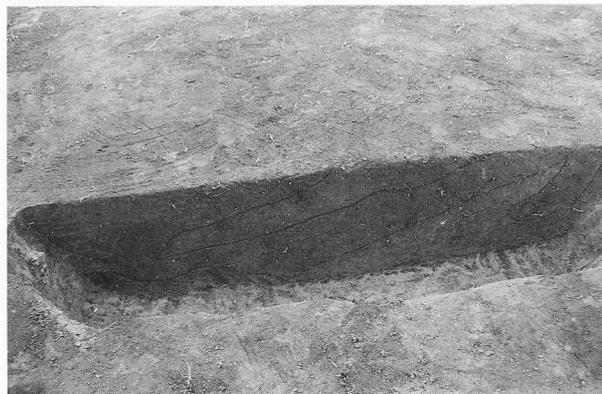
第86号土壙墓



第87号土壙墓



第88号土壙墓



第88号土壙墓土层断面



第88号土壙墓遺物出土狀況



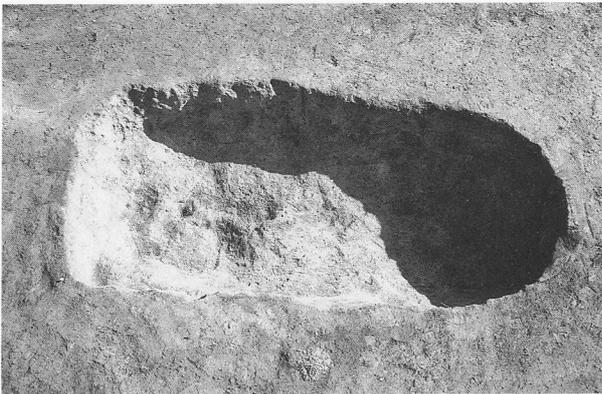
第89号土壙墓



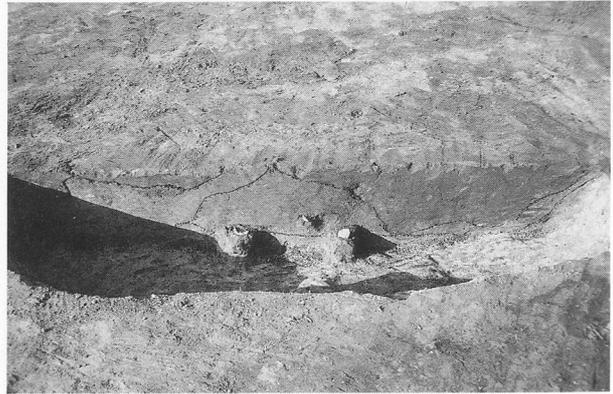
第90号土壙墓



第90号土壙墓土层断面



第97号土壙墓



第97号土壙墓土层断面



第100号土壙墓



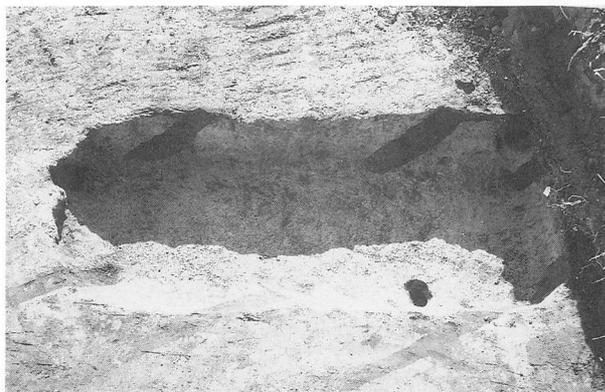
第100号土壙墓土层断面



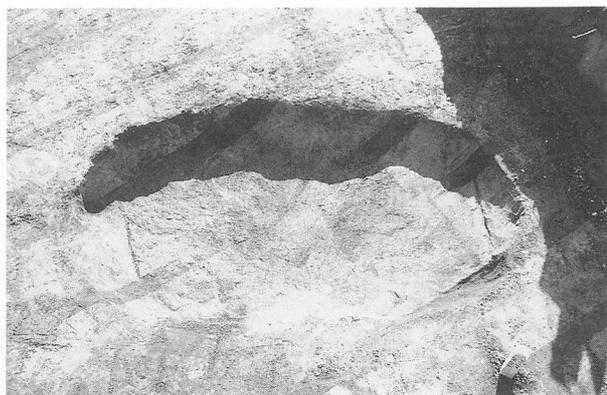
第106号土壙墓



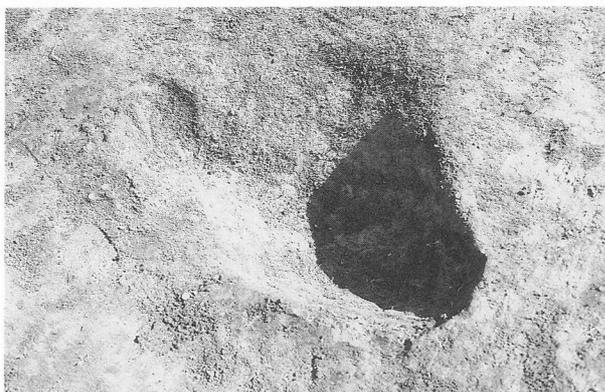
第107号土壙墓



第108号土墳墓



第109号土墳墓



第94号土墳



第94号土墳遺物出土狀況



第117号土墳



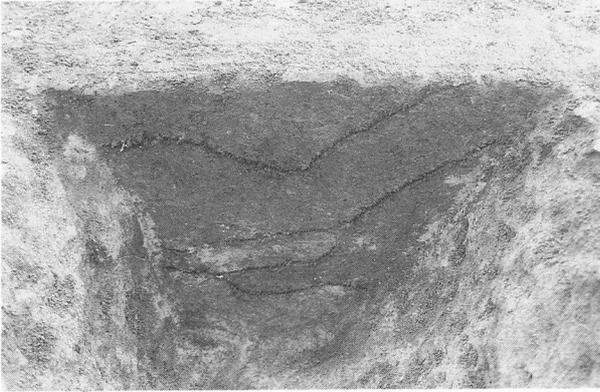
第1号炉穴



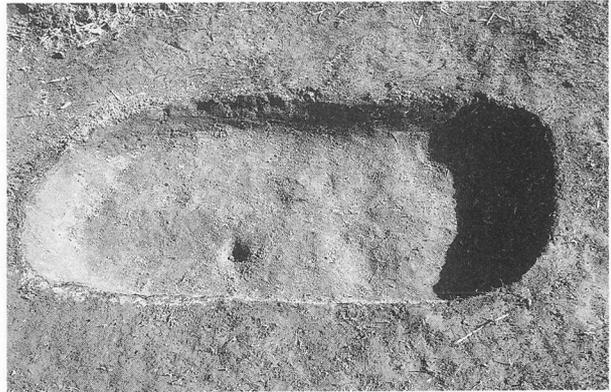
第1号溝



第1号溝



第 1 号溝土層断面



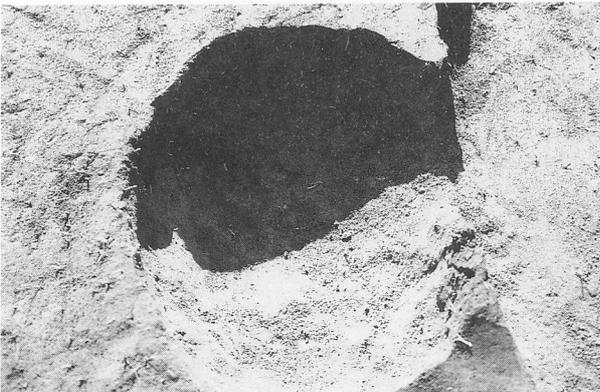
第 2 号土坑



第 3 号土坑



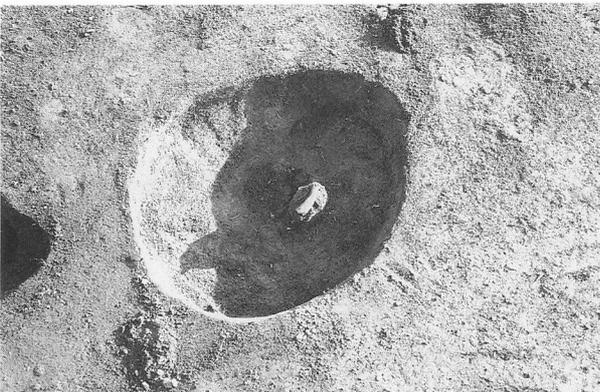
第 8 号土坑



第 16 号土坑



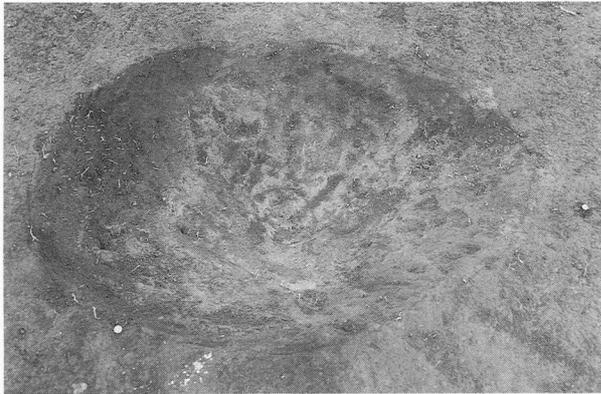
第 19 号土坑



第 20 号土坑



第 36 号土坑



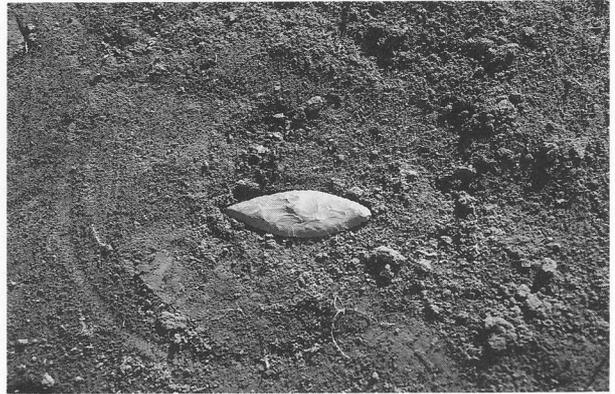
第104号土坑



旧石器剥片出土状况



旧石器集石出土状况



石槍出土状况



第1号防空壕跡全景



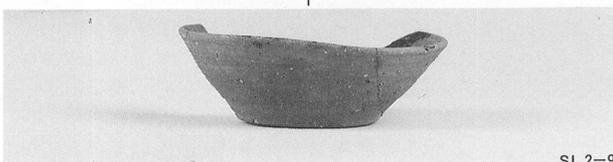
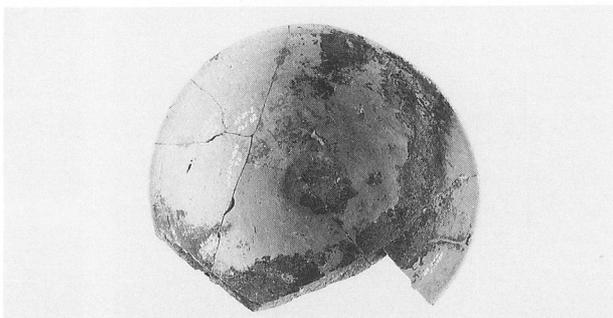
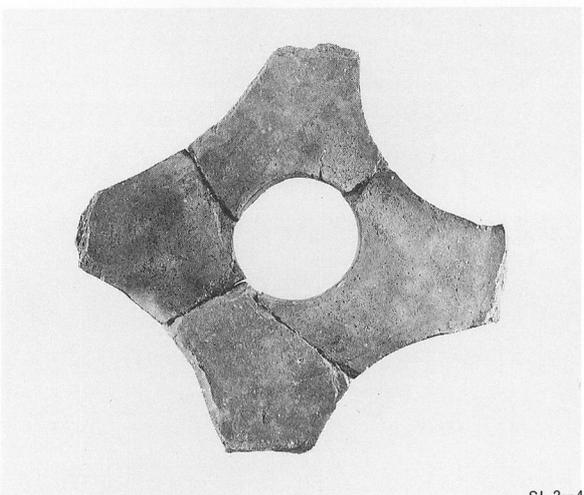
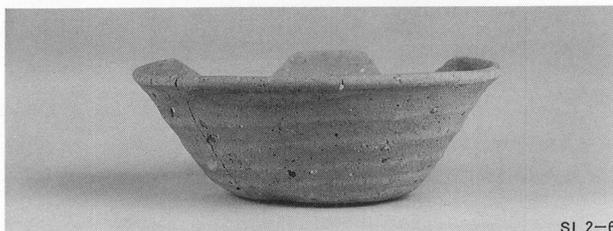
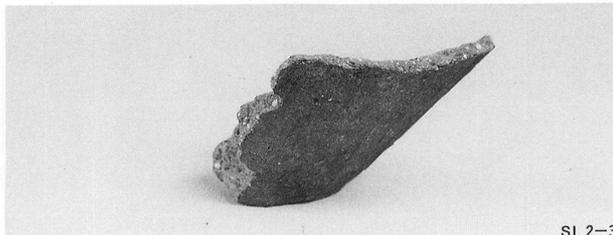
第1号防空壕跡全景



第1号防空壕跡

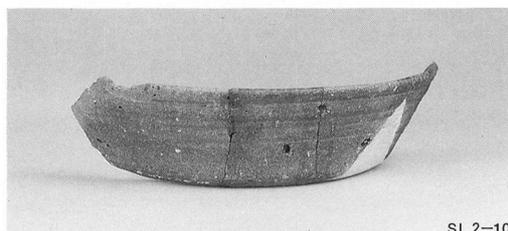


第1号防空壕跡



第1・2号住居跡出土遺物

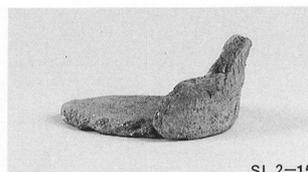
P L 16



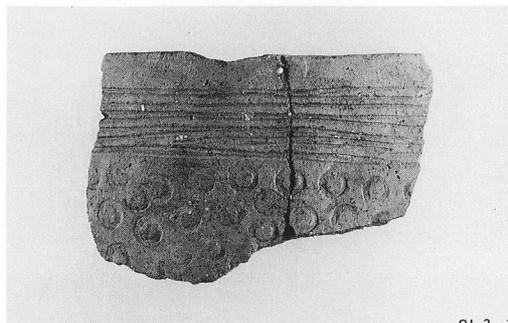
SI 2-10



SI 2-11



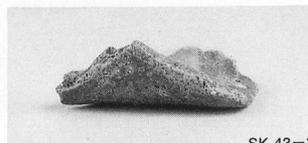
SI 2-15



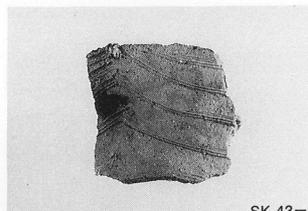
SI 3-1



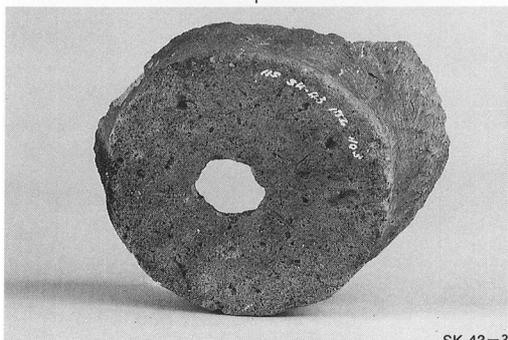
SK 42-1



SK 43-2



SK 43-1



SK 43-3



SK 47-1



SK 44-1



SK 47-3

第2・3号住居跡、土墳墓出土遺物



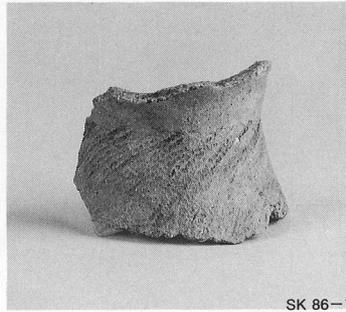
SK 59-1



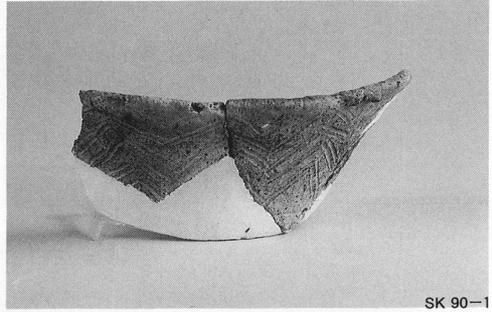
SK 85-1



SK 85-2



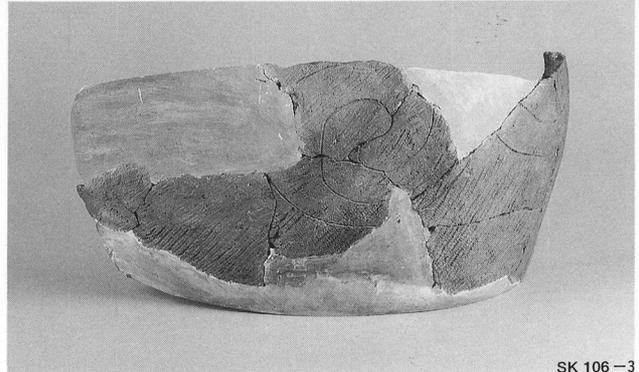
SK 86-1



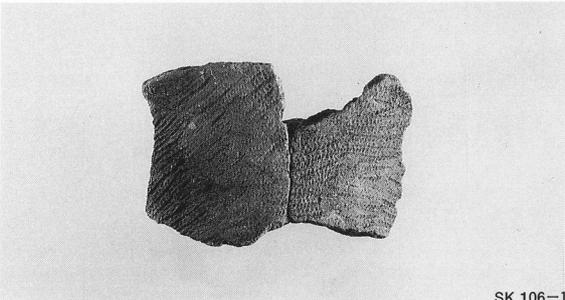
SK 90-1



SK 94-1



SK 106-3



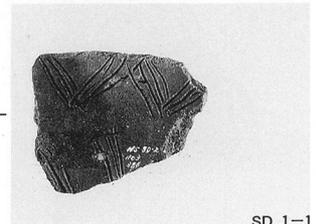
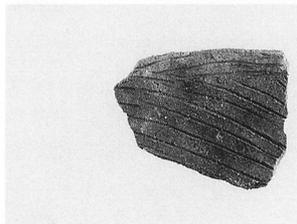
SK 106-1



SK 117-1

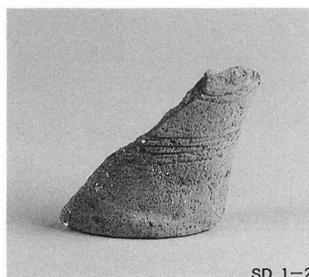


SK 106-2

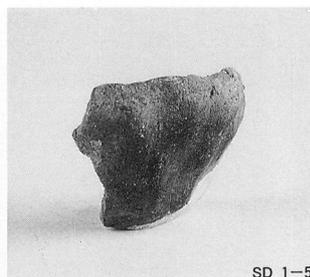


SD 1-1

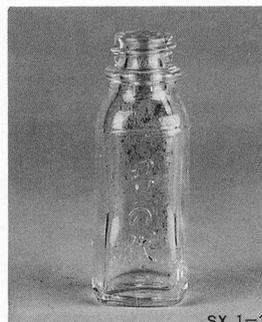
土墳墓、土壇、溝 出土遺物



SD 1-2



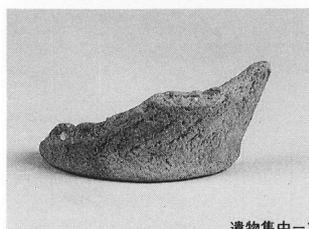
SD 1-5



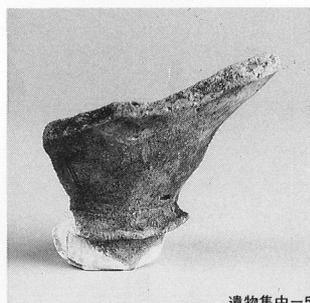
SX 1-2



SX 1-3



遺物集中-1



遺物集中-5



遺物集中-6



遺物集中-3



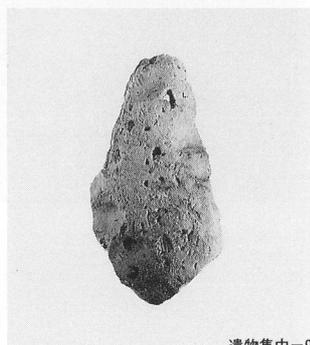
遺物集中-8



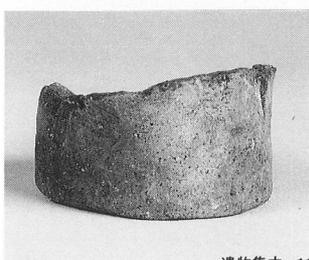
遺物集中-10



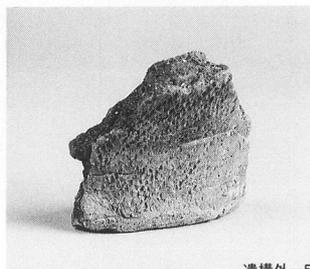
遺物集中-7



遺物集中-9



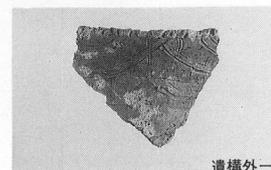
遺物集中-11



遺構外-5



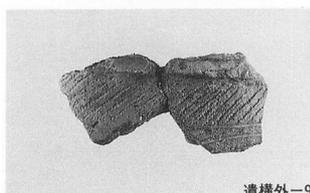
遺構外-6



遺構外-3



遺構外-4



遺構外-9



遺構外-10



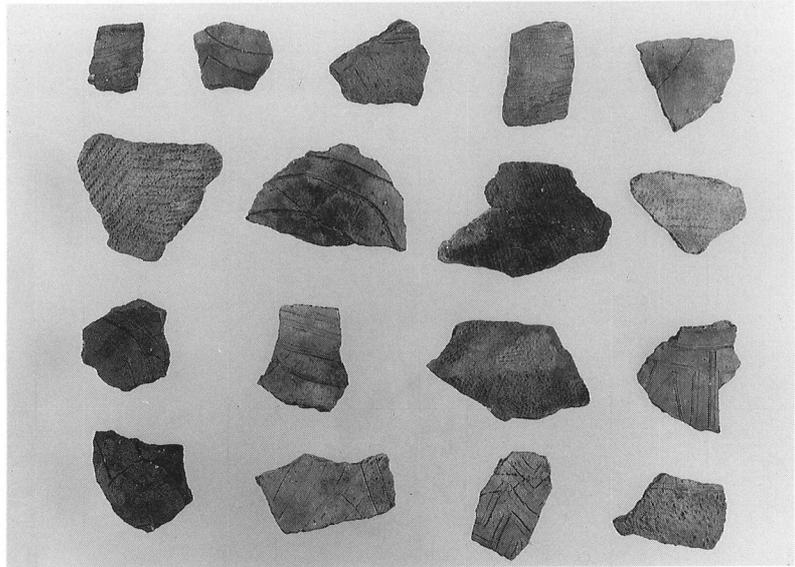
遺構外-11

12-2 12-3 14-1 14-2 16-3

16-4 16-7 16-6 16-5

16-8 18-7 18-13 18-9

18-8 18-11 18-10 18-12



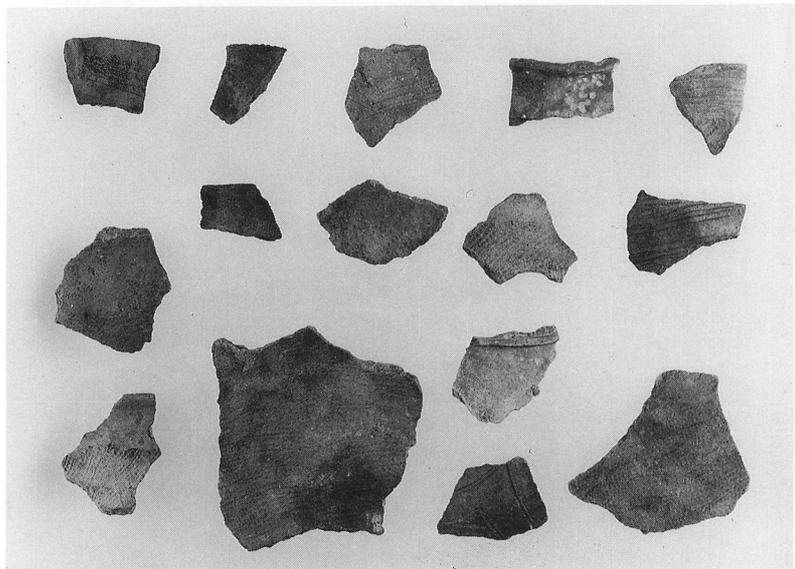
20-3 20-2 20-4 20-5 22-5

22-4 22-8 22-7 24-6

24-1

26-4

26-2 26-1 26-3 28-1

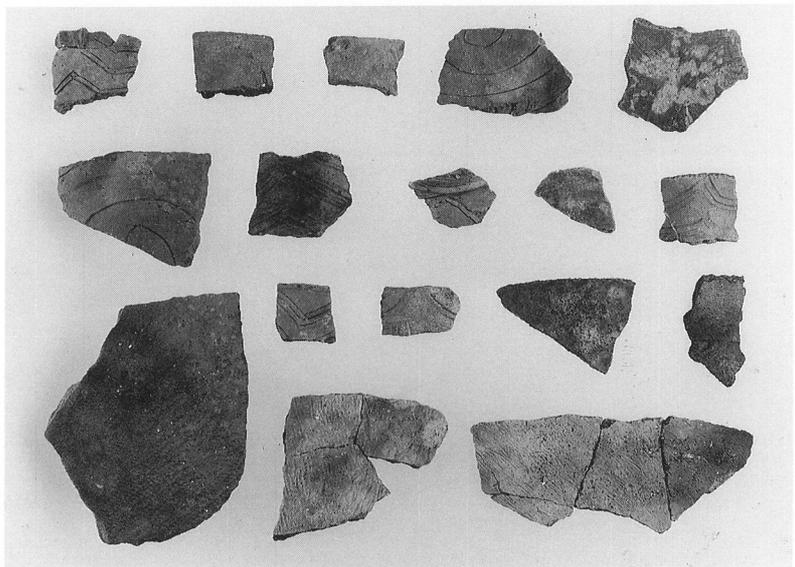


31-4 31-3 31-5 31-7 31-9

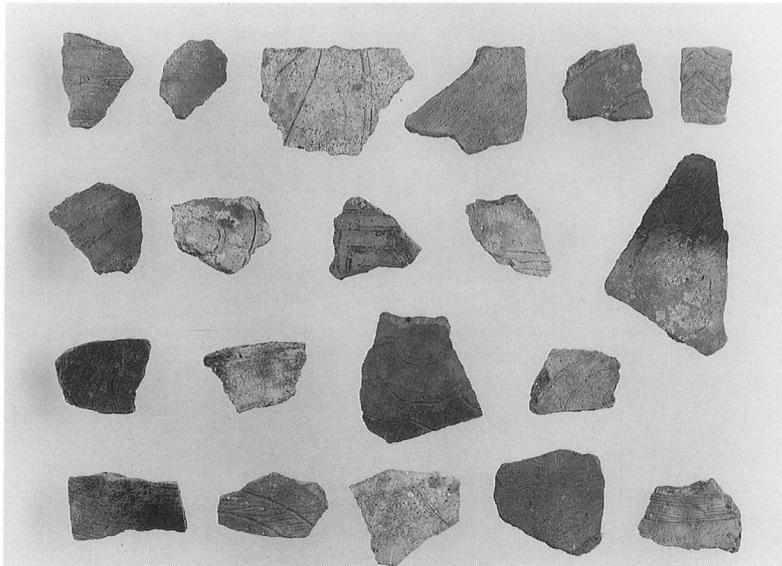
31-8 31-6 31-11 31-10 33-1

33-2 35-1 38-4 38-5

33-3 38-8 38-9



出土土器(1)〔版下番号一図版番号〕



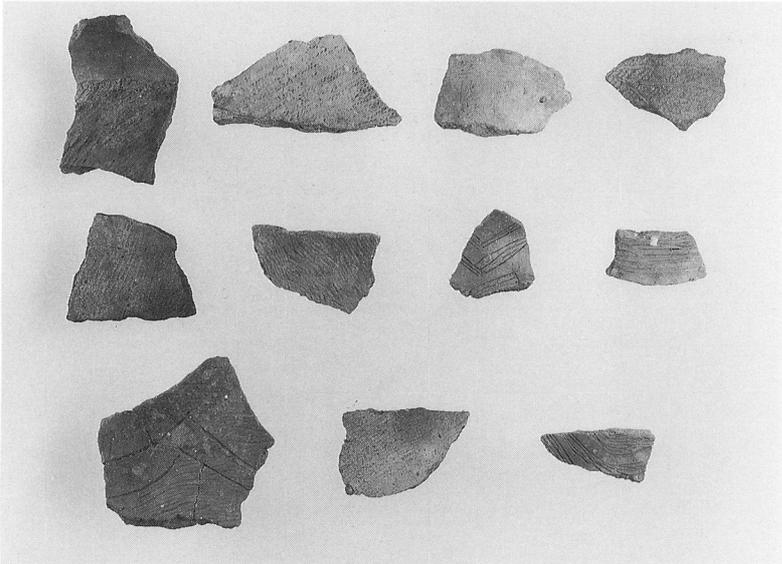
38-6 38-7 40-2 40-4 40-3 42-1

44-5 44-3 44-4 46-1

48-3

50-2 52-1 52-2 52-3

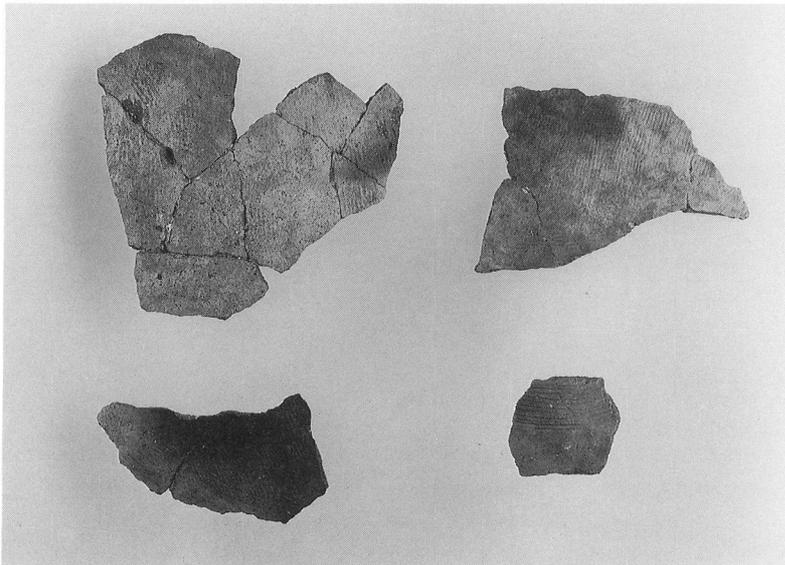
54-3 54-2 56-1 56-3 56-2



58-1 58-2 58-3 60-4

60-3 60-2 60-6 60-5

62-6 62-5 62-7



67-2 69-2

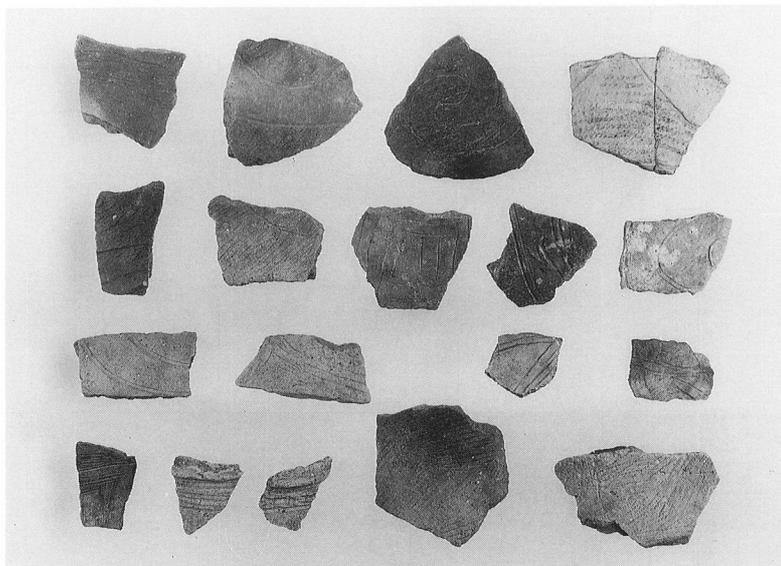
69-3 69-4

72-6      72-7      72-8      72-9

72-10    72-11    72-12    72-13    72-14

72-15      72-16      72-17      72-18

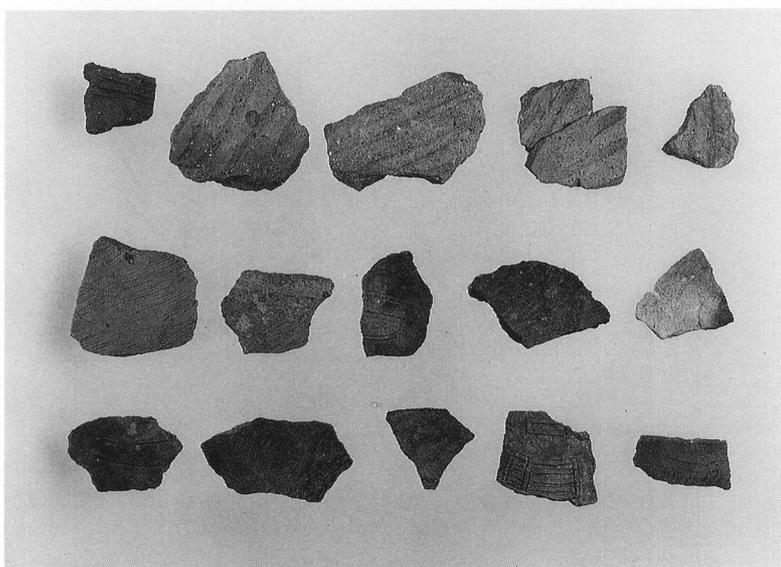
72-19    72-20    72-21    72-22    72-23



74-1    76-1    76-2    76-3    76-4

78-1    78-2    78-3    80-1    80-2

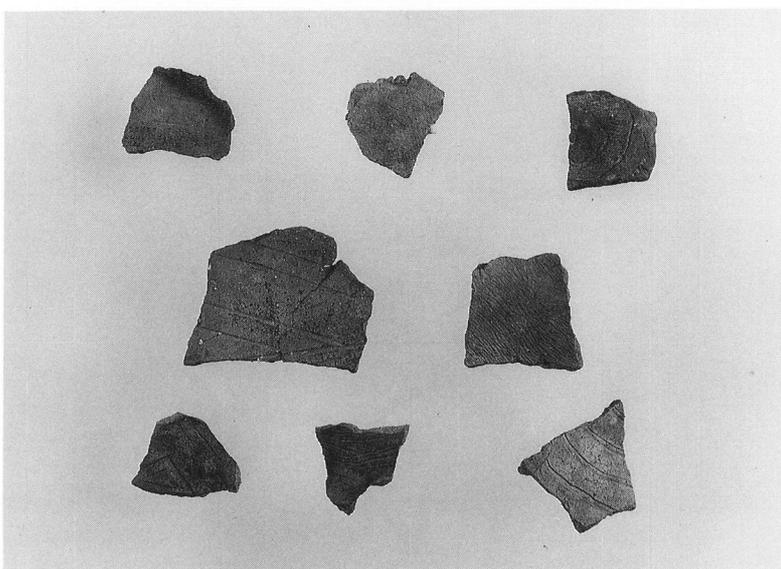
83-1    86-1    90-1    90-3    90-2

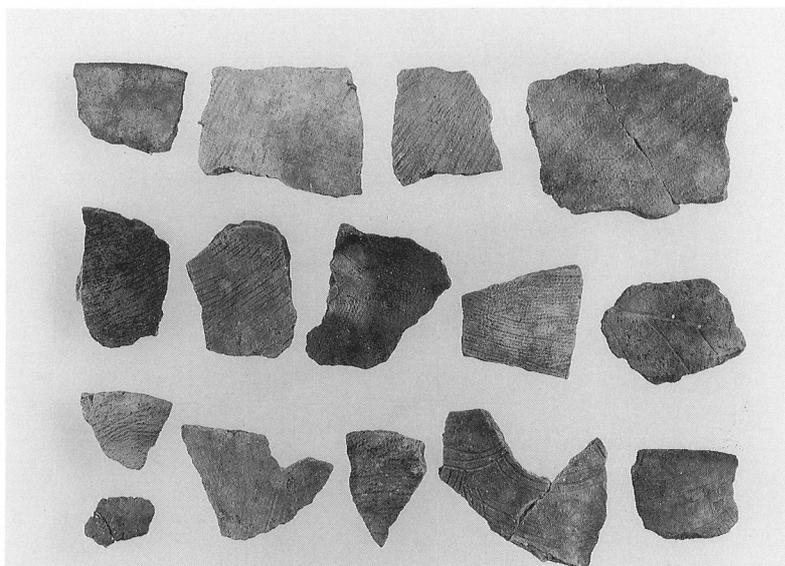


95-4                    95-6                    95-8

95-5                    95-7

95-9                    95-10                    95-11



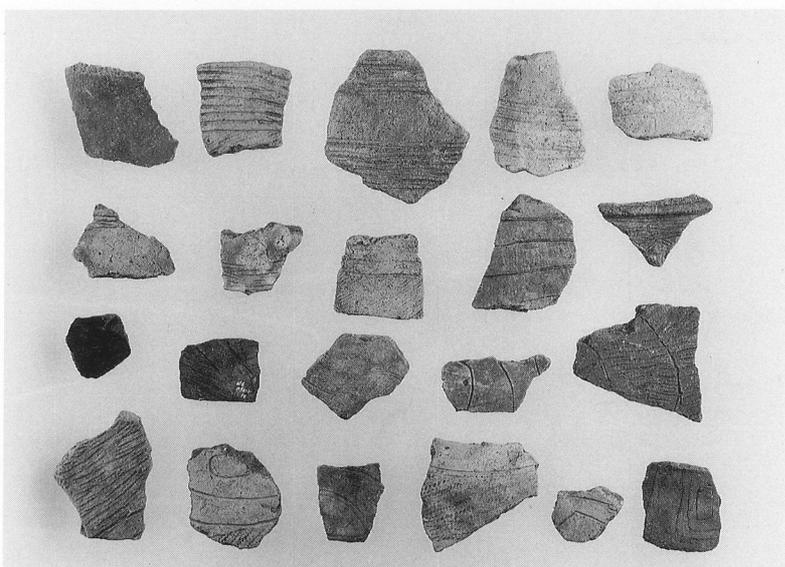


96-15      96-16      96-17      96-18

96-19    96-20    96-21    96-22    96-23

96-24

96-25    96-26    96-27    96-28    96-29

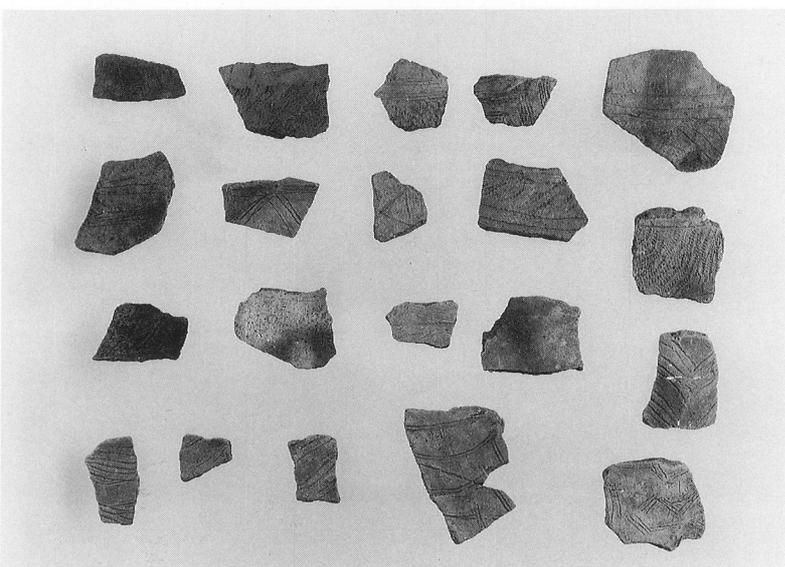


97-30    97-31    97-32    97-33    97-34

97-35    97-36    97-37    97-38    97-40

97-41    97-42    97-43    97-44    97-45

97-46    97-47    97-48    97-49    97-50    97-51



97-52    97-53    97-54    97-55    97-56

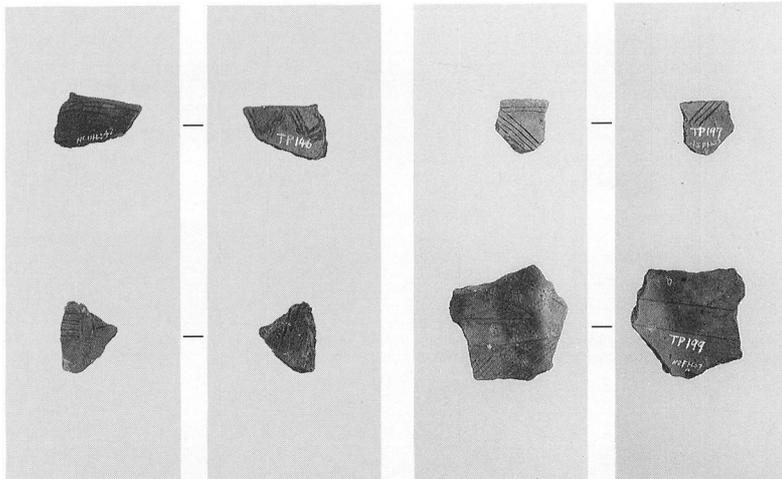
97-57    97-58    97-60    97-61    97-62

97-63    97-64    97-65    97-66    97-67

97-68    97-69    97-70    97-71    97-72

97-73

97-74



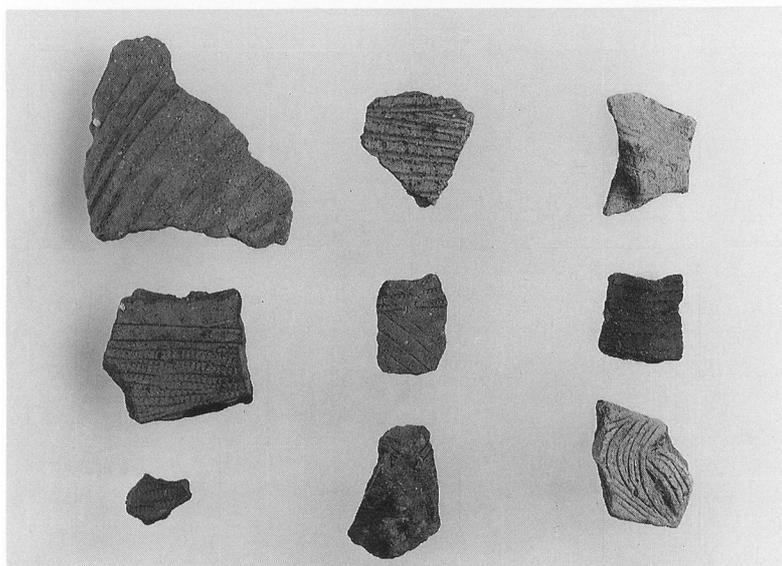
97-39

97-59

99-12

99-13

99-14



99-15

99-16

99-17

99-18

99-19

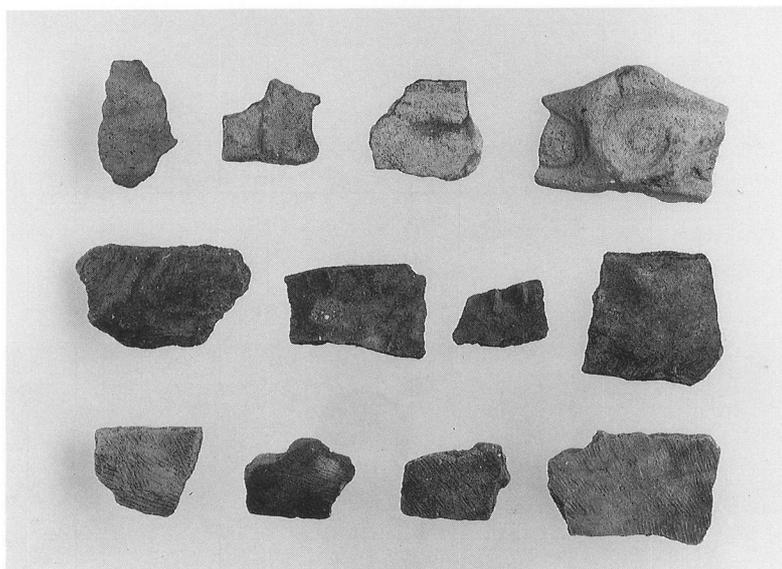
99-20

99-21

99-22

99-23

99-24



99-25

99-26

99-27

99-28

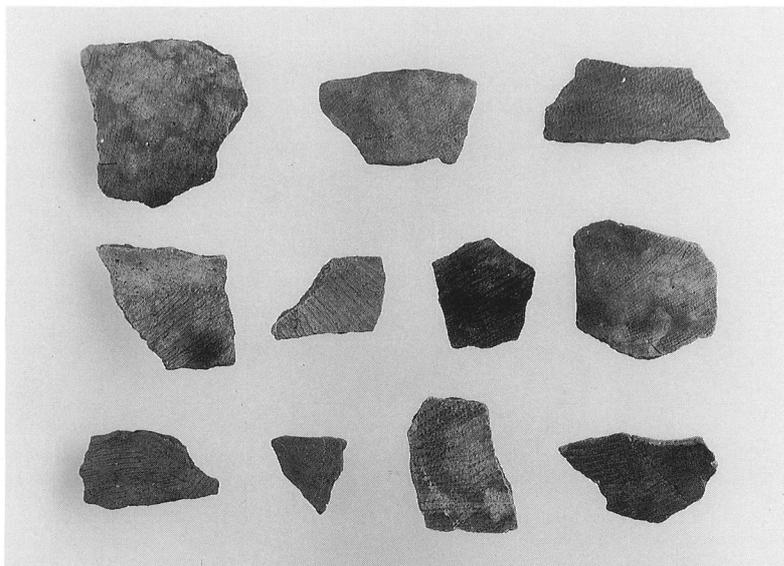
99-29

99-30

99-31

99-32

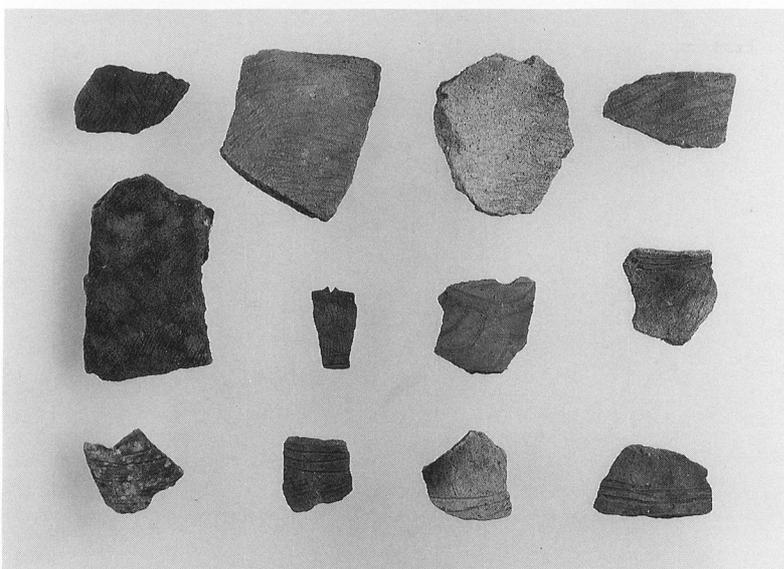
出土土器(5)



99-33                      99-34                      99-35

99-36                      99-37                      99-38                      100-39

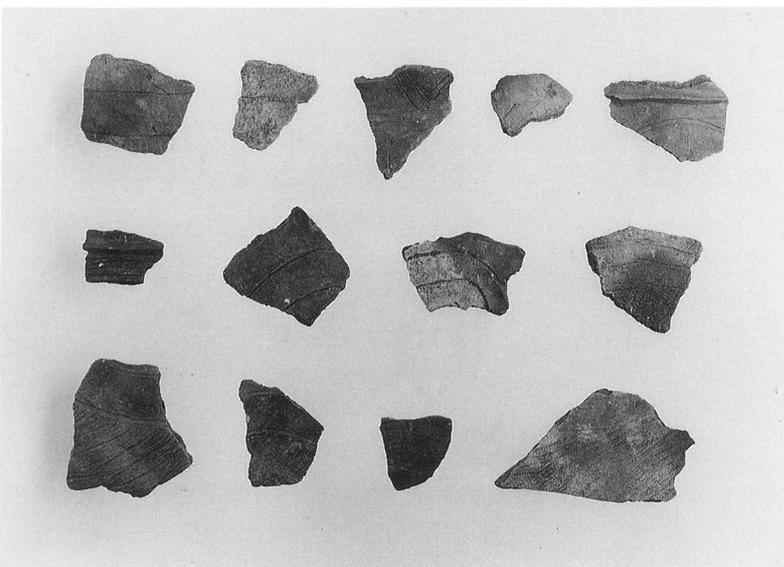
100-40                      100-41                      100-42                      100-43



100-44                      100-45                      100-46                      100-47

100-49                      100-50                      100-51                      100-53

100-54                      100-55                      100-56                      100-57



100-58                      100-59                      100-61                      100-62                      100-63

100-64                      100-65                      100-66                      100-67

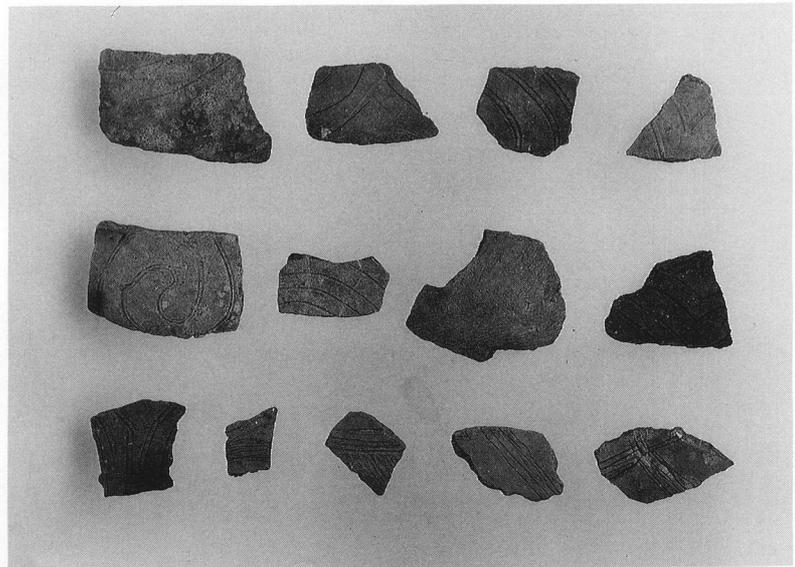
100-68                      100-69                      100-74                      100-70

出土土器(6)

100-71 100-72 100-75 100-83

100-76 100-78 100-81 100-82

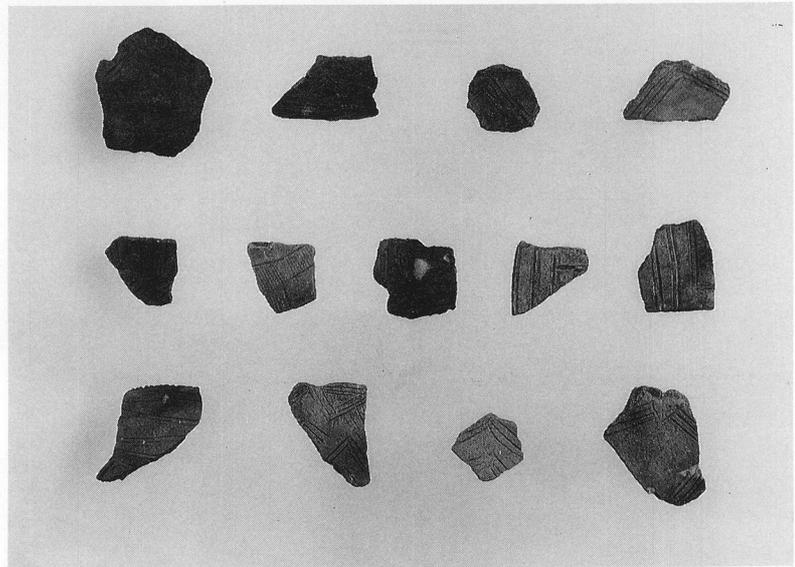
100-84 100-85 100-86 100-87 100-88



100-89 100-91 100-92 100-93

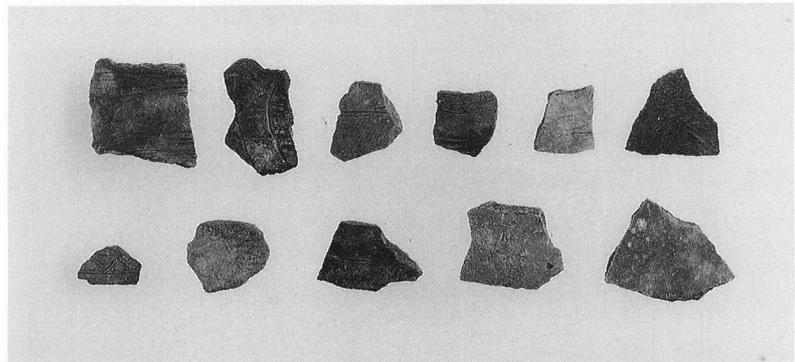
100-95 101-97 101-98 101-99 101-100

101-104 101-105 101-106 101-107



100-60 100-73 100-77 100-79 100-80 100-90

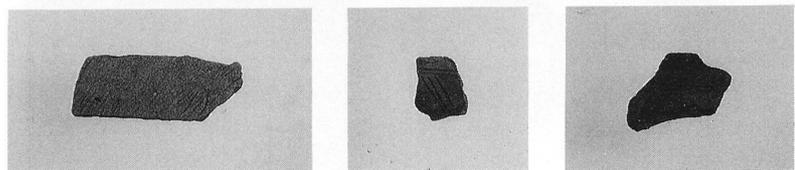
100-94 100-96 101-101 101-102 101-103



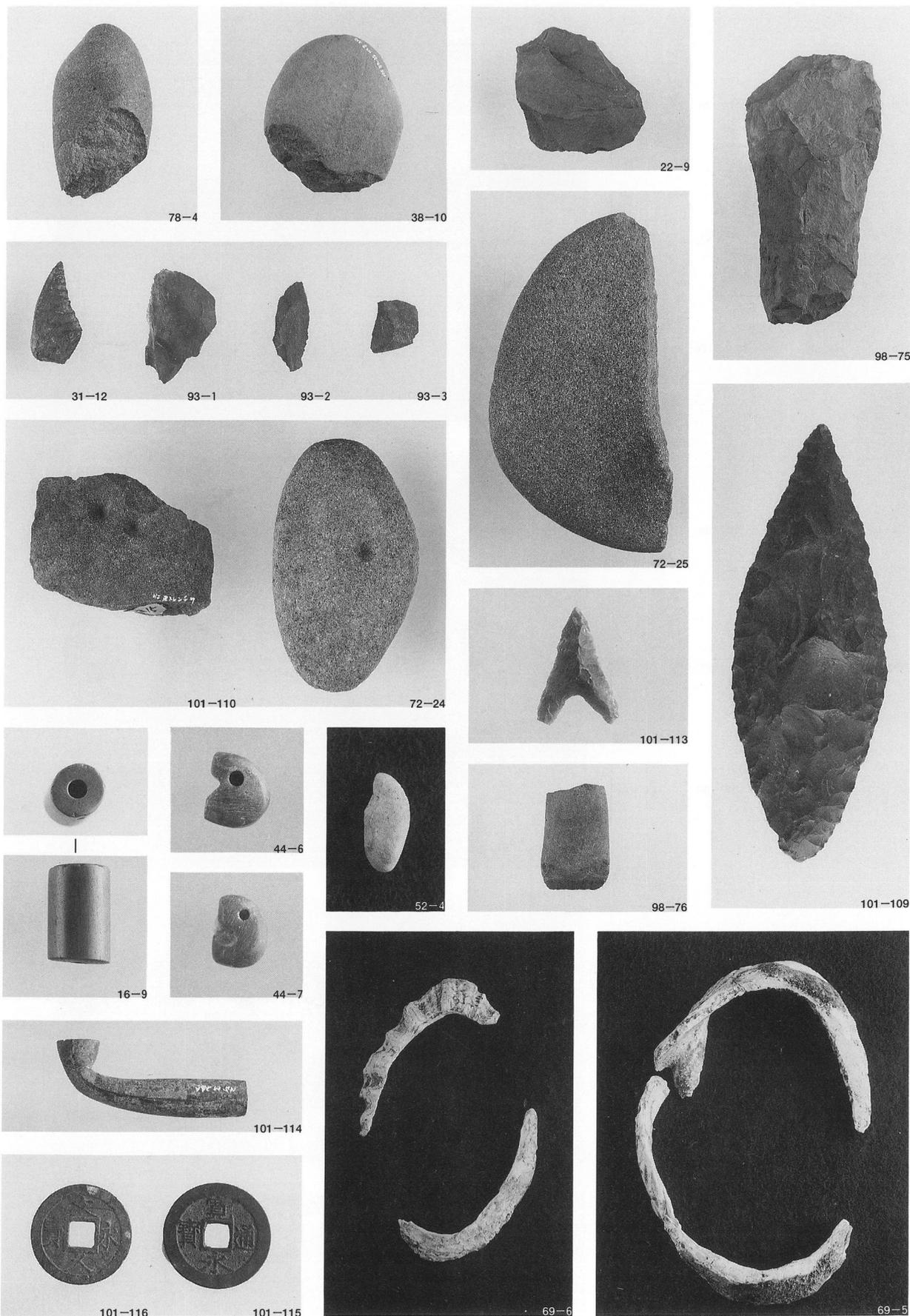
100-48

101-108

100-52



出土土器(7)



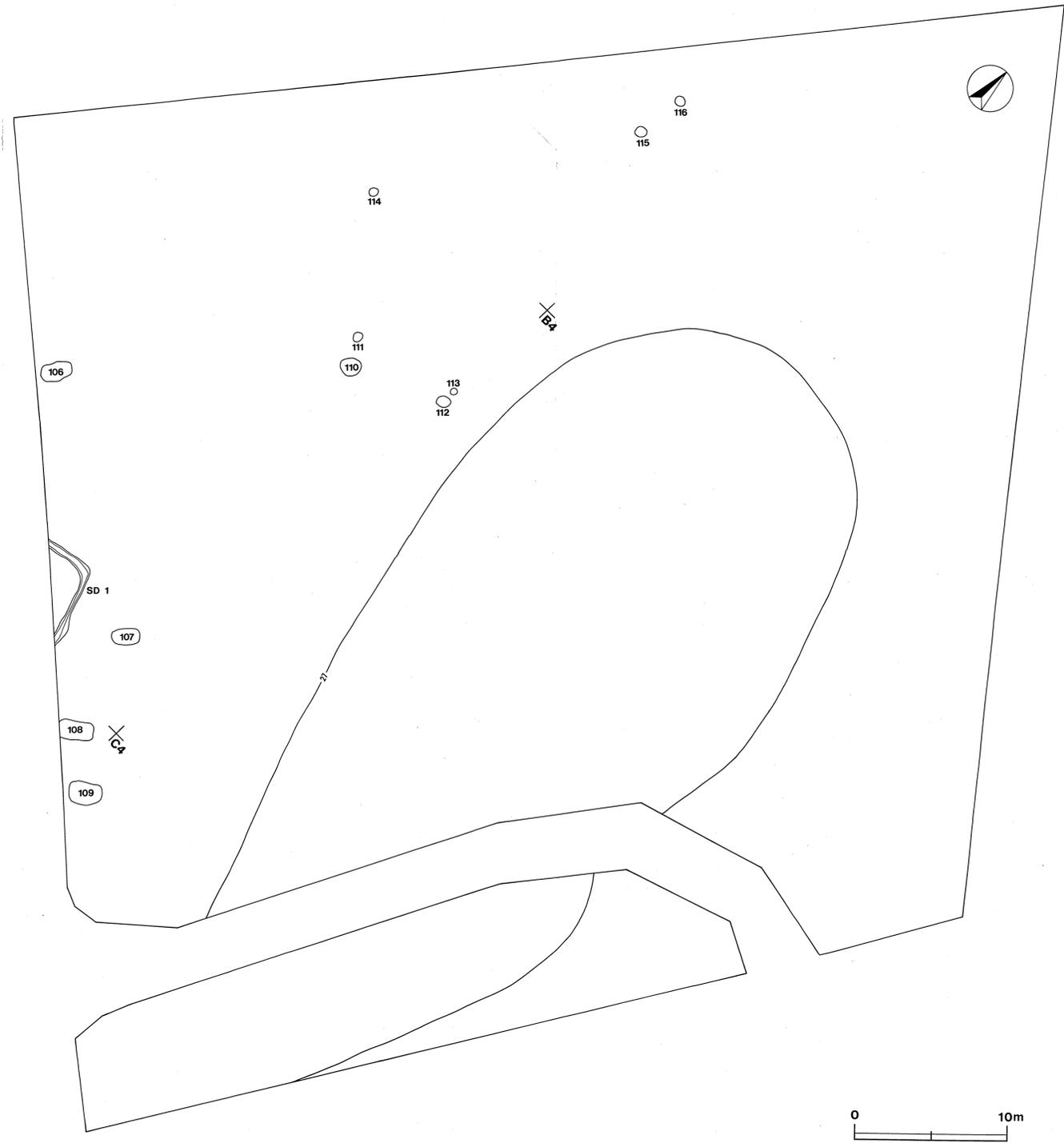
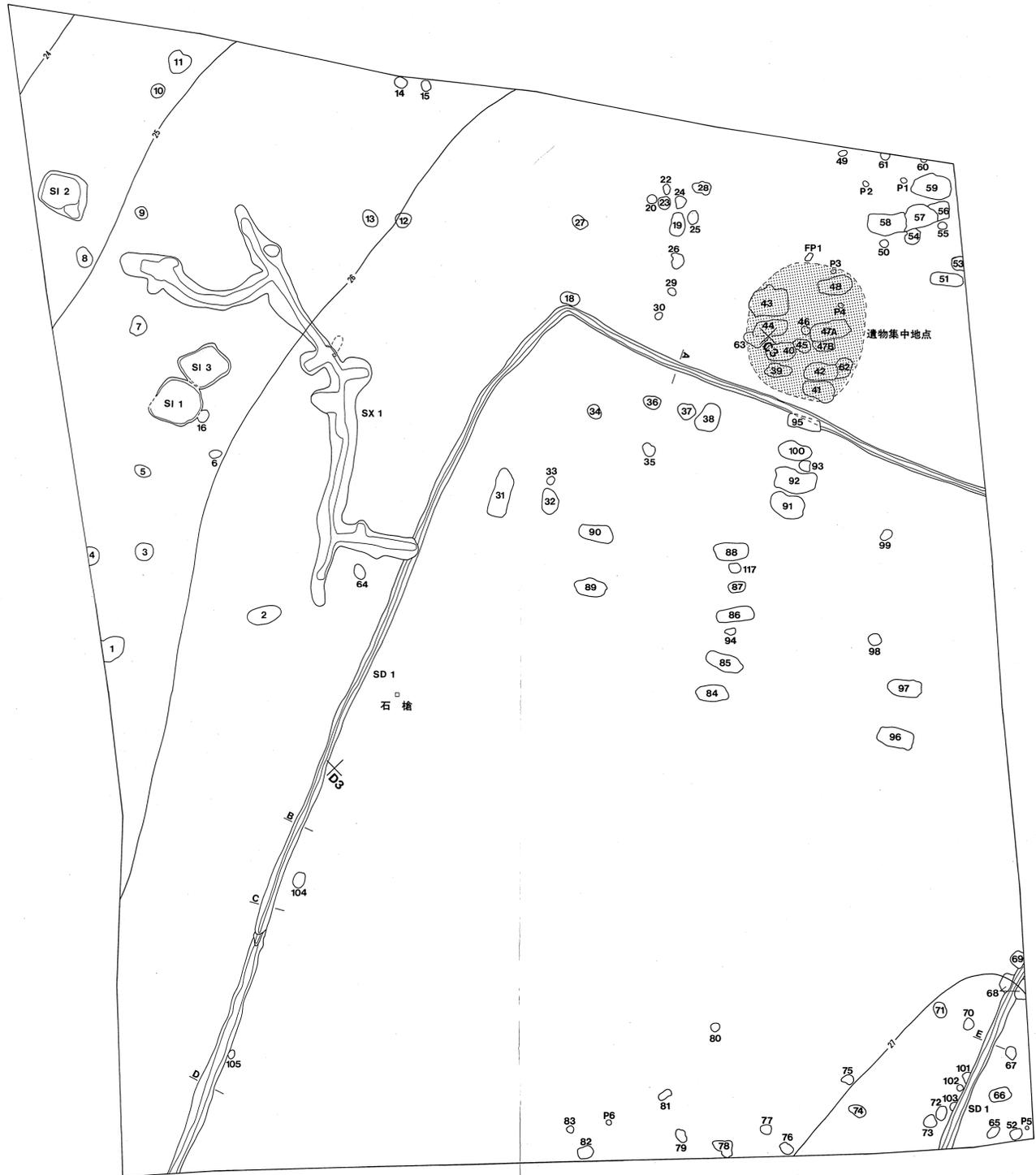
出土石器、石製品、金屬製品、古錢、自然遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第103集  
一般国道6号東水戸道路改築工事  
地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ

差 込 遺 跡

平成7（1995）年9月25日印刷  
平成7（1995）年9月30日発行

発 行 財団法人 茨城県教育財団  
〒310 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県生涯学習センター分館内  
T E L 029-225-6587  
印 刷 株式会社 三栄印刷  
〒311-41 水戸市谷津町1-50  
T E L 029-252-6501



付図 差洗遺跡全体図